関西学院考古

No. 8

目　　次

＝論　　文＝

伊和大神と伊和族 ── 兵庫県宍粟郡一宮町伊和中山１号墳と関連して ──
…… 福　島　好　和 …… 1

＝調査報告＝

長尾山の古墳群（Ⅳ）── 雲雀山西尾根古墳群 ──
…… 関西学院大学考古学研究会 …… 8

滋賀県高島郡高島町拝戸古墳群第３支群第10号墳現状調査報告
…… 関西学院大学考古学研究会 …… 27

中世の花崗岩石切場を訪ねて ── 滋賀県蒲生郡日野町蔵王勝手谷踏査記 ──
…… 兼　康　保　明 …… 33

＝研究ノート＝

横穴式石室の平面企画についてⅡ ── 畿内における主要横穴式石室の検討 ──
…… 岡　野　慶　隆 …… 40

古墳出現期越後における外来系土器
…… 坂　井　秀　弥 …… 62

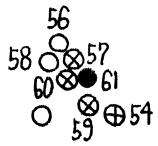
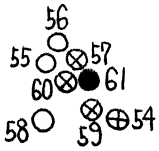
考古研歳時記（ダイアリー） …… 70

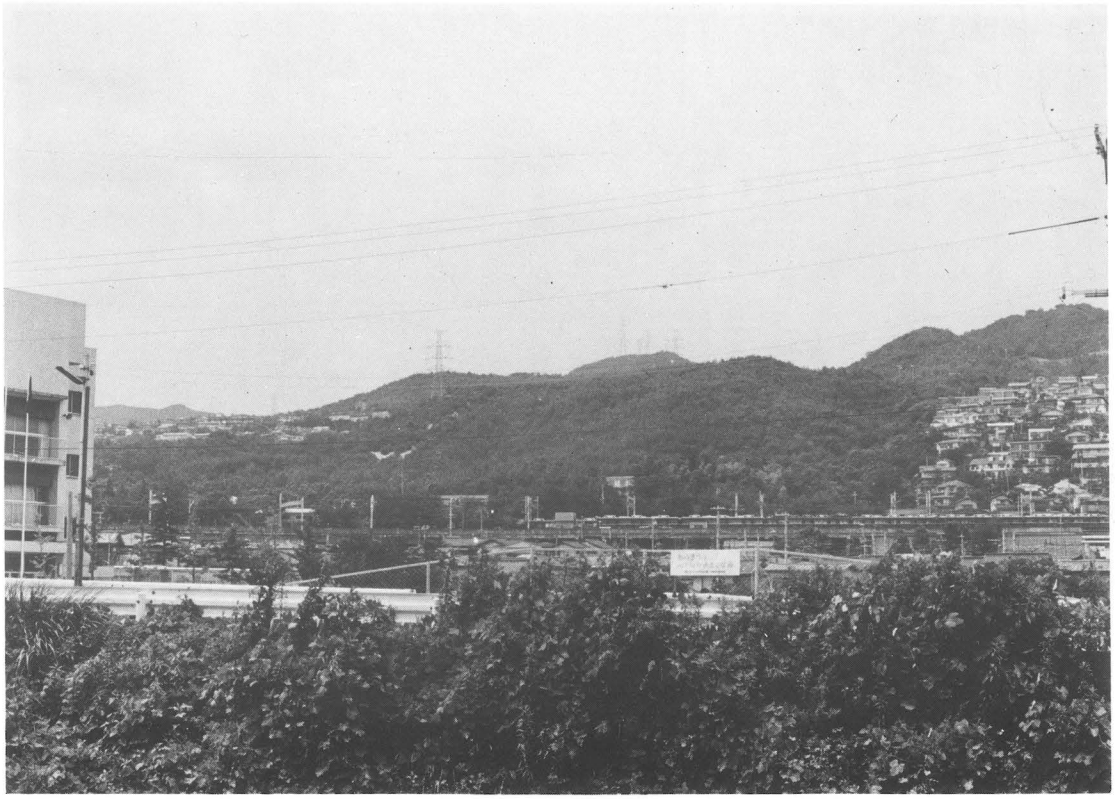
1987. 3

関西学院大学考古学研究会

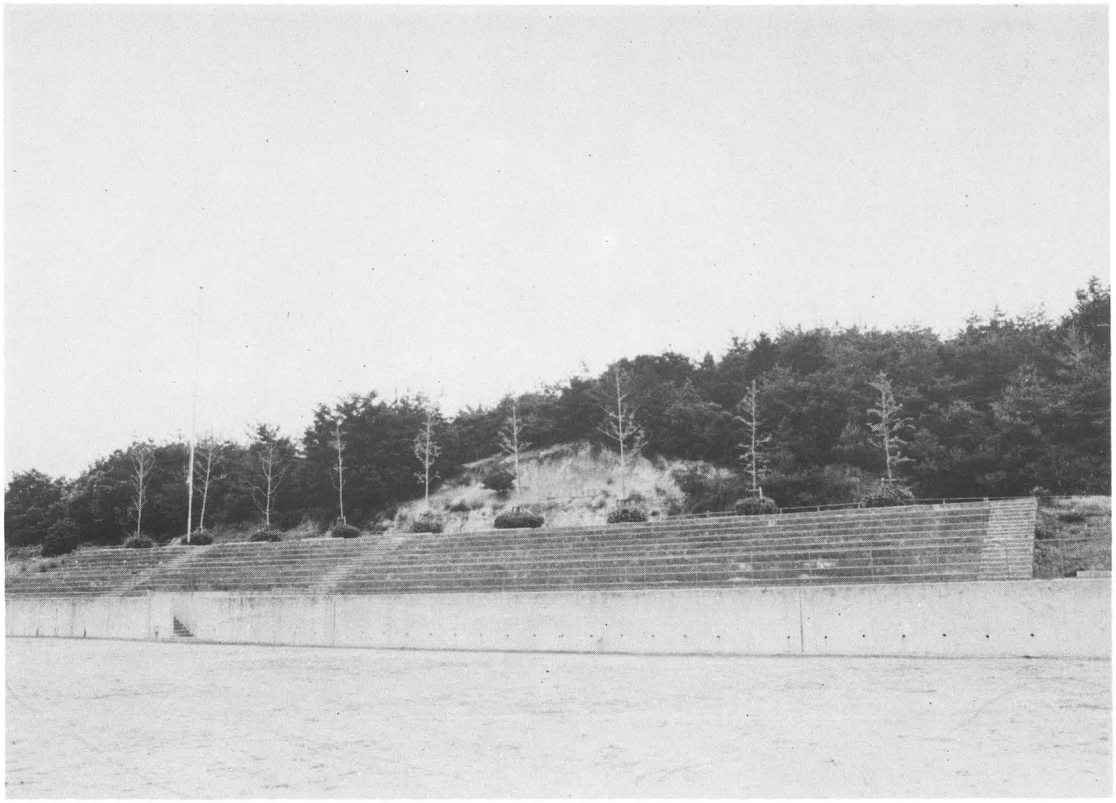
63

関西学院考古 NO.8　正誤表

頁	行	誤	正
目	次	滋賀県…現状調査…	滋賀県…現状実測調査…
9	左4	寺畑遺跡	栄根遺跡
	左5	栄根遺跡	寺畑遺跡
12	33	·7·8·9号墳	·7·8·9·10号墳
22	1	北側・南側	北側・西側
25	8	口径6.1cm	口径12.2cm
	第11図	5m	5cm
43	12	円。方墳	円・方墳
44	第2図上部		
46	1	のうち、	このうち、
53	24	長層との、	層との、
56	16	要旨	要旨』
64	2	状文、	文、
72	右4	水は、	水に、
75	12~13	新潟県教育委員会	新潟県教育庁



雲雀山西尾根古墳群Ｂ支群遠景



雲雀山西尾根古墳群Ｂ支群近景

図版二　長尾山の古墳群

雲雀山西尾根古墳群Ｂ支群３号墳全景

雲雀山西尾根古墳群Ｂ支群３号墳石室

雲雀山西尾根古墳群Ｂ支群４号墳全景

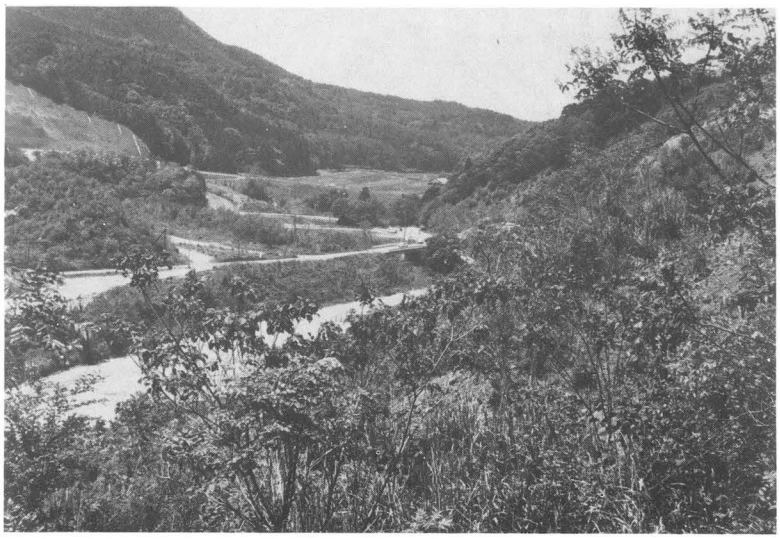
雲雀山西尾根古墳群Ｂ支群４号墳　南より石室を望む

図版四　長尾山の古墳群

雲雀山西尾根古墳群Ｂ支群４号墳奥壁

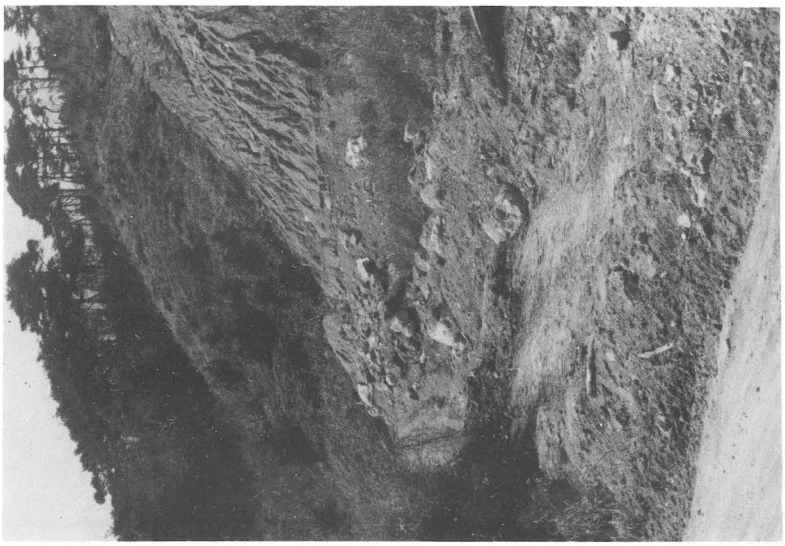
雲雀山西尾根古墳群Ｂ支群16号墳

図版五　滋賀県蒲生郡日野町蔵王勝手谷(1)



日野川上流より
米石橋をのぞむ

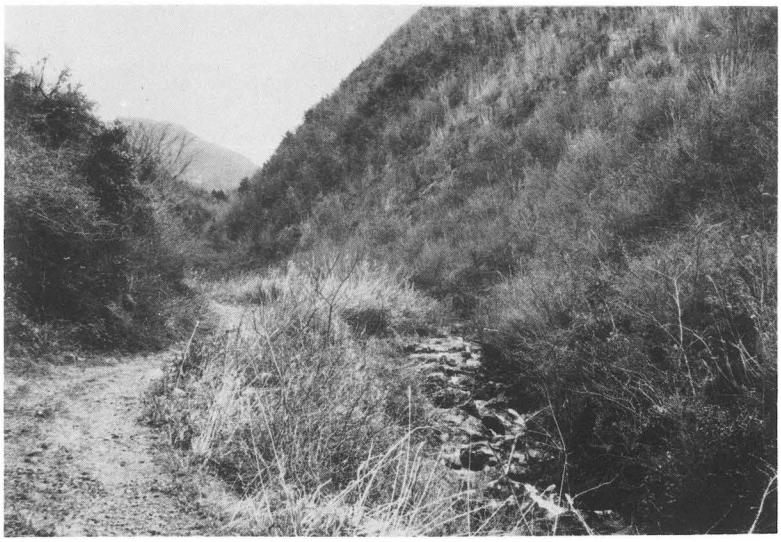
イシノトリコバ現況



土中にある米石の石塊

図版六　滋賀県蒲生郡日野町蔵王勝手谷(2)

勝手谷を上流よりのぞむ



勝手谷と林道

勝手谷入口に露頭
した米石の岩盤

論　　文

伊和大神と伊和族

――兵庫県宍粟郡一宮町伊和中山１号墳と関連して――

福　島　好　和

はじめに

昨年９月、兵庫県宍粟郡一宮町伊和中山にある古墳群の伊和中山１号墳が全長約62ｍの前方後円墳（後円部高さ約6.5ｍ、後円部径約40ｍ）であることが確認され、墳頂の割石積み竪穴式石室から玉類・鉄剣・鉄斧・鉄ヤリ・鉄鏃などが出土し、さらに素環頭大刀が発見されたことが、『神戸新聞』に４日・13日の両日に報じられた。調査に当った垣内章氏は、仿製方格規矩獣文鏡の発見も加えて、この墳丘が４世紀後半代の築造であろうと報告されている。①

この古墳の発見は、播磨地方の考古学研究に重要な資料を加えたことはいうまでもないが、この遺跡のある地域一帯が、『播磨国風土記』に記す宍禾郡石作里に位置し、伊和大神を祭る伊和神社のある地である点で注目される。

私はこれまでに『播磨国風土記』の研究に少なからず関わってきた。その立場から考えると、伊和大神を信奉していた氏族と考えられる伊和族は、ある時期まで播磨地方においてかなりの勢力を有していた豪族であったことはまちがいない。しかし、その勢力の拡大過程や衰退過程については必ずしも明らかにすることができなかった。

新聞報道によると、この古墳の発見によって、伊和族と大和朝廷の関係が明らかとなり、伊和族の勢力は、この古墳の地を本拠とし、４世紀後半代にはかなりの力を有していたかに報じられている。

しかし、この遺跡の調査報告は前出の新聞報道と調査担当者の若干の説明しか得ていない。したがってすぐさま考古学の成果を文献と比較検討することはできない。ただ、これを期に、もう一度『播磨国風土記』にみえる伊和大神やその信奉氏族である伊和族について検討してみる必要があるように思う。以下その検討を試みることとする。

なお、以下の論述は『赤穂市史』第一巻に記したものを、一部修正して記したものであることをお断りする。

１．神名記事の分布

衆知のように『播磨国風土記』は地名説明を内容としている。したがって、これを基本に当国の風土記全文を条文化すると２４２条に分けることができる。このうち、神の名がみえる記事（以下、神名記事という）は82条を数えることができた。このことは当記事が『播磨国風土記』の重要な伝承であることを顕著に示している。②

神名記事の分布を地域的にみた場合、風土記に記される10郡のうち１条もない印南部を除くと

表１のようである。つまり、各郡の記事全体の条文数に対する神名記事の割合をみると、宍禾・讃容・神前・託賀・美嚢・賀毛・賀古・揖保・餝磨の順になる。このような傾向に注意すると、播磨西北部の宍禾・讃容などに割合が大きく、揖保・餝磨の播磨中心部の郡に割合が小さくなることがわかる。

また、神名記事の中に登場する神々を整理して、その神名数を数えると、神名記事の条文数に比して神名数の多い郡が揖保・餝磨・神前・託賀・賀毛の５郡である。ここでは宍禾・讃容両郡の方が少なくなっている。これは前者の５郡が性格の異なる神々を地名説明の記事に多く登場させているのに対して、後者の２郡は同一神がしばしば登場するからである。

表１『播磨国風土記』にみえる神名記事

郡　名	条文数	神名記事	神名数
賀古郡	8	2	3
印南郡	１１		
餝磨郡	３７	7	１２
揖保郡	６９	１７	１６
讃容郡	１９	9	7
宍禾郡	２５	１９	7
神前郡	２１	9	１０
託賀郡	２０	8	9
賀毛郡	２４	8	8
美嚢郡	8	3	5
計	２４２	８２	延べ ７７

こうした分布の状態は、もちろん風土記編述者が神名記事を採択する際の方針によることも考えられようが、それぞれの地域における神々への関心の度合がうかがえるように思える。

すなわち、開発のすすんだ播磨中心部には神名記事が少なく、かえって神名数が多いのは、過去において活躍した土地の神（それを信奉する氏族）よりも、新たに他地域から侵入した多くの神々に関心を寄せたためであり、やがて大きな勢力をもって進出してきた天皇および大和朝廷に関心が寄せられたためであろう。これに対して、宍禾や讃容のような郡では、新しい侵入者よりも、その土地の開発に寄与した地元の神に強い関心があったためと考えるべきであろう。

２．５神の分布

『播磨国風土記』に登場する神々の中で、もっとも多くその神名がみえるのは伊和大神である。それ以外では２郡以上に登場し、風土記の重要な内容に位置づけられる大汝・少日子根命・葦原志許乎命・天日槍命の４神の活動が目立つ。以下、この５神の分布をみながらその活動の特徴を述べよう。

表２によって明らかなように、５神のうちいずれかが分布している郡は、賀古・印南両郡を除く８郡である。このほか式内社には赤穂郡の伊和都比売神社が、伊和大神と何らかの関係があると思われ、この祭神伊和都比売神は明石郡の式内社伊和都比売神社（現、伊弉冊神社）の祭神にもみえる。播磨国12郡中これら５神とのかかわりがまったく認められないのは、やはり賀古・印南の両郡のみとなる。

郡別にみた場合、５神すべてを記す揖保郡、葦原志許乎命を欠くが４神を記す神前郡がこれらの神々の活動を記している。播磨中央部の餝磨郡は伊和大神・大汝命２神の記載しかなく、その記事の多くはこれら２神の系譜的記述となっている。宍禾郡は神名記事の多い郡であるが、伊和大神・葦原志許乎命・天日槍命３神の記述が多くて特徴的である。讃容郡は伊和大神だけに限って記し、宍禾郡に隣接する地域として注目されよう。同様に１神のみ記している郡としては、託

賀郡の伊和大神・賀毛郡の大汝命、美嚢郡の大物主葦原志許（「乎命」2字を欠く）がある。これら3郡は播磨東部山間地域で隣接している。

次に5神の分布を個別にみると、伊和大神が最も広く分布し、多いものから宍禾・揖保・讃容・神前・託賀・餝磨の順となる。ほかに明石・赤穂両郡の伊和都比売神も同神の系譜に含まれるとすると、12郡のうち8郡が何らかの形で関係づけられる。

表2　『播磨国風土記』にみえる5神の分布

神名		賀古郡	印南郡	餝磨郡	揖保郡	讃容郡	宍禾郡	神前郡	託賀郡	賀毛郡	美嚢郡	計
伊和大神	伊和大神（大神）				3	3	9	1				16
	伊和大神の妻子			2	4	2	3	1	2			14
大汝命	大汝命（大汝少日子根命）			2	2			1		3		8
	大汝命の妻子			2								2
小日子根命（小日古尼命、小足命）					2			1				3
葦原志許乎命（葦原志挙乎命、大物主葦原志許）					1		4				1	6
天日槍命（天日桙命）					1		6	2				9

なかでも宍禾郡は伊和大神の分布がもっとも多く、同神の中心地は同郡にもとめられるようである。伊和大神はまた天日槍命と相並ぶ神（協調または対立する神としてみえる場合をいう）としてみえ、それは宍禾・神前両郡に認められる。

『播磨国風土記』に伊和大神に次いで多く記される神は、大汝命である。この神の場合、少日子根命と相並ぶ神としてみえ、揖保・神前両郡にみえる。餝磨郡の場合、大汝少日子根命と記し日女道丘神と相並ぶのは、大汝命と少日子根命がやがて1神に同化されたものであろう。賀毛郡では大汝命1神が単独に記される例が3例もあり、他地域と異なった特徴を示している。

相並ぶ神としてもうひとつの例は、葦原志許乎命と天日槍命である。この2神が並び記されるのは、揖保・宍禾の両郡であり、宍禾郡にもっとも多い。もちろんこれらの神もそれぞれ単独に記される場合がある。宍禾郡ではこの両神がそれぞれ単独に、また、神前郡では天日槍命が単独に記されている。ただ美嚢郡の場合は大物主葦原志許とみえて、餝磨郡の大汝命と少日子根命の場合と同様、2神が同化したとも思えるが、『古事記』や『日本書紀』に記す神統譜からみて、大物主神と葦原志許乎命は同一神であり、本名と別称の関係であるため、それが風土記では1神のように記されたのであろう。

天日槍命の場合、すでに伊和大神や葦原志許乎命と相並ぶ神としてみえると述べたが、天日槍命自身単独で記される例も宍禾・神前両郡にみえる。ただ『播磨国風土記』においては、天日槍命と伊和大神、天日槍命と葦原志許乎命の関係が土地をめぐる争い、すなわち土地占有伝承である点が特徴的で注目されよう。

また、この3神の関係は大汝命と少日子根命との関係に対応し、大汝命が少日子根命とのみ相並ぶのに対して、伊和大神と葦原志許乎命の場合、天日槍命とは相並ぶ神であるが、伊和大神と葦原志許乎命とは決して相並ばない。しかもこうした記述が宍禾郡に集中しながら、播磨地方の大半の郡でも何らかの関係で伝承されている。

3．伊和大神と妻子の神

さて、伊和大神は播磨地方に広く分布する神であり、伊和大神自身の活動はもちろんのこと、大神と系譜的につながる妻子の神の活動もみえるのが特徴的である。しかも土地占有をめぐる伝承が多く、なかでも天日槍命との関係は特に注意しなければならない。まず、伊和大神と妻子の神を中心にその伝承の特徴を記してみよう。

伊和大神が広く播磨地方に分布していることは、いったい何を意味しているのだろう。それは端的にいえば、伊和大神を信奉する人々の生活範囲を示すことになるのだが、こうした集団つまり氏族（以下、伊和族という）の勢力範囲を意味する。しかし、このような氏族の勢力はいきなり大きくなったのではない。そこでこの伊和族の本拠地と勢力拡張の過程が問題となるのである。

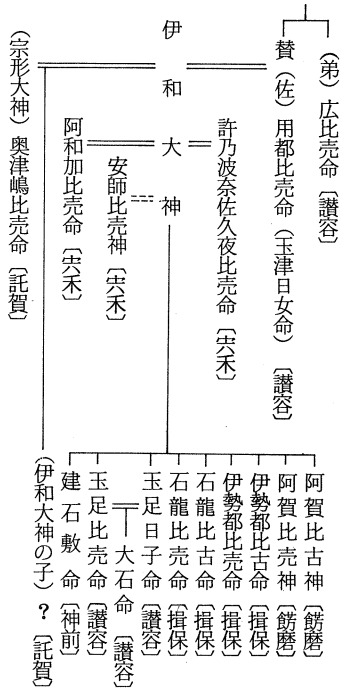
従来、伊和族は『播磨国風土記』にみえる伝承からみて、出雲系の神を信奉する集団が揖保川上流の宍禾郡（現在、宍粟郡一宮町に式内社伊和神社がある）を本拠地とし、しだいに勢力を得て南下し、餝磨郡に至って広く播磨地方に勢力を拡張したと考えられていた。確かに風土記の内容からみて、またその分布状態からみて、これは捨て難い説である。

しかしこれに対して、『兵庫県史』第１巻ではまったく逆の考えが提示されている。つまり、宍禾・揖保・餝磨郡を中心に播磨全域に勢力を持っていた伊和族は、おそらく５世紀ごろに大和朝廷の勢力に圧倒され、新たに播磨の中央に勢力をもった大和朝廷と深い関係のある佐伯直が播磨国造に任命され、伊和族と佐伯直との勢力の交代、すなわち国譲りが行われたとし、伊和族の勢力後退を意味すると考えている。この説は大和朝廷の播磨進出という視点からみた考えであり、佐伯直の播磨国造としての勢力からみれば確かに説得力がある。しかし、播磨西部を中心とする伊和族の勢力は、どのような過程でできたのであろうか。

『龍野市史』第１巻は、『兵庫県史』の説を次のように解釈している。伊和族はもともと餝磨郡伊和里を本拠とする集団で、市川流域のこの地域から揖保川流域や千種川流域を支配していた集団を次々に征圧して、播磨西半部を支配するようになったと解して、その後の伊和族の後退については、大和朝廷の強大な勢力が播磨に及んで、伊和族は山間部である現在の宍粟郡一宮町に隠退したとしている。これは『兵庫県史』の説をより具体化した考えであり、従来の説とは反対の新しい説である。

ところで、こうした考えの根拠のひとつとして、伊和大神自身の伝承以外に、伊和大神とその妻子の神の関係を示す伝承があることが指摘されている。これは『播磨国風土記』の14例のうち16神、さらに明石・赤穂両郡にある式内社の伊和都比売神社の祭神を伊和大神の姫神またはみ子神と考えると18神となる（表３参照）。

表３　『播磨国風土記』にみえる伊和大神の系譜



〔注〕═══ は婚姻関係　----- は娶誂

4．伊和大神の婚姻伝承

これによってわかるように、伊和大神と婚姻関係を記すのは4神で、伊和大神が娶誂（求婚）して固辞されたとする安師比売神を加えると5神となる。これら比売（姫）神は、宍禾郡安師里（安富町）安師川の安師比売神、宍禾郡石作里（一宮町・山崎町）阿和賀山の阿和加比売命、宍禾郡雲箇里（波賀町）の許乃波奈佐久夜比売命、讃容郡讃容里（佐用町）の賛（佐）用都比売命（別称玉津日女命）、託賀郡黒田里（黒田庄町）袁布山の宗形大神奥津嶋比売命である。

これら5神のうち、託賀郡の奥津嶋比売命は伊和大神のみ子神を懐妊したという伝承で、この神は『古事記』や『日本書紀』にみえる宗像三女神のひとつと同神である。三女神とは『古事記』では天照大御神と須佐之男命との誓約によって生まれた、多紀理毘売命（別称、奥津島比売命）・市寸島比売命（別称、狭依毘売命）・多岐都比売命をいう。また同書には大国主命と多紀理毘売命との間に阿遅鉏高日子根命が生まれたとし、このみ子神は賀茂大御神だとある。これは宗像氏と賀茂氏がともに出雲系の神を信奉する同族であることを示すもので、託賀郡を含む播磨東北部が針間鴨国造の勢力圏であることを考えあわせると、針間鴨国造も賀茂氏と同族で、『古事記』に記すのとほぼ同じような伝承を伝えていたと考えてよいようである。

播磨西部の宍禾郡や讃容郡にみられる伊和大神と比売神の婚姻伝承は、土地占有伝承として特徴的である。宍禾郡の安師比売命は伊和大神の娶誂を固辞したため、安師川の水源を大神が塞いだとある。このことから安師川流域の勢力と伊和族の争いを想像することもできよう。同じ郡の阿和加比売命は北接する但馬国朝来郡に式内社粟鹿神社（山東町）があり、おそらくこれと関係のある神と考えられる。そうするとこの地域に勢力をもっていた神直との関係を想定させる。同じ『播磨国風土記』の神前郡　岡里（市川町・神崎町・大河内町・生野町）粟鹿川内の条は地理的な関係を説明しているが、但馬国朝来郡粟賀一帯に勢力をもっていた神直が、播磨西部に勢力をもつ伊和族と接触することも十分考えられよう。讃容郡の賛容都比売命の場合、讃容郡全域に伝承をもつ。式内社佐用郡比売神社は同神を祭神とするが、おそらく千種川上流一帯に勢力をもつ集団の祖神であろう。伝承によると、この神は伊和大神と国占を競ったとし、賛容都比売命が大神に先だって稲を植えたので、大神はよそへ去ったというのである。これも土地占有伝承であり、播磨西部の婚姻伝承は単なる婚姻をめぐる説話ではないことがわかる。

このようにみていくと、託賀郡の伝承と播磨西部の伝承は、播磨西部に本拠をもつ伊和族と、播磨東北部に勢力をもつ針間鴨国造とが同じ出雲系の神を信奉する集団として同族意識をもつようになった時期に結合し、託賀郡のような伝承が生まれたと考えてよいようである。

さてみ子神に転じてみると、餝磨郡英賀里（姫路市）の阿賀比古・阿賀比売の2神、揖保郡林田里（姫路市林田町）伊勢野の伊勢都比古命・伊勢都比売命の2神、揖保郡出水里（龍野市）美奈志川の石龍比古命・石龍比売命の2神、讃容郡雲濃里（三日月町・南光町）の玉足日子命・玉足比売命およびそのみ子神大石命、神前郡高岡里（福崎町）神前山の建石敷命がある。

これらみ子神の伝承の特徴は、比古・比売2柱の神が相並んでいる点にある。また揖保郡出水里美奈志川の石龍比古命と石龍比売命は大神と安師比売神とにみたような水争い伝承がある。おそらくこれらみ子神も土地占有伝承の主人公として活動していたと考えることができよう。

5．伊和大神と天日槍命

一般に伊和大神は出雲系の神である大汝命や葦原志許乎命と同神と考えられている。たしかに『播磨国風土記』の中には同一神と思わせるような記述がないではないが、明確に同一神ときめつけるわけにはいかない。そこで、伊和大神らと対立する天日槍命についてみながら、この問題を考えてみよう。すでに表２に示したように、天日槍命に関する伝承は９例ある。それは①揖保郡揖保里（龍野市）粒丘の条、②宍禾郡比治里（山崎町）川音村の条、③同里奪谷の条、④同郡高家里（山崎町）の条、⑤同郡柏野里（山崎町・佐用郡南光町）伊奈加川の条、⑥同郡雲箇里（波賀町）波加村の条、⑦同郡御方里（一宮町）の条、⑧神前郡多駝里（姫路市山田町、福崎町）粳岡の条、⑨同里八千軍の条である。

これらの内容に注意してみると、天日槍命自身が単独に記されているのは②・④・⑨の３例で、これらは天日槍命と地名の関係を説明するにとどめている。残る例に注意してみると、相並ぶ神として葦原志許乎命と伊和大神が記されていることがわかる。前者の例は①・③・⑤・⑦の４例で、後者は⑥・⑧の２例である。

天日槍命と葦原志許乎命とが相並ぶ場合をみると、①に「粒丘と号くる所以は、天日槍命、韓国より度り来て、宇頭の川底に到りて、宿処を葦原志挙乎命に乞はししく」とあって、天日槍命が「韓国」より渡来してきたという。そして、葦原志許乎命と国占めを行ったというのである。③の場合は、２神が谷を奪いあったという単純な話であるが、これも国占めであろう。⑤も単純な地名説明ではあるが、２神の国占めの時としているし、⑦は２神の国占めが具体的となる。つまり、２神が国土を占有するため呪術を行ったところ、天日槍命の国土は但馬国の伊都志（出石郡）に決まったので、その地へ行ったというのである。

揖保郡から宍禾郡にかけての天日槍命と葦原志許乎命の国土占有伝承にはひとつの連続した話の内容になっている。つまり、はじめ天日槍命は韓国から渡来して、揖保郡の宇頭川（揖保川）の河口に到着し、当地の神葦原志許乎命と対立した。２神の争いはしだいに揖保川流域を北へ進み、やがて宍禾郡御方里に到って最後の国占め争いを行った。そして葦原志許乎命は宍禾郡に、天日槍命は但馬国出石郡にそれぞれ定着したというのだろう。

ところで、こうした伝承の中に、天日槍命は伊和大神とも国占めを行ったとある。１例は宍禾郡雲箇里波加村の条で、天日槍命と伊和大神が国土占有の争いを行ったところ、天日槍命が先に占めたという話である。もう１例は神前郡多駝里粳岡の条で、ここでは２神が戦争をしたといい、伊和大神がその時、米ぬかで城をつくったという話である。もっとも後者の伝承には、この２神とは関係のない別の伝承があるので、この伝承は後代にできたのかもしれない。そうであるなら、天日槍命と伊和大神との国土占有伝承が宍禾郡の１例のみとなることが注目されよう。

『播磨国風土記』では、葦原志許乎命と伊和大神とは区別している。とくに宍禾郡においては、この２神の伝承が他郡よりはるかに多いのに、２神が同神であるような記事は１例もない。また、天日槍命が国占めに関係する伝承では、葦原志許乎命と対立するのが通例である。ところが天日槍命が伊和大神と対立する記事がただ１例のみ宍禾郡にあるのは、単に例外として見過すことはできない。

おそらく、葦原志許乎と伊和大神の伝承はそれぞれ別のものであり、風土記の編述者もそれを忠実に記すことに心がけたに違いない。しかし、すでに風土記成立期にはこの2神が同神とするのは一般的であり、風土記の編述者にもそうした潜在意識があったため、伊和大神が天日槍命と対立する話が混在してしまったのであろう。天日槍命伝承は、『古事記』や『日本書紀』にもみえて、その内容を比較すると、いくつかの問題を含んでいる。いまこれらについては述べることはできないが、『播磨国風土記』だけをみても、播磨国における開発過程の一様相を呈しているのである。③

おわりに

以上、伊和大神について『播磨国風土記』から考察できる諸点を示してみた。このことによって知ることができるのは、伊和大神の土地占有伝承が播磨西部に多く、それは大和勢力の播磨進出以前の土地開発過程を物語るものであるように思う。

伊和大神を信奉する伊和族は、その本拠をどこにおいたかが問題であるとしても、播磨西部を中心として広く播磨全域にひろまっていたのは事実である。おそらく、その本拠は揖保川流域の広い範囲を考えてよいように思う。『播磨国風土記』宍禾郡比治里の条に「比治と名づくる所以は、難波長柄豊前天皇（孝徳天皇）のみ世、揖保郡を分ちて、宍禾郡を作りし時（下略）」とあるように、揖保川流域は揖保・宍禾両郡の広い地域をひとつに考えられていたことからもいえそうである。

この伊和族の勢力がいつ頃からこの地域を本拠としたかは文献のみでは明らかにできない。今回の発掘調査の詳しい報告と、揖保川流域における遺跡調査がさらに進められることを期待したいと考える。

＜註＞

① 『兵庫県の歴史』22の口絵写真および解説

② 『播磨国風土記』にみえる神名記事の全容については、拙稿「播磨国風土記における神名記事の分布について」（本位田重美先生定年記念事業会『地域と文化』1977．3、所収）に詳述している。

③ 天日槍伝承については、拙稿「播磨国風土記の天日槍命伝承」（『兵庫県の歴史』21）を参照。

調 査 報 告

長 尾 山 の 古 墳 群 (Ⅳ)

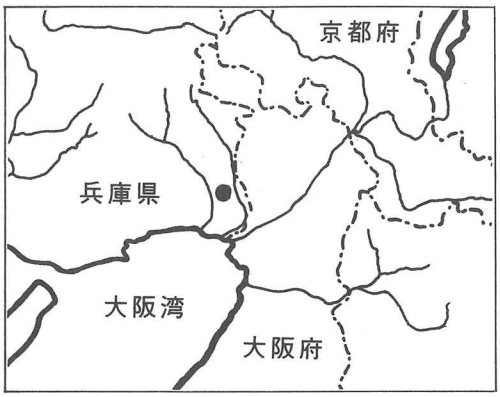
―― 雲雀山西尾根古墳群Ｂ支群の調査 ――

関西学院大学考古学研究会

Ⅰ はじめに

関西学院大学考古学研究会の長尾山の古墳群に関する調査研究は、1980年の『関西学院考古』第６号発刊以降中断したままであった。急激な会員の減少もあって、ここ数年は行政発掘調査への参加が活動の主要部を占めるようになっていた。

ところが、この２年のうちに会員の数も倍増し、これまでの行政発掘調査への無批判な参加という状況を真摯に総括した結果、①会独自の調査研究活動が本来の研究会活動であり、②行政発掘への参加は、あくまでも未調査での破壊をさけるための最終手段であり、③これまでの調査をふまえた上で、付近の文化財パトロールを実施し、保存にむけて働きかけをする、という３点を確認した。そこで以上の点の上にたち、中途半端な状態になっていた長尾山の古墳群の調査・研究に取りくむことになった。



第１図　長尾山の古墳群の位置

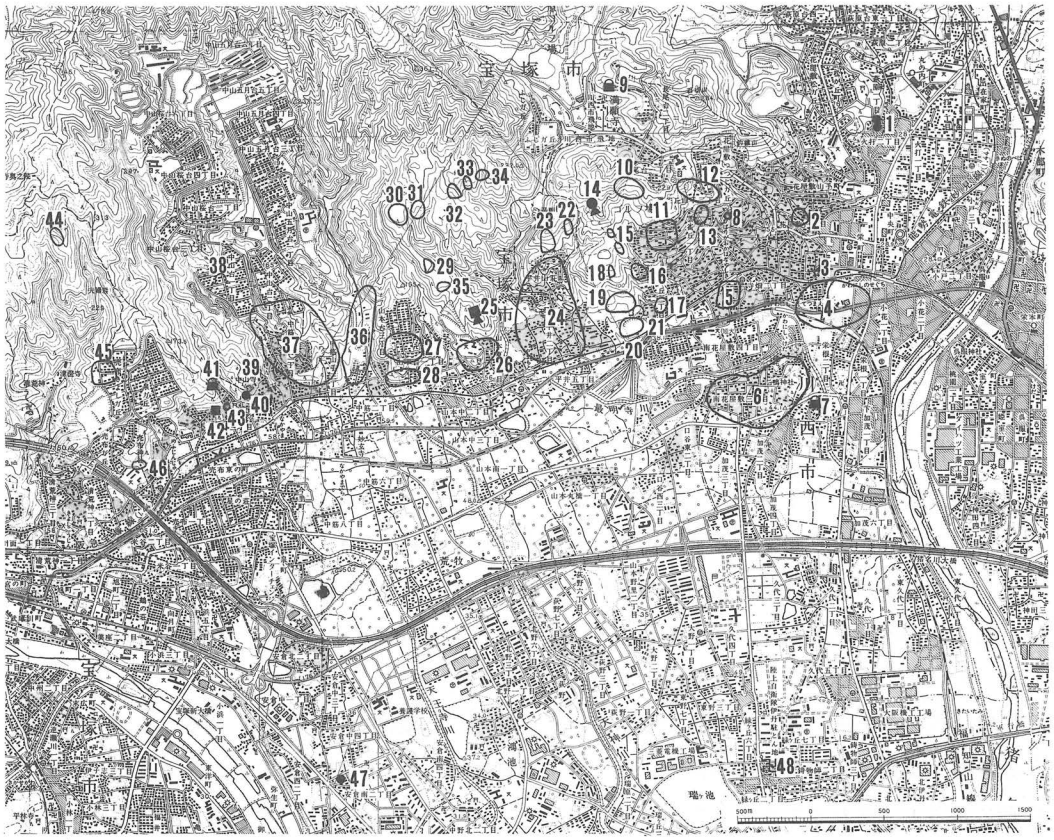
当研究会は、研究活動の対象地域を大学近郊の西摂平野に求め、1975年度には仁川流域の後期古墳、1976年度よりは長尾山丘陵に所在する後期古墳の実測調査を主体とした報告を行ってきた。

長尾山の古墳群については過去３回にわたり報告してきたが、今回は第６号において課題として残された兵庫県宝塚市雲雀山西尾根古墳群Ｂ支群の未調査古墳について、一連の研究活動の一環として報告するもので、特に①長尾山の古墳群における当古墳群の性格解明のための基礎資料づくり、②保存推進のための現状実測調査、の２点を念頭に置いた。

Ⅱ　長尾山丘陵周辺の環境

(1)　地理的環境

兵庫県南東部と大阪府北西部に含まれる西摂地方は、北は北摂山地、東は千里丘陵、西は六甲山系に囲まれ、南は大阪湾に面している。この平野の東部には猪名川、西部には武庫川の二つの河川が南流し、その間には標高５ｍから40ｍにかけて広がる洪積台地である伊丹段丘が形成され、



第２図　雲雀山古墳群周辺の遺跡

1	勝福寺古墳	17	雲雀山東尾根古墳群Ｃ支群	33	山本奥古墳群Ｆ支群
2	豆坂古墳群	18	雲雀山西尾根古墳群Ａ支群	34	同　Ｇ支群
3	栄根寺	19	同　Ｂ支群	35	同　Ｈ支群
4	寺畑遺跡	20	同　Ｃ支群	36	中筋山手東古墳群
5	栄根遺跡	21	平井窯跡	37	中筋山手古墳群
6	加茂遺跡	22	平井古墳群Ａ支群	38	勅使川窯跡
7	栄根銅鐸出土地	23	同　Ｂ支群	39	中山寺
8	雲雀丘皇朝銭出土地	24	同　Ｃ支群	40	中山寺白鳥塚古墳
9	満願寺	25	長尾山古墳	41	中山荘園銅鐸出土地
10	雲雀丘古墳群Ａ支群	26	山本古墳群Ａ支群	42	中山荘園古墳
11	同　Ｂ支群	27	同　Ｂ支群	43	北米谷骨蔵器出土地
12	同　Ｃ北支群	28	同　Ｃ支群	44	旧中山遺跡
13	同　Ｃ南支群	29	山本奥古墳群Ｂ支群	45	旧清遺跡
14	万籟山古墳	30	同　Ｃ支群	46	売布神社銅鏃出土地
15	雲雀山東尾根古墳群Ａ支群	31	同　Ｄ支群	47	安倉高塚古墳
16	同　Ｂ支群	32	同　Ｅ支群	48	伊丹廃寺

その南には両河川の運ぶ土砂によって形成された沖積平野が広がっている。

長尾山地とは、西摂平野の北辺をなす北摂山地のうちの猪名川以西をいい、標高50ｍから最も高い大峰山頂でも552ｍと比較的緩やかな丘陵である。この山地を源とする河川として最明寺川・天神川・勅使川があり、最明寺川は猪名川と、天神川・勅使川は武庫川と合流する。また、この山地の南斜面の標高50ｍから200ｍ付近には約200基の古墳があり、その大部分は宝塚市域に含まれている。今回の調査地域は、そのうちの最明寺川と猪名川にはさまれた雲雀山の西尾根に存在する古墳時代後期の群集墳である。

(2) 歴史的環境

西摂地方は、地理的環境に恵まれていたため歴史は古く、旧石器も採集されているが、ここでは長尾山丘陵周辺の弥生時代以降に限り、その概要を述べる。

弥生時代の集落遺跡としては、前期には川西市栄根遺跡①が出現し、中期には川西市加茂遺跡②など大規模な集落が出現する一方、宝塚市旧清弥生遺跡③のようないわゆる「高地性集落」も出現する。後期になると、前時期から継続する栄根遺跡・加茂遺跡のほか、川西市寺畑遺跡・久代遺跡など小規模な集落が増加する傾向がみられる。なお、この時代の遺物としては、宝塚市中山で外縁付鈕式の同笵鐸が２口④、川西市満願寺⑤・栄根⑥において突線鈕式の銅鐸がそれぞれ１口ずつ出土しているほか、宝塚市売布神社境内において銅鏃が出土している⑦。

古墳時代に入ると、前期に出現するものとして宝塚市万籟山古墳⑧があげられる。また、呉の紀年銘をもつ半円方形帯神獣鏡が出土した宝塚市安倉高塚古墳⑨もこの時期のものと考えられている。中期に入ると、それまで主として丘陵尾根上につくられていた古墳は、台地あるいは平野部に移行し、西摂地方全体ではかなり広範な地域で造営されるようになるが、長尾山丘陵周辺では中山寺境内に「安産の手洗鉢」と称する舟形石棺⑩が遺存するのみである。なお、前方後方墳とされている宝塚市長尾山古墳⑪については、前期とも中期ともいわれている。後期になると、川西市勝福寺古墳⑫が西摂地方における横穴式石室墳として比較的早く出現した後、長尾山の南斜面には数々の群集墳が築造されはじめる⑬。その東端は既に破壊された川西市豆坂古墳群⑭で、最明寺川以東にはこのほか雲雀丘⑮・雲雀山東尾根⑯・雲雀山西尾根⑰・平井⑱の４古墳群、最明寺川と天神川に画された地区には山本・山本奥の２古墳群⑲、天神川と勅使川に画された地区には中筋山手⑳・中筋山手東㉑の２古墳群がそれぞれ分布している。また、中山寺境内には白鳥塚古墳㉒が、その西には八角形墳である中山荘園古墳㉓が単独墳として存在する。古墳時代の集落遺跡としては、弥生時代から続く加茂遺跡・栄根遺跡があげられる。栄根遺跡では1982年に自然河川より古墳時代の木舟が出土している。

歴史時代に入ると、宝塚市域では平井㉔・勅使川㉕に窯が築かれ、伊丹廃寺㉖などに須恵器が供給されたのではないかと考えられている。また、北米谷では骨蔵器が出土しており、把手付平瓶の須恵器や和銅開珎が伴出していることから８世紀初めのものと考えられている㉗。寺院では、中山寺は古い開基であると伝えられているがその実情は明らかではないのに対し、「清荒神」清澄寺はその旧跡として平安時代後期の寺院址（旧清遺跡）㉙が検出されている。また、この時代の出土遺物としては、雲雀丘の皇朝銭㉚、平井の向鳥双龍文の八稜鏡㉛がある。川西市域では、栄根遺跡で平

安時代から室町時代にかけての建物跡などが発掘されているほか、自然河川より奈良時代の墨壷も出土している。寺院としては、白鳳時代の瓦が出土している栄根寺㉜があるが、現在は平安時代の薬師如来像を安置する薬師堂があるのみである。また、平安時代頃に創建された満願寺㉝では室町時代初めに建立された建物跡より地鎮具が出土している。（森澤）

＜註＞

① 兵庫県教育委員会・川西市教育委員会『栄根遺跡』 1982年

② 『摂津加茂』（関西大学文学部考古学研究紀要第3冊 1967年）
川西市教育委員会『川西市加茂遺跡』1982年

③ 『摂津旧清遺跡』（宝塚市文化財調査報告第5集 1973年）

④ 『宝塚市中山出土の銅鐸』（宝塚市文化財調査報告第8集 1976年）

⑤ 亥野 彊「考古資料」『川西市史』第4巻 1976年）

⑥ ⑤に同じ

⑦ 京都大学文学部編『京都大学文学部博物館考古資料目録』1 1960年

⑧ 梅原末治「摂津万籟山古墳」『日本文化研究所報告』第4 1937年
『摂津万籟山古墳』（宝塚市文化財調査報告第7集 1975年）

⑨ 梅原末治「小浜村赤烏七年鏡出土の古墳」『兵庫県史跡名勝天然記念物調査報告』第14輯 1939年

⑩ 梅原末治「中山寺――其ノ境内ノ古代ノ遺跡遺物」『兵庫県史蹟名勝天然記念物調査報告』第17輯 1930年

⑪ 櫃本誠一「長尾山古墳外形測量調査報告」『兵庫県埋蔵文化財調査集報』第1集 1970年

⑫ ⑤に同じ

⑬ 大久保基夫「摂津川辺群の三古墳群を実測して」『古代学研究』21・22合併号 1959年
石野博信「宝塚市長尾山古墳群」『兵庫県埋蔵文化財調査集報』第1集 1970年

⑭ 岡野慶隆「川西市花屋敷出土の須恵器」『兵庫考古』第14号 1981年

⑮ ⑬の石野に同じ
『長尾山の古墳群調査集報』（宝塚市文化財調査報告第14集 1980年）
「長尾山の古墳群Ⅰ」『関西学院考古』第4号 1978年

⑯ ⑬の石野に同じ
『宝塚市雲雀山古墳群』（宝塚市文化財調査報告第6集 1975年）

⑰ ⑯に同じ

⑱ 『平井古墳群分布調査報告書』（宝塚市文化財調査報告第2集 1972年）

⑲ ⑱に同じ

⑳ ⑮の「長尾山の古墳群Ⅰ」に同じ

㉑ 『中筋山手東2号墳発掘調査報告』（宝塚市文化財調査報告第11集 1977年）

㉒ ⑩に同じ

㉓　『中山荘園古墳発掘調査報告書』（宝塚市文化財調査報告第18集　1985年）

㉔　笠井新也「摂津国川辺郡平井山に於ける古代製陶所の遺跡及びその遺物」『考古学雑誌』第5巻第9号　1915年

㉕　高井悌三郎「勅使川窯跡発掘調査概要」『兵庫県埋蔵文化財調査集報』第1集　1970年

㉖　伊丹市教育委員会『摂津伊丹廃寺』　1966年

㉗　末永雅雄「宝塚市北米谷出土の火葬骨蔵器」『日本歴史考古学論叢』　1966年

㉘　現在中山寺の裏山、奥ノ院にのぼる途中に房舎跡かとみられる削平石積のところも2・3存し、山頂に巨石の点在するところもあるが実態は不明である。（③に同じ）

㉙　③に同じ

㉚　梅原末治・角田文衛「摂津川辺郡長尾山に於ける古銭の出土」『西宮』第3号　1946年

㉛　③に同じ

㉜　1985年、川西市教育委員会が発掘調査を実施

㉝　川西市教育委員会『川西市満願寺』　1985年

Ⅲ　長尾山の古墳群の調査・研究動向

長尾山丘陵に数多くの古墳が分布していることは古くから知られており、ウィリアム・ゴーランドの白鳥塚古墳の調査などをはじめとして明治以来数多くの調査が実施されている。我々関西学院大学考古学研究会においても1976年以後、長尾山丘陵の古墳を対象として調査・研究を行い現在に至っている。

1979年以前に発表された長尾山丘陵の古墳に関する調査・研究については「長尾山の古墳群Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ」（『関西学院考古』第4号　1978年　第5号　1979年　第6号　1980年）に詳しいのでここでは省略することにして、1980年以後に発表された調査・研究について述べてみたい。

1974年には、宝塚市教育委員会によって雲雀山東尾根古墳群C支群2号墳の発掘調査が行われた。[①] この雲雀山東尾根古墳群C支群2号墳では、横穴式石室の排水施設が認められており、直宮憲一氏は長尾山丘陵の横穴式石室の排水施設について考察されている。

1976年には、宝塚市教育委員会によって雲雀丘古墳群B支群1号墳の発掘調査が行われた。[②] この雲雀丘古墳群B支群1号墳の出土遺物には鉄滓や鏨が含まれており、この古墳の被葬者の性格を表わすものとして特筆できよう。この調査に関連して、坂井秀弥氏は古墳時代の鉄・鉄器生産について考察されている。

1978年には、宝塚市教育委員会によって中筋山手古墳群5号墳の発掘調査が行われた。[③] この古墳の石室は、幅80㎝、全長4ｍばかりと推定される小型横穴式石室であり、石室形態からみて7世紀前半の築造と考えられている。

1979年には、関西学院大学考古学研究会が雲雀山西尾根古墳群B支群全体の分布確認及び、6・7・8・9号墳について実測調査を行った。[④] この分布確認では、『宝塚市雲雀山古墳群』[⑤]に記

載されている10基を確認した上、さらに新しく4基を確認し、11・12・13・14号墳とした。この調査結果を報告した『関西学院考古』第6号で、岡野慶隆氏は長尾山丘陵における横穴式石室を中心にその平面企画を考察され、「倍数企画法」の使用を推定されており興味深い。⑥

1982年には、浅岡俊夫氏によって平井窯跡について2基の窯体の確認と地形測量の調査報告がなされている。⑦

同じく1982年には、宝塚市教育委員会によって宝塚市域埋蔵文化財分布調査が行われた。この調査の報告は、『宝塚市埋蔵文化財遺跡分布地図及び地名表』として刊行されている。⑧

同じく1982年には、白石太一郎氏が畿内の群集墳について、消滅の時期差によって3種類の分類を行われており、7世紀の第3四半期の小型化した横穴式石室やその退化形式の小竪穴式石室を含む雲雀山東尾根古墳群B支群⑨を代表例とするものを「長尾山型」とされている。⑩白石氏は雲雀山東尾根古墳群B支墳の23基の古墳のA～D型の類型⑪を基本的に年代差を示すものととらえ、7世紀の第2四半期から一部第4四半期まで築造が続けられたと考えられている。

なお、雲雀山東尾根古墳群B支群については、白石氏に先だち、石野博信氏は、この古墳群の年代を7世紀はじめから中葉に至る期間に相等するとして、等高線にそって分布する石室から4つの単位集団を摘出されている。⑫また、岡田務氏は、この古墳群の年代を7世紀前半から中葉にかけてとされ、「戸籍」を基とした集団の摘出の可能性を示されている。⑬一方、水野正好氏は、石室のA～Dの類型⑭は年代差を示すものとし、単位群の存在とともに墓道を想定されている。⑮古墳時代終末期の群集墳を考える上で、雲雀山東尾根古墳群B支群は大変興味深い位置にあるといえよう。

1983・1984年には、宝塚市教育委員会によって中山荘園古墳の発掘調査が行われた。⑯中山荘園古墳は、飛鳥地方の天皇陵とされる古墳以外では数少ない八角形墳⑰で、築造年代は石室の羨道形態の特異さ等から7世紀第2四半紀初め頃と考えられ、いわゆる飛鳥地方の八角形墳とは性格が異なるものとされている。地方の終末期古墳を考える上で重要な位置にある古墳であるといえよう。

以上、現在に至るまでの調査・研究動向について述べてみたが、今後さまざまな調査・研究が期待される。（佐々木）

＜註＞

① 『長尾山の古墳群調査集報』（宝塚市文化財調査報告第14集　1980年）

② ①に同じ

③ ①に同じ

④ 関西学院大学考古学研究会「長尾山の古墳群Ⅲ」『関西学院考古』第6号　1980年

⑤ 『宝塚市雲雀山古墳群』（宝塚市文化財調査報告第6集　1975年）

⑥ 岡野慶隆「横穴式石室の平面企画について――長尾山丘陵における横穴式石室を中心として――」『関西学院考古』第6号　1980年

⑦ 浅岡俊夫「宝塚市平井窯跡分布調査報告」『大阪文化誌』第14号　1982年

⑧ 『宝塚市埋蔵文化財遺跡分布地図及び地名表』（宝塚市文化財調査報告第8集　1983年）

⑨　石野博信「兵庫県宝塚市長尾山古墳群」『兵庫県埋蔵文化財集報』第１集　1971年

⑩　白石太一郎「畿内における古墳の終末」『国立歴史民俗博物館研究報告』第１集　1982年

⑪

	石室形態	大きさ（単位cm）	
		長さ	幅
A　型	横　穴　式	４００前後	９０～１００
B　型	〃	２１０～３００	６０～　８０
C　型	〃	１９０～２００	４５前後
D　型	竪　穴　式	６５～１２５	３５～　５０

なお、この分類は、石野博信氏による。

⑫　⑨に同じ

⑬　岡田　務「畿内における終末期の群集墳の一形態」『古代研究』４（元興寺仏教民俗資料研究所考古学研究室　1974年）

⑭　⑪に同じ

⑮　水野正好「雲雀山東尾根中古墳群の群構造とその性格」『古代研究』４（元興寺仏教民俗資料研究所考古学研究室　1974年）

⑯　『中山荘園古墳発掘調査報告書』（宝塚市文化財調査報告第19集　1985年）

⑰　現在、中尾山古墳、天武・持統陵古墳、舒明陵古墳、天智陵古墳、岩屋山古墳などが八角形墳としてあげられているが、発掘調査によって八角形の墳形が確認されたのは中尾山古墳のみである。天皇陵とされている古墳以外では、広島県新市町尾市１号墳や群馬県多野郡吉井町の神保一本杉古墳などが八角形の墳形を持つ可能性が指摘されている。

⑱　直宮憲一「西摂における終末期古墳の一様相」『末永先生米寿記念献呈論文集』　1985年
猪熊兼勝「中山荘園古墳と八角形墳」『中山荘園発掘調査報告書』（宝塚市文化財調査報告第19集　1985年）

Ⅳ　調査の経過

当研究会は1984年10月13日に雲雀山西尾根Ｂ支群の分布確認調査を行った後、未調査の８基及び、新たに確認した１基を含む計９基の現状実測調査を実施した。調査対象とした古墳は、３号墳・４号墳・５号墳・11号墳・13号墳・14号墳・15号墳・16号墳・17号墳である。なお、３号墳、４号墳を除く７基は墳丘実測のみにとどめた。

調査の経過は以下のとおりである。　（奥谷）

調査日誌抄

1984年10月20日

平板ポイント・レベルポイントを設定する。　雨のため午後は中止。

10月21日

未設定部分の平板ポイント・レベルポイントを設定する。

10月31日

3号墳の墳丘及び石室の実測を行う。

11月18日

13号墳の墳丘実測を行う。

11月24日

同上

12月9日

14号墳の墳丘実測を行う。

12月23日

4号墳の墳丘実測を行う。

12月26日

同上

1985年1月30日

13号墳付近の地形実測を行う。

2月27日

14号墳付近の地形実測を行う。

3月5日

同上

3月6日

15号墳付近の地形実測を行う。

3月15日

4号墳及び5号墳付近の地形実測を行う。

3月16日

同上

3月20日

17号墳を確認し、付近の地形実測を行う。

4月1日

5号墳の墳丘実測を行う。

4月2日

16号墳の墳丘実測を行う。

5月18日

11号墳の墳丘実測を行う。

9月2日

4号墳の奥壁、左右側壁の実測を行う。

9月5日

同上、及び4号墳の平面プランの実測を行う。

10月20日

4号墳の石室実測を完成させる。

11月10日

各古墳の細部観察を行い、これをもって現地の作業を終了する。

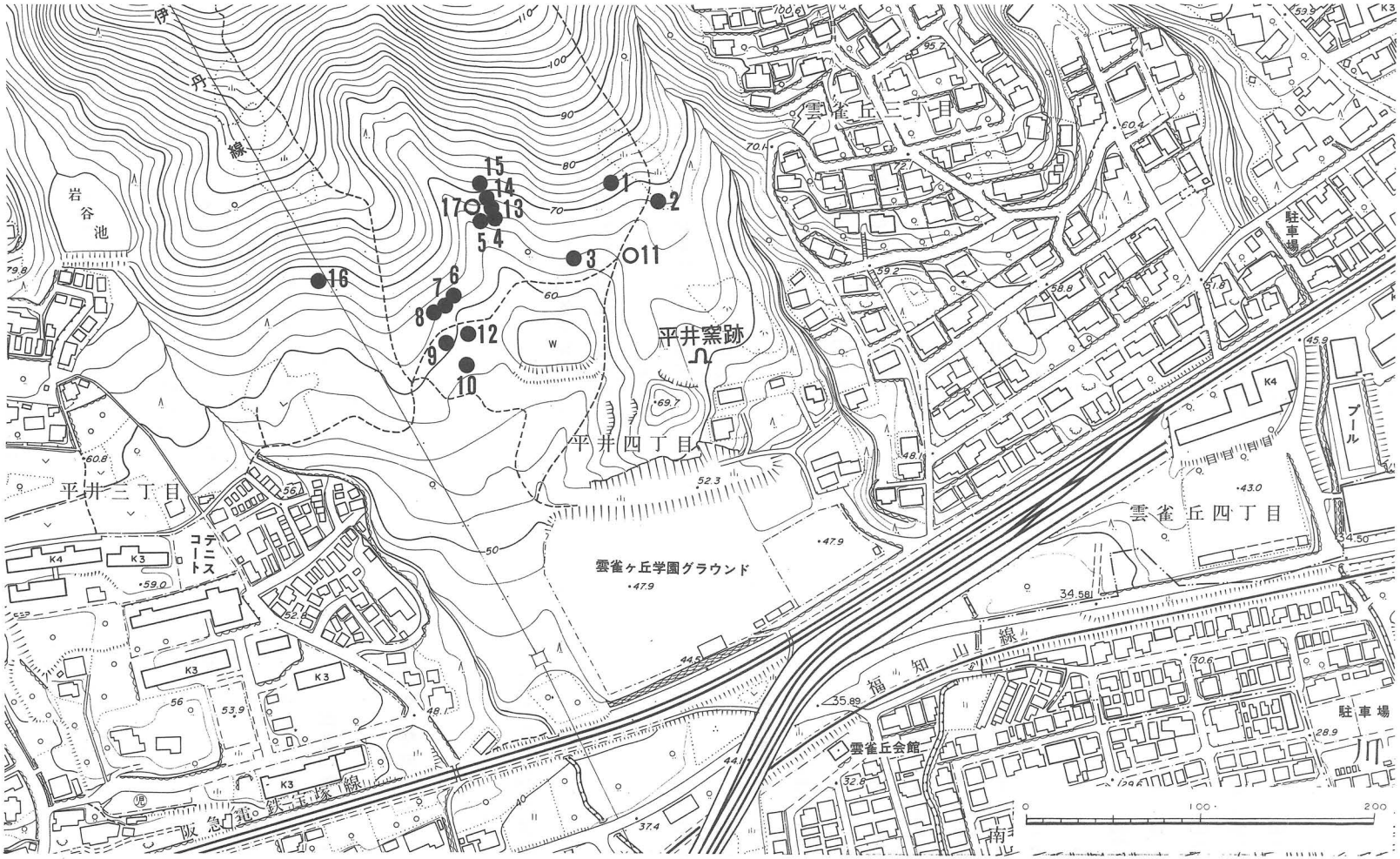
V 調査の概要

(1) 位置と現状

今回の調査対象地域は、長尾山丘陵全体から見れば東部、すなわち最明寺川東方の雲雀山西尾根の中腹部緩斜面、標高55～70m、東西250m南北150mにわたる地域である。行政区画は宝塚市平井4丁目にあたる。雲雀山西尾根古墳群B支群は、北から南にのびる雲雀山西尾根に存在する3支群のうち、その中央に位置する。全体として宅地開発等が行なわれていないため旧地形をよくとどめている。

今回は、B支群のうち東寄りに位置する3・4・5・13・14・15・17号墳と、西端の16号墳の9基について現状実測調査を行った。

実測調査に先だって雲雀山西尾根古墳B支群を踏査し分布状況を再確認した。



第3図　雲雀山西尾根古墳群B支群古墳分布図

分布調査にあたり主に『宝塚市埋蔵文化財分布地図及び地名表』を参考にし、記載されている雲雀山西尾根古墳群B支群の16基全てを確認した。更に分布図15号墳西方に新たに1基を確認し、今回分布図における古墳番号の続きとして17号墳とした。ただしこれは古墳でない可能性もある。(松林)

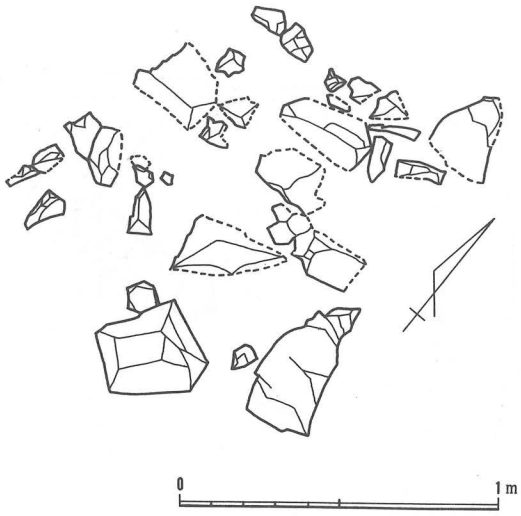
(2) 古墳の調査結果

(a) 雲雀山西尾根B支群3号墳

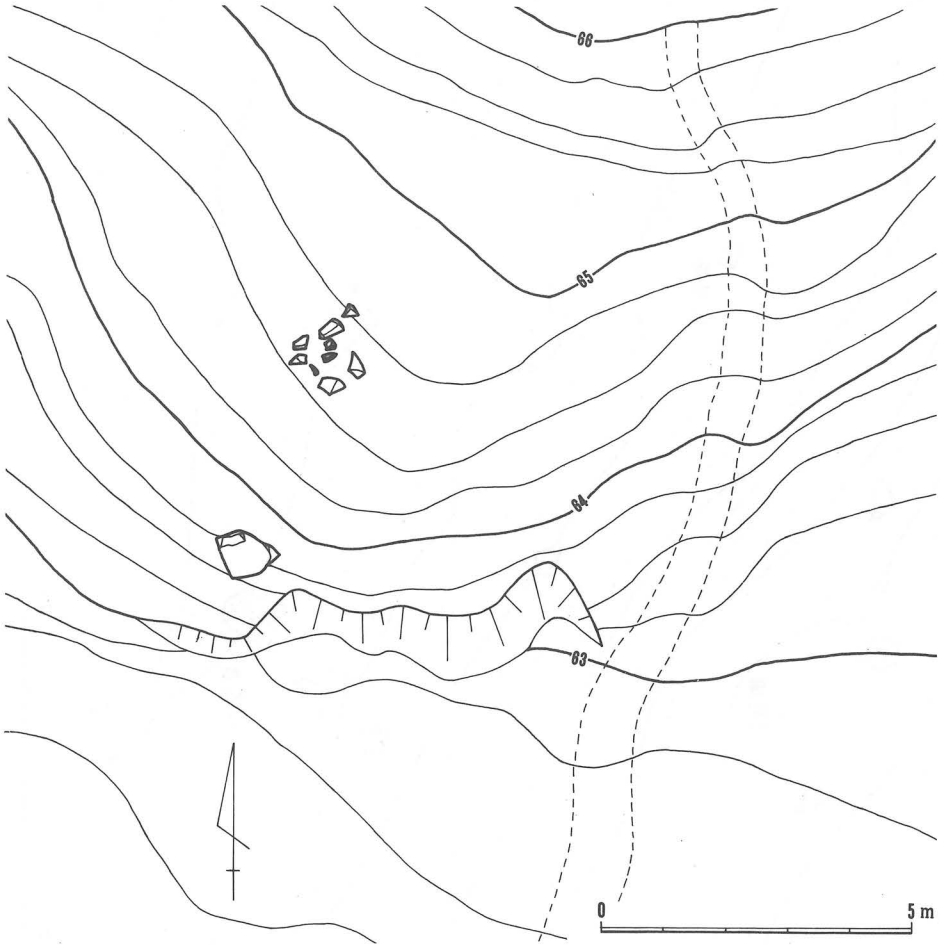
＜墳丘＞(第5図)

当古墳は標高約64 m の地点に比較的独立して位置している。

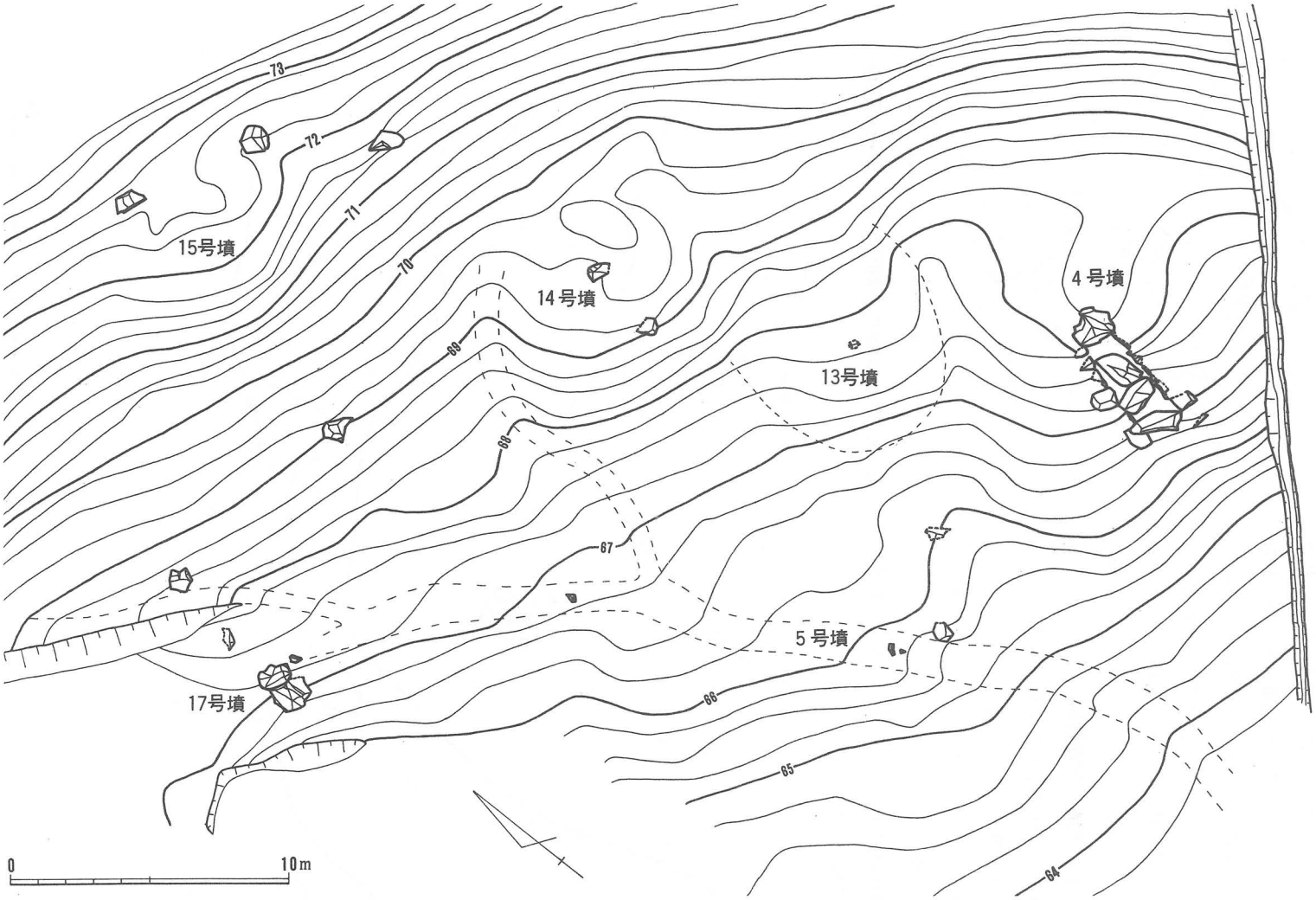
墳丘は封土流出が著しく、墳丘の規模及び形態は不明である。



第4図　雲雀山西尾根古墳群B支群3号墳石室実測図



第5図　雲雀山西尾根古墳群B支群3号墳地形実測図



第６図　雲雀山西尾根古墳群４・５・13・14・15・17号墳地形実測図

＜石室＞（第４図）

内部主体は、石の露出状況から見て主軸をほぼＮ－37°－Ｗにとる約１ｍ×約0.75ｍの箱式石棺であると思われる。深さについては不明である。なお、少し下方に比較的大きな転石が存在するが、当古墳との関係は不明である。（白江）

（ｂ）雲雀山西尾根Ｂ支群４号墳

＜墳丘＞（第６図）

当古墳は標高約66ｍに位置し、北から南に延びる尾根の南斜面に築造されている。

墳丘は封土がかなり流出してはいるが、裾部は保存されており、旧状を知ることができる。今回の地形実測調査では、墳径約13ｍの円墳で、墳丘高は約2.5ｍであると思われる。

＜石室＞（第７図）

封土の流出により現在天井石一枚が石室に架され、３枚が石室内に落ち込んだ状態で遺存し、側壁も大部分露出している。天井石が落ち込み、側壁の一部が失われているものの石室全体としての残存状態は良好であるといえる。

石室は主軸をＮ－14°－Ｅにとる右片袖式の横穴式石室である。石室内は天井石も落ち込み、土砂も多少堆積しており、全体の規模等の計測は困難であるため、以下現状での計測値及び表面観察の結果を記す。

石室の平面形は、玄室は胴張りで、袖部もわずかに見られるのみであり、羨道はわずかに裾拡がりを呈する。玄室内の持ち送りは左側壁では見られるが、右側壁ではほとんど見られない。

石室の計測値は、玄室長約3.25ｍ、羨道現存長約1.8ｍ、玄室部での床面からの高さは約2.1ｍである。石室内の現状での床面の幅は、玄室玄門付近で約1.52ｍ、中央部で約1.43ｍ、奥壁部で約1.32ｍ、羨道幅は玄門付近で約1.35ｍ、現存最端部で約1.40ｍを測る。

石の構築法は、奥壁は２段目まで大型の石、３・４段目にやや小型の石を横積みし、さらに隙間を人頭大の栗石で詰めている。側壁は使用石材が左右でかなり違っており、左側壁では大型の石からだんだん小型の石へと５～６段に横積みし、隙間を拳大の栗石で詰めている。右側壁では大型のやや扁平な石を３段に横積みし、隙間を人頭大の栗石で詰めている。左右側壁とも天井石の保存されていない部分は、３分の１ないし２分の１の側壁が失われている。（松林）

（ｃ）雲雀山西尾根Ｂ支群５号墳

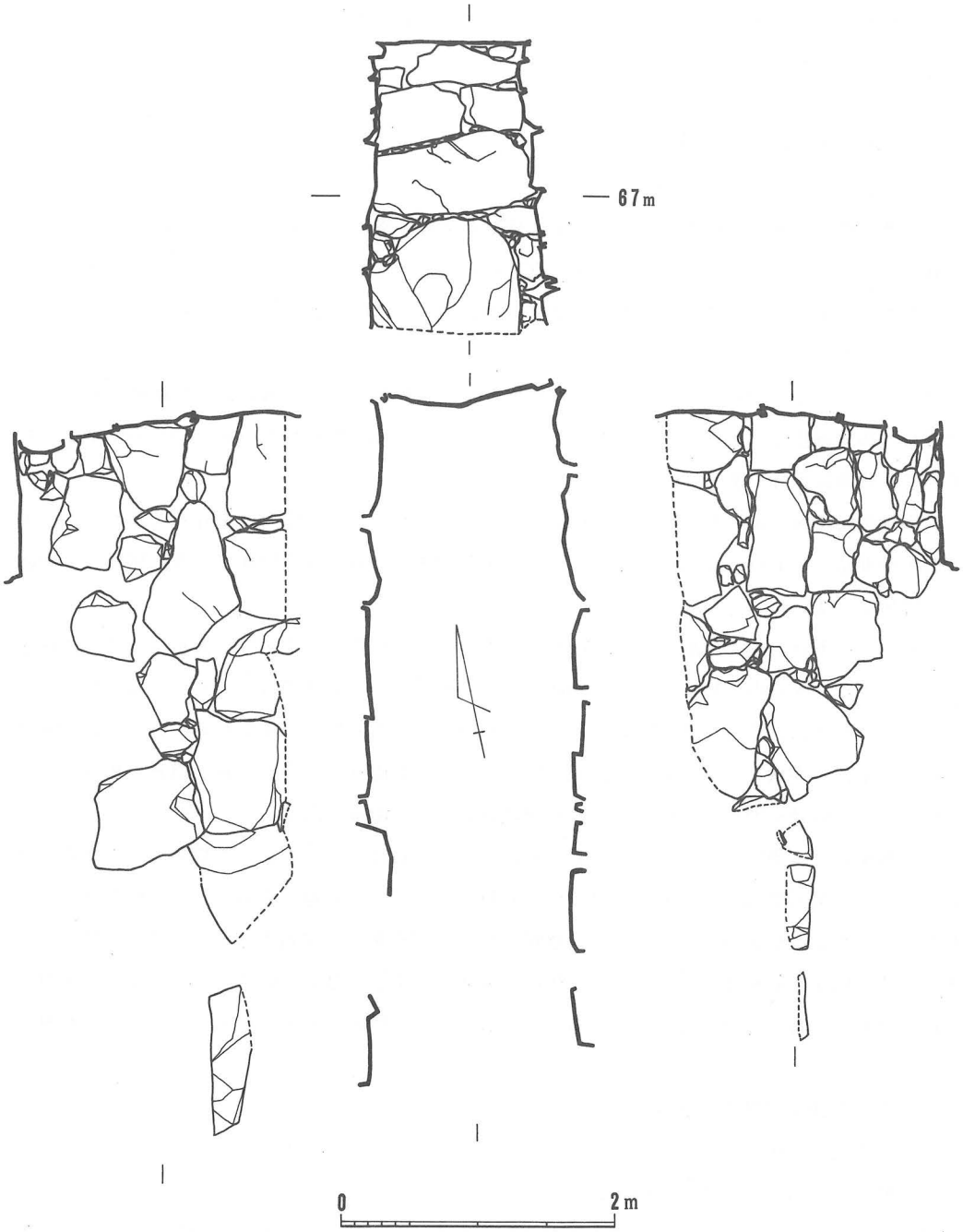
＜墳丘＞（第６図）

当古墳は４号墳の西、標高約65ｍに位置している。

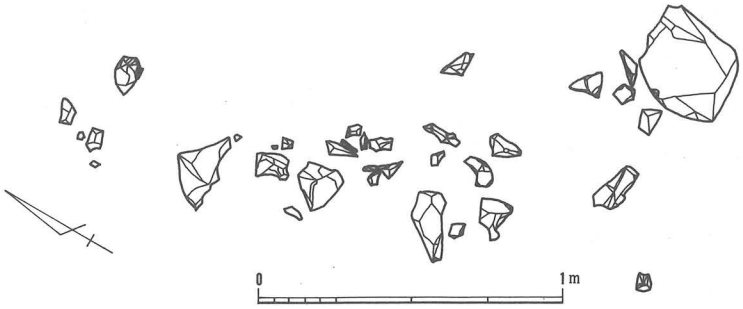
墳丘は全体に削平をうけ、さらに小径がその上を通っているため、墳丘の規模及び形態は不明である。墳丘の傾斜方向は南である。

＜石室＞（第８図）

石室は人為的改変をうけており、現在大小の石数十個が一部露出するのみである。したがってその規模及び形態は不明である。石の散乱方向は北北西から南南東である。（田川）



第７図　雲雀山西尾根古墳群Ｂ支群４号墳石室実測図

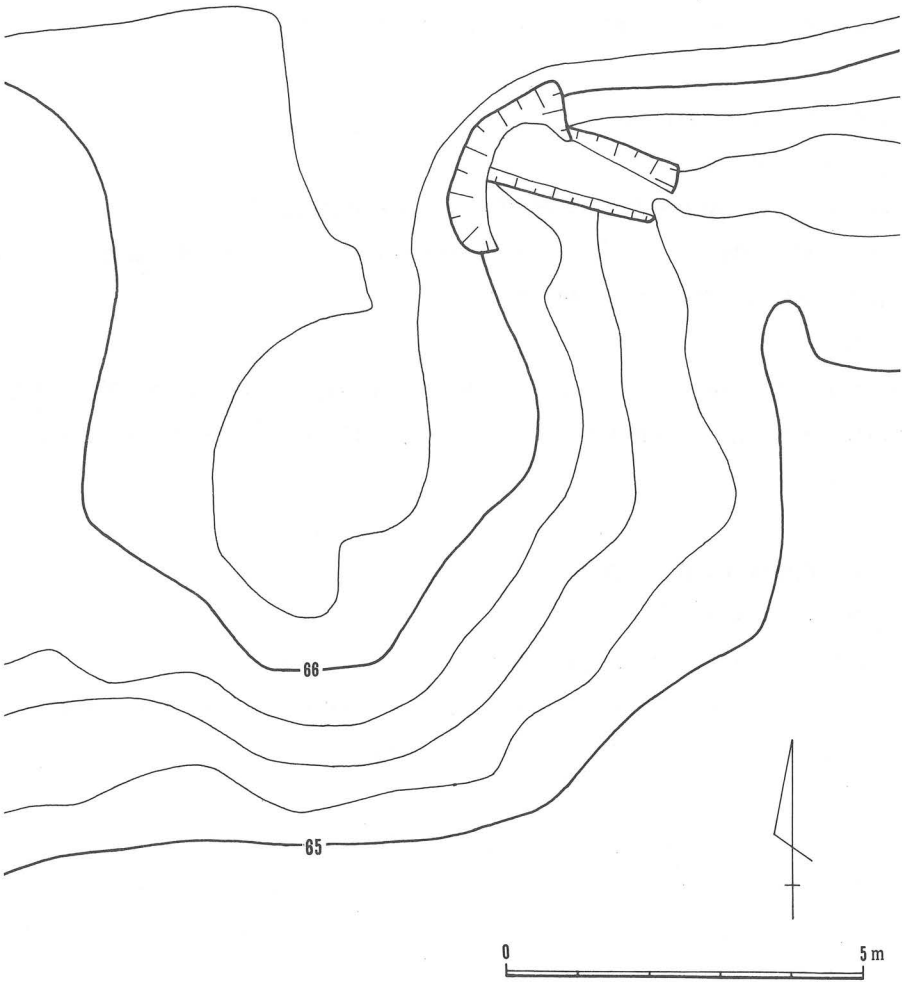


第８図　雲雀山西尾根古墳群Ｂ支群５号墳現状実測図

（ｄ）雲雀山西尾根Ｂ支群11号墳

＜墳丘＞（第９図）

当古墳は２号墳の南南東、標高約65ｍに位置し、北から南に延びる尾根の南斜面に築造されている。



第９図　雲雀山西尾根古墳群Ｂ支群11号墳地形実測図

墳丘は北側・南側で封土の流出がみられ、裾部も削平を受けているが、南側・東側はほぼ旧状をとどめる。今回の地形実測調査によると、径約10mの円墳で、墳丘高約1.4mであると思われる。

＜石室＞

ボーリング棒での探査によったが、内部主体については明確ではない。（奥谷）

（e）雲雀山西尾根B支群13号墳

＜墳丘＞（第6図）

当古墳は4号墳の北西に接する標高約68mに位置している。

墳丘は封土の削平は認められず、ほぼ旧状をとどめている。今回の地形実測調査によると径約7mの円墳で、墳丘高は約1.2mであると思われる。

＜石室＞

墳丘の遺存状態が良好でほぼ完全に封土に覆われており、墳頂に石室を構成すると思われる石がわずかに露出しているのみである。ボーリング棒での探査によって天井石の存在は確認できたが、石室の形態及び規模までは明確にすることはできなかった。（吉田）

（f）雲雀山西尾根B支群14号墳

＜墳丘＞（第6図）

当古墳は北西の15号墳と南東の13号墳の間、標高約67mに位置する。

墳丘は北西が多少削平されているが、よく旧状を保っている。今回の実測調査によると径約10mの円墳で、墳丘高は1.8mであると思われる。

＜石室＞

墳頂にわずかに石が露出しているが、はっきりと石室のものであるとは認め難い。また墳頂付近にはかなり大きな転石が存在するが、石室の石とは関係のないものと思われ、石室形態は不明である。（長尾）

（g）雲雀山西尾根B支群15号墳

＜墳丘＞（第6図）

当古墳は14号墳の北西、標高約72mに位置する。

墳丘は北斜面に削平がみられるが、南斜面は比較的旧状を保っている。今回の地形実測調査によると径約8mの円墳で、墳丘高は約1mであると思われる。

＜石室＞

簡単なボーリング探査の結果、石室を構成すると思われる石が遺存しているが、その形態及び規模は不明である。尚、墳頂付近に大型の石が2個存在しているが、石室を構成するものであるかどうかは不明である。（伊東・松林）

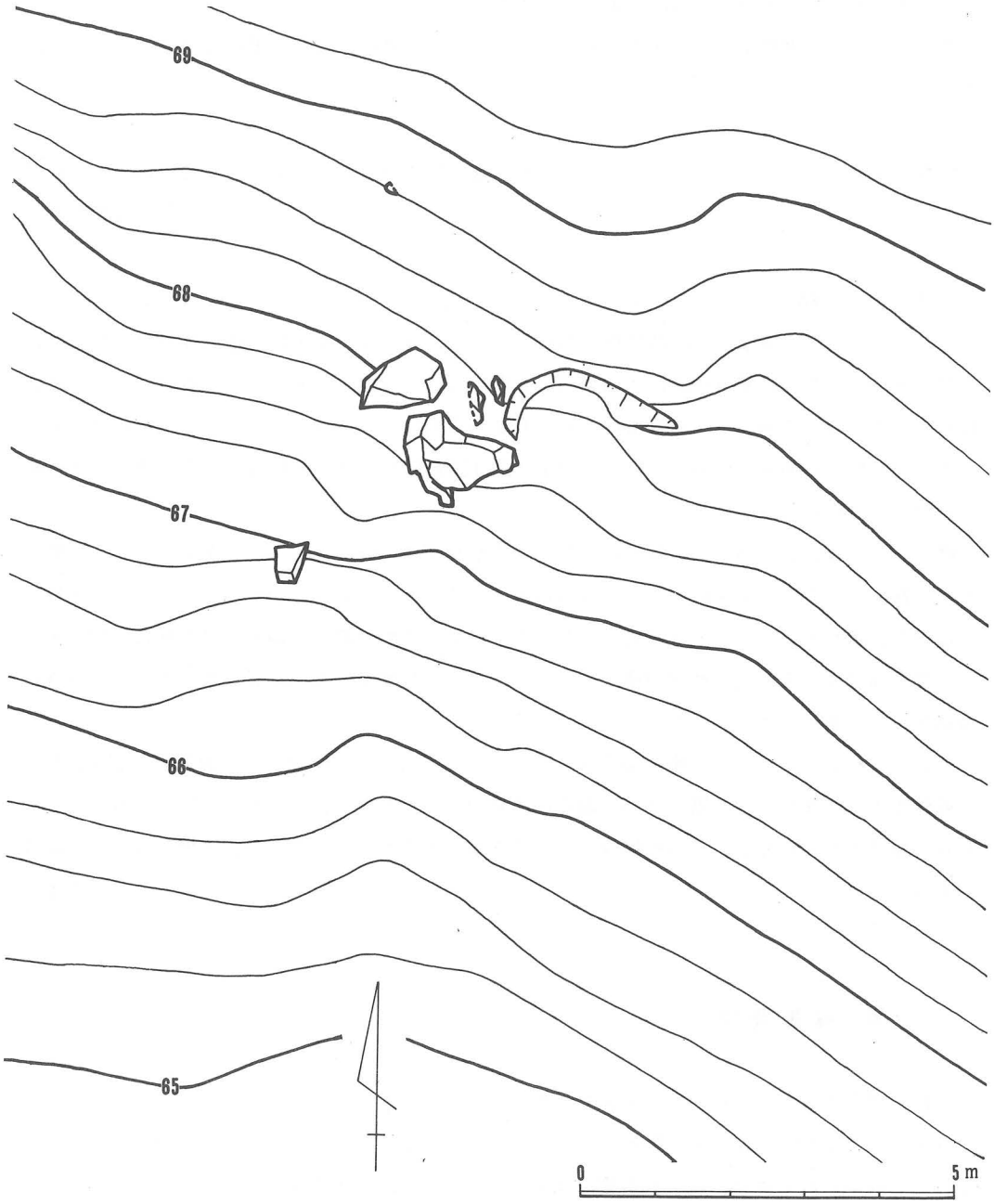
（h）雲雀山西尾根B支群16号墳

＜墳丘＞（第10図）

当古墳は標高約68mに位置し、西から東に延びる尾根の南斜面に築造されている。

墳丘は封土の流出が著しく、特に墳丘東部は封土が大きくえぐり取られ、裾部も石室下部より削平をうけて急斜面を呈しており旧状を保っているとは言い難く、墳丘の規模及び形態は不明である。

＜石室＞



第10図　雲雀山西尾根古墳群B支群16号墳地形実測図

現状では天井石と思われる石２個が露出している他、石室を構成すると思われる石２個がそれぞれ一部露出している。簡単なボーリング探査によると、それらの付近にも石の遺存が認められるが、石室規模は明確にはしえなかった。（松林）

（ｉ）雲雀山西尾根Ｂ支群17号墳

＜墳丘＞（第６図）

当古墳は15号墳の南西、標高約67ｍに位置する。

墳丘は封土の流出が著しく旧状をとどめているとは言い難く、墳丘の規模及び形態は不明である。

＜石室＞

残存状態は極めて悪く、風化をうけた石２個が露出しているのみであり、石室の規模及び形態は不明である。（佐々木）

(3) 小　結

上記した９基の古墳は雲雀山西尾根の南斜面にある。４・13・14・15号墳の４基は北から南に延びる尾根上、標高約65ｍ～68ｍに南東から北西にほぼ一直線上に並び、４号墳の西に５号墳、14号墳の西に17号墳がある。16号墳はこれら６基から西に約150ｍ離れた東から西に延びる尾根の南斜面の標高約68ｍに位置し、11号墳は東に約120ｍ離れた標高約65ｍに、３号墳は約50ｍ離れた標高約64ｍに位置する。

墳丘の形態は、11・13・14・15号墳は遺存状態が良好で円墳であることが確認でき、４号墳は石室が露出し、更に石室内に天井石が落ち込んでいるが円墳であるといえる。３・５・16・17号墳は封土流出が著しく、特に５号墳は人為的削平を受けており墳丘の規模及び形態は不明である。

内部主体は４号墳が右片袖式の横穴式石室であり、３号墳が小型の箱式石棺であること以外は現状からでは確認しえなかった。

なお、11号墳はボーリング棒による探査を行ったが内部主体は確認されておらず古墳ではない可能性がある。また、17号墳は今回の調査中に発見されたもので、簡単なボーリング探査で石の存在が確認されているが、石室を構成する石であるかどうかは不明であり、古墳ではない可能性がある。（森澤）

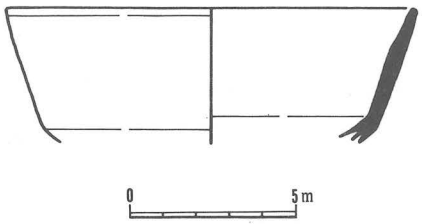
Ⅵ　採集遺物

今回の調査中に若干の遺物を表面採集したので報告しておく。

採集された遺物は須恵器・土師器であるがいずれも小破片であった。須恵器のうち２点は５号墳付近で採集されており、いずれも甕の体部で、１つは器表はタタキののちヨコナデで消し、内面は同心円文叩目がみられ、もう１つは器表は自然釉を呈し、内面は同心円文叩目がみられるが、

時期を明確に比定できるものではない。

平井窯跡については、1915年の笠井新也氏の報告①では7世紀後半、最近では浅岡俊夫氏の報告②では7世紀中葉頃の須恵器の窯とされているが詳細は不明である。今回、窯跡周辺において若干の須恵器片を表面採集したが、実測が可能なものは浅岡氏報告のいう第二窯跡付近で採集した坏身口縁部の1点のみである。坏身は口径6.1㎝、残存高4.1㎝、口縁内外面ともヨコナデで調整しており、焼成は良好である。高台が付くか否かは不明であるが、時期は7世紀後半頃に比定できよう。（第11図）



第11図　採集遺物

なお、採集遺物は全て関西学院大学考古学研究会が保管している。　（松林）

＜註＞

① 笠井新也「摂津国川辺郡平井山に於ける古代製陶所の遺蹟及びその遺物」『考古学雑誌』第5巻第9号　1915年

② 浅岡俊夫「宝塚市平井窯跡分布調査報告」『大阪文化誌』第14号　1982年

Ⅶ　まとめ

今回の調査をもって、当研究会による雲雀山西尾根古墳群B支群の墳丘測量調査及び実測調査は、ほぼ終了したと言える。今考えられることを列挙すれば以下のようになる。

① 本支群の内部主体は、有袖式の横穴式石室、無袖式の横穴式石室、小型の箱式石棺に分類できる。2・4・9・10号墳は有袖式の横穴式石室であり、1号墳は無袖式の横穴式石室、3号墳は小型の箱式石棺である。なお、6・7・8・16号墳は有袖式の横穴式石室、5・13・14号墳は無袖式の横穴式石室である可能性が強い。11・12・15・17号墳については不明である。

② 本支群は、6世紀の中葉に造墓が開始され②、少なくとも7世紀の前半までは造墓が行われたと考えられる③。長尾山の各古墳群を構成する支群（支群に分けられていない中筋山手古墳群は古墳群＝支群として扱う。）が、多くは6世紀型か7世紀型の古墳どちらか一方のみによって構成されている④なかで本支群のあり方は注目される。また、これに加えて6世紀型と7世紀型の古墳が混在する支群においてもどちらかが極端に少ないことなどから、長尾山の古墳群においては1つの支群は6世紀型か7世紀型の古墳どちらか一方のみによって構成されるのが一般的であると思われる。

③ グループ分けは難しいが、6・7・8号墳、9・12号墳、4・5・13・14・15・17号墳は、それぞれ1グループをなすかもしれない。

今、我々に言えることはこれだけであるが、少しでも長尾山の古墳群の性格解明に役立つことを願って終りとしたい。　（白江）

＜註＞

① 1・2号墳は、1972年宝塚市教育委員会によって発掘調査された。（『雲雀山古墳群』宝塚市文化財調査報告第6集 1975年）

② 上記註①文献によれば、2号墳は6世紀中葉とされる。

③ 白石太一郎「畿内における古墳の終末」（『国立歴史民俗博物館研究報告』第1集 1982年）によれば、箱式石棺は7世紀第3四半期から一部第4四半期まで下るとされる。

④ 宝塚市教育委員会『長尾山の古墳群調査集報』（宝塚市文化財調査報告第14集 1980年）

関西学院考古既刊

創刊号 内部学習会の資料集（謄写版）（本文34頁）在庫なし

第2号 関西学院構内古墳現状・遺物報告 関西学院大学考古学研究会（本文32頁、図版7葉）在庫なし

第3号 仁川流域の後期古墳 関西学院大学考古学研究会（本文24頁、図版13葉）在庫なし

第4号 長尾山の古墳群Ⅰ） 関西学院大学考古学研究会、西宮市甲風園採集の弥生式土器 折井千枝子・坂井秀弥、横穴式石室の平面形について 岡野慶隆（本文28頁、図版17葉）在庫なし

第5号 長尾山の古墳群Ⅱ）・西宮市獅子ケ口の須恵器・関西学院構内採集の須恵器 関西学院大学考古学研究会、雲雀丘学園所蔵の長頸壺 坂井秀弥、猪名県と畿内の県 岡田務（本文34頁、図版8葉）頒価￥900

第6号 滋賀県東浅井郡浅井町北野遺跡発掘調査概要報告・長尾山の古墳群Ⅲ） 関西学院大学考古学研究会、宝塚市雲雀丘古墳群C北群4号墳出土の須恵器 直宮憲一、西宮市満池谷墓地内奥畑古墳について 古川久雄、五色塚古墳出土の古式土師器とその編年的位置づけ 兼康保明、横穴式石室の平面企画について 岡野慶隆（本文82頁、図版13葉）在庫なし

第7号 池の沢庭園遺跡発掘調査概要 兼康保明 納谷守幸 木谷秀次、古墳のあるキャンパス 武藤誠、水田址からみた初期の稲作技術について 坂井秀弥、書評－黒崎直「近畿における8・9世紀の墳墓」岡野慶隆（本文32頁）頒価￥700

送料は1冊につき200円、2冊まで250円、4冊まで300円です。

調 査 報 告

滋賀県高島郡高島町拝戸古墳群第３支群第10号墳現状実測調査報告

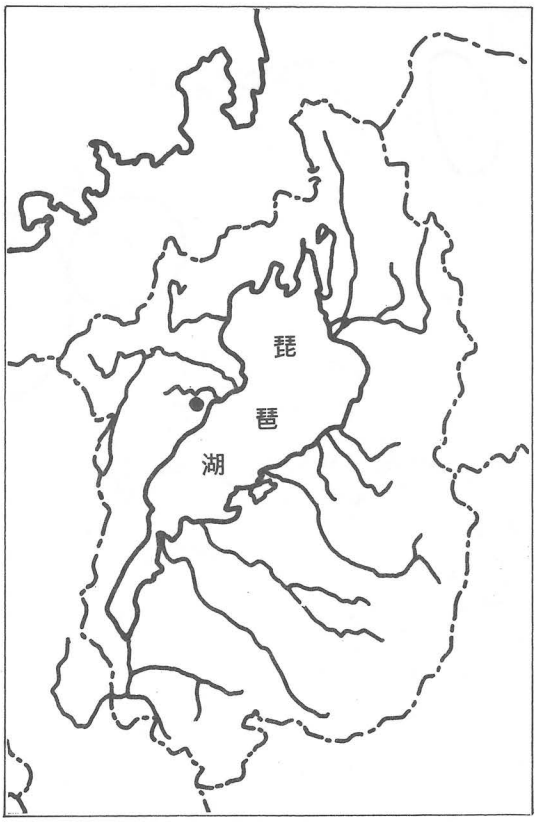
関西学院大学考古学研究会

1．はじめに

拝戸古墳群は滋賀県高島郡高島町下拝戸に所在する。琵琶湖西岸における唯一の沖積平野である高島平野の南部に広がる山麓の緩斜面に３支群が分布している。国鉄湖西線関係の分布調査の時点では計21基が確認され、第１支群は円墳３基から成り内部主体として木棺直葬1基、横穴式石室２基、第２支群は全て横穴式石室を内部主体とし前方後円墳、方墳各１基、円墳６基の計８基、そして第３支群は第２支群と同様全て横穴式石室を内部主体とし、前方後円墳１基、円墳９基の計10基から構成されると報告されている。①

その後の調査により第２支群で４基、第３支群で１基がそれぞれ新たに確認され計26基となった。また、円墳と思われていた第３支群第10号墳が帆立貝式の墳丘を有し、築造時期も他の古墳よりも遡る可能性が指摘された。②

今回、関西学院大学考古学研究会は帆立貝式前方後円墳と推定される古墳について、墳形の確定を図り今後の研究と保存の為の資料を作成するべく、昭和57年10月と11月の２度にかけて現状実測調査を実施した。



第１図　拝戸古墳群位置図

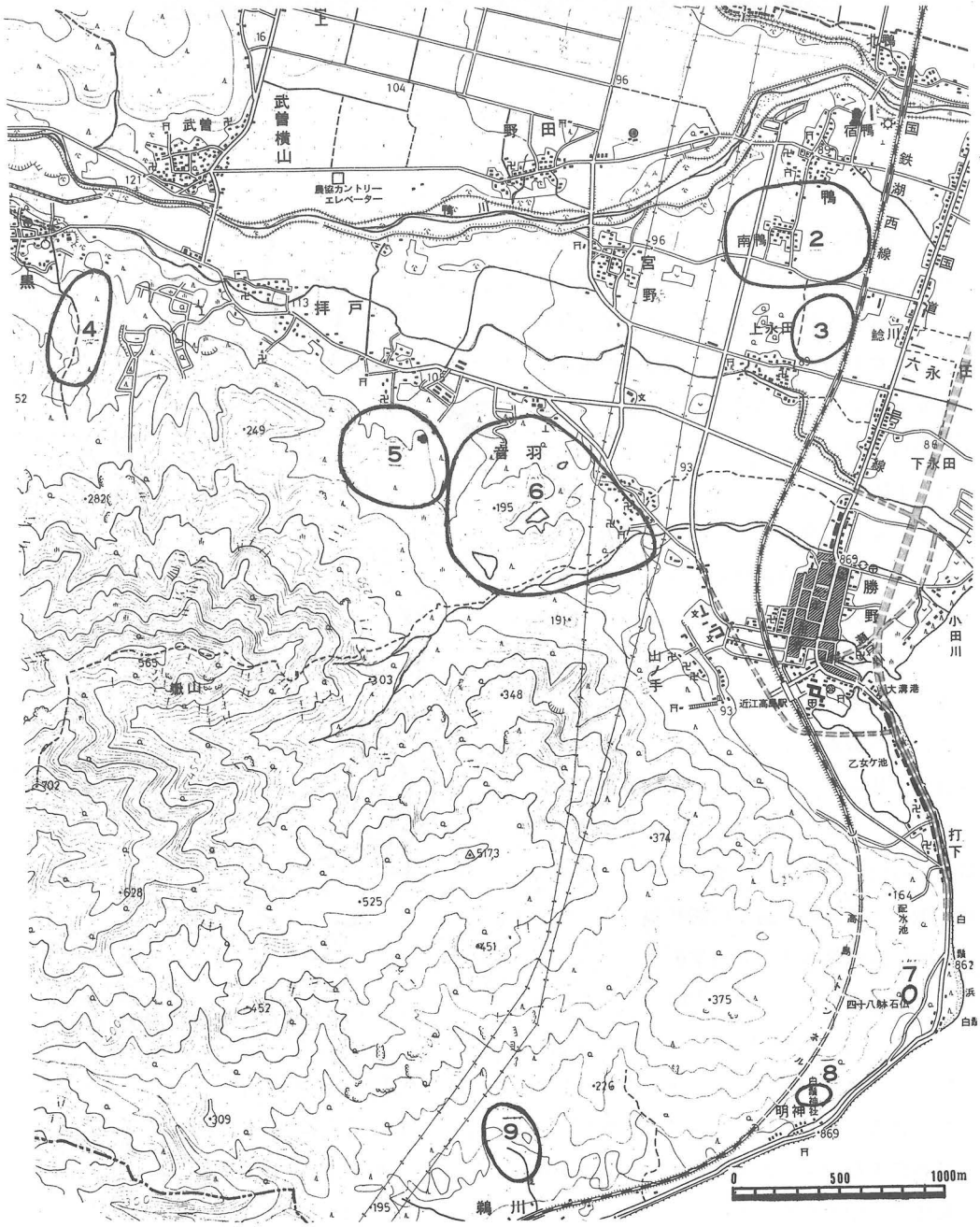
なお調査にあたり、地元の高島町教育委員会技師の白井忠雄氏、同調査員の谷本博氏を初め、滋賀県教育委員会文化財保護課技師の兼康保明氏、滋賀県埋蔵文化財センター嘱託の山口順子氏から御指導、御協力をいただいた。ここに記して厚くお礼申し上げます。

2．歴史的環境

高島町は安曇川と鴨川による堆積作用によって形成された平野部の南端を占める。当地方の縄文・弥生時代の実態についてはほとんど知られておらず、縄文時代早・晩期の土器片が、また弥

生時代前・中期の土器片がそれぞれ少量ずつ鴨遺跡から出土しているにすぎない。[3]

古墳時代になると、鴨川南岸約100ｍの地点に全長約45ｍの前方後円墳である鴨稲荷山古墳が築かれる。大正12年に京都帝国大学文学部考古学研究室により発掘調査が実施され、二上山の白



1 鴨稲荷山古墳　2 鴨遺跡　3 永田遺跡
4 東山古墳群　5 拝戸古墳群　6 音羽古墳群
7 四十八躰古墳群　8 白鬚神社古墳群　9 阪畑古墳群

第2図 周辺の遺跡分布図

色系凝灰岩製の家形石棺内からは金銅製の冠・沓・魚佩や金製の耳輪・垂下飾などが、棺外からは馬具・須恵器が検出された。特に棺内に納められた金銅製、金製の副葬品は新羅慶州の王陵級の古墳から出土する副葬品との類似性が指摘されており、被葬者が朝鮮半島との深いつながりを有していたことが窺える。④ 被葬者については当初、継体天皇の父である彦主人王ではないかと推定されていたが、副葬品の年代が6世紀前半と考えられ年代が一致しない為に、現在では継体天皇擁立に関係した当地方の有力豪族が考えられている。⑤

その後、鴨稲荷山古墳に関しては当研究会が現状実測調査を昭和53年に実施している。⑥ また昭和56年に県道拡幅工事に先立つ周濠確認調査が実施され、周濠の有無については確認できなかったものの古墳の南方に方形墳が埋没していることが判明した。⑦

南部の山麓一帯には阪畑、白鬚神社、四十八躰、音羽、拝戸、東山の各古墳群が形成される。⑧ 音羽古墳群については石穴支群の7基が昭和57年から翌年にかけて発掘調査された。いずれも全長7～10m程の横穴式石室を内部主体とし、6世紀後半に築造が開始されることが判明した。第10号墳奥壁からは棺台と推定される最大幅1.55mの大石が据えられた状態で検出され、第14号墳からは銀象嵌の施された大刀の鍔が検出された。⑨

奈良時代になると、鴨遺跡南方の永田遺跡に集落が営まれ、⑩ 続く平安時代前期には鴨遺跡に地方官衙と推定される掘立柱建物が建てられる。⑪

3．調査の結果

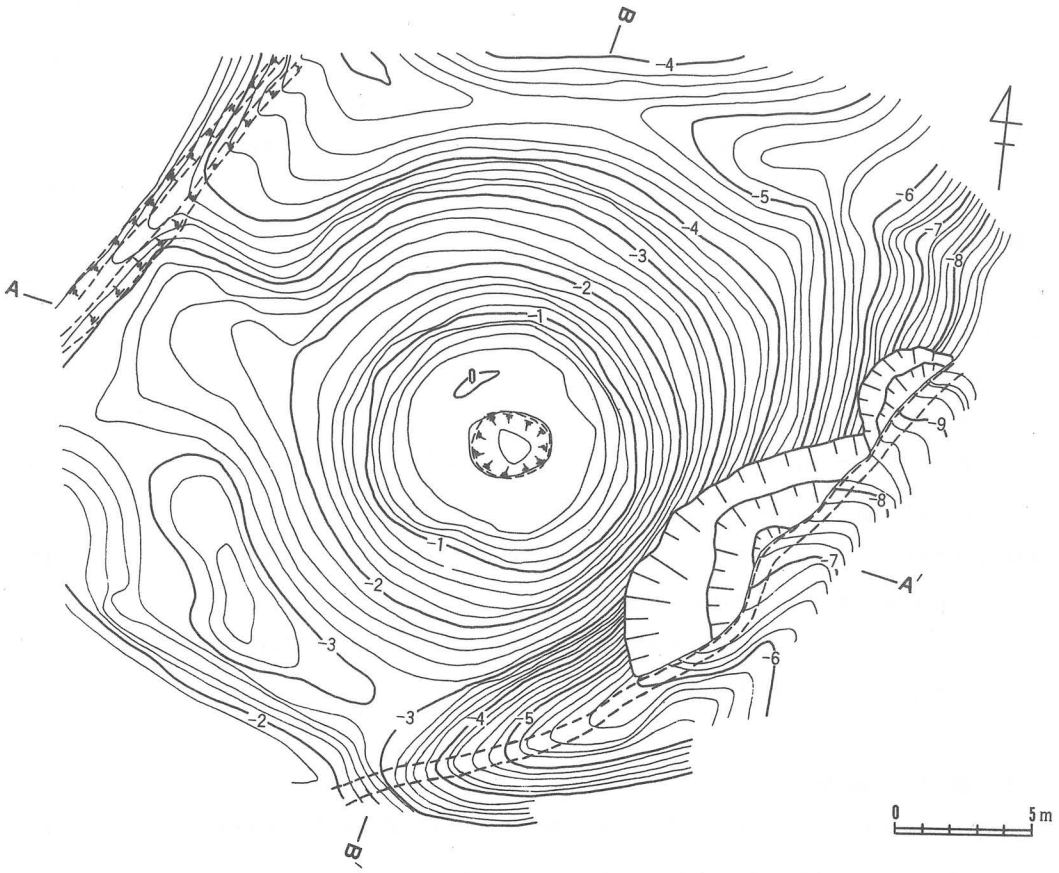
古墳は主軸を東西にとる帆立貝式前方後円墳である。後円部東側が幅約12mに渡り崩れてはいるが、全体としては比較的良く原状を留めている。

第3図　造り出し部より見た後円部

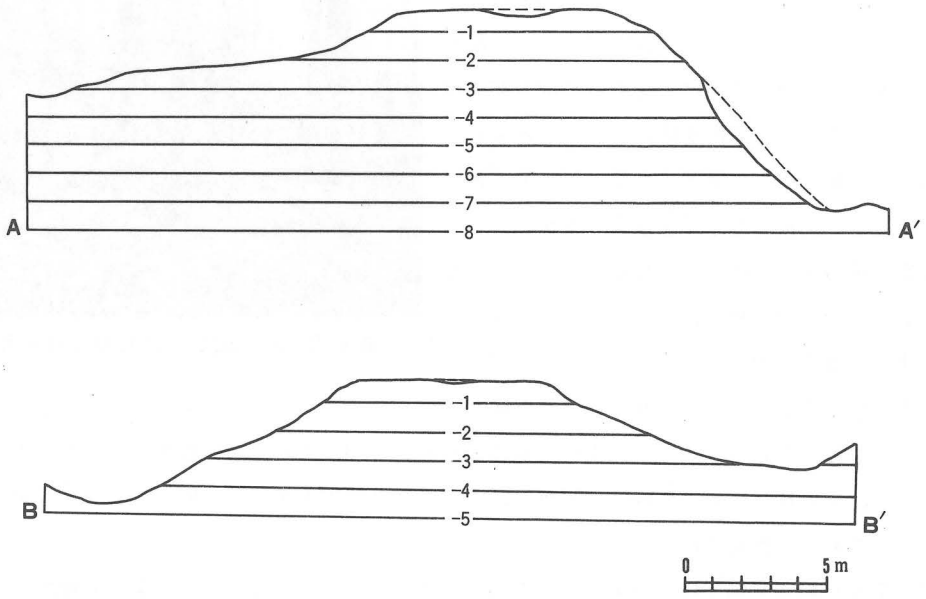
墳丘は北側部分に二段築成が認められる。基底線は後円部では－4.4m、前方部では－3.8mのコンターラインがまわっている。後円部のテラス部分は－3.0mから－1.8mにかけて認められ前方部平担面へと続いている。後円部第二段は－1.8mより－0.2mまで急傾をなして墳頂へと至っている。後円部南側でも－1.0m付近まで急傾をなすが、それ以下は墳丘基底線まで緩やかな傾斜が続きテラス部分と墳丘第一段が明瞭ではない。恐らく平野部から望まれる墳丘北側のみを二段築成とし、視覚的に古墳の規模をより大きく見せるという意図が込められていたものと考えられる。

前方部では－2.2mのラインが北東へ舌状に流れているが、これは後円部第二段の裾部が崩れた為であり、前方部平坦面の外縁は－2.4mのラインとなり後円部第二段の裾－1.8mまで平坦面を形成していたものと推定される。

前方部基底線が北側では－3.8mであることは先述した。前方部正面に北東から南西へと登る里道が続いており、この部分の基底線を想定するのは少し困難であるが、およそ－4.2mと考えて大



第4図　第 3 支 群 第 10 号 墳



第5図　墳　丘　断　面　図

過ないものと思われる。

以上のように考えると、基底部からの高さは北側では後円部、前方部とも第一段が約1.4m、後円部第二段が約4m、南側では段築がなされておらず後円部は約2.6m、前方部は約0.6mとなる。

平面規模については全長約25m、後円部直径が遺存状態の良い南北で約20m、前方部幅約8mを測る。

墳頂部は直径約7mを測るが、ほぼ中心に直径3m程の凹みが見られる。恐らく盗掘坑であろう。埋葬主体は墳頂の規模から考えると竪穴式石室よりも木棺直葬、或いは粘土槨を想定する方が妥当であろう。

前方部南裾付近と後円部北側斜面において拳大程の石が数個散見される。本来の位置ではなく転落したものと思われるが、外部施設として葺石の存在が予想される。なお埴輪は見あたらなかった。

本墳のすぐ北側には、横穴式石室を前方部と後円部にそれぞれ内包する全長約19mの前方後円墳（第8号墳）が存在するが、本墳との境付近に幅約3m、深さ0.2m程の溝が見られる。この溝は深さを増しながら東方へと続き両古墳を区画するものと考えられる。しかし、この溝が本墳築造の際に掘られたものなのか、それとも第8号墳が近接して築かれた際に新たに設けられたものなのか、いずれであるかは現状調査の段階では判定が困難である。

4．まとめ

現状実測調査の結果、第3支群第10号墳は外部施設として葺石の存在が推定される二段築成の帆立貝式前方後円墳であり、築造時期が5世紀代に遡ると考えられることが明らかになった。従来、高島町では中期に遡る古墳は知られていなかったのであるが、本墳が6世紀後半から築造され始める群集墳に取り囲まれるように存在していることから、本墳の被葬者である在地有力首長と群集墳を築いた集団との間には何らかの血縁的関係を有していたものと考えられる。

ここで、5世紀代における当地方の古墳築造状況について少し述べてみたい。

高島郡内において5世紀代から築造される古墳として新旭町の熊野本古墳群⑫、下平古墳群⑬、安曇川町の王塚・田中古墳群⑭が挙げられる。熊野本古墳群は前方後方墳1基、方墳7基、円墳28基から、下平古墳群は方墳1基、円墳5基から、そして王塚・田中古墳群は現在宮内庁陵墓参考地である帆立貝式前方後円墳1基⑮と円墳1基、方墳43基から構成されている。各古墳群とも中期の段階において古墳が群集する傾向にある。これら古墳群は高島平野を開発、統合した在地の三大有力集団の抬頭を示すものであろうが、気になるのは主墳と目される古墳の墳形がいずれも前方後円墳ではなく前方後方墳、帆立貝式前方後円墳、方墳といった点である。周辺において前方後円墳が築かれているのは、4世紀末から5世紀初めと推定されている西浅井町の丸山古墳群第1号墳⑯のみである。早くから大和朝廷との関係を有したものと考えられる。

丸山古墳群のように早い時期に前方後円墳を築造し得る勢力を持つ在地首長が存在するにもかかわらず、5世紀代の在地首長は前方後円墳以外の墳形を採用している。この時期に在地首長の勢力が著しく弱体化したとも考えられるが、先述した王塚古墳は帆立貝式の墳形でありながら埴

輪・葺石を有する二段築成の直径約58mという規模を誇り、継体天皇の父彦主人王の墓と目されていることからすれば、この時期の首長達が前方後円墳を築き得る程の勢力を有していなかったとは一概には考えられない。このような動向に対して、5世紀代には河内王朝の規制力が強化された為に在地首長達が前方後円墳を築造できなくなったという政治的な理由を考える見解⑰がある。

高島町内において、5世紀代に唯一古墳を築造することの可能であった在地首長がその墳形を帆立貝式前方後円墳とし、前方後円墳を採用していないのは先にみた古墳群と同様である。しかし、首長墳のみが築かれ首長に続く有力者の古墳が築造されていない点が他地域と異なっている。

今回の帆立貝式前方後円墳の実測調査を通じて気づかれる点を述べてきたが、5世紀代における当地方の首長達の動向を解明する為には、他地域との比較や大和朝廷との関係などを含めてより広い視野からの検討が必要であろう。　（文責　渡部俊哉）

＜註＞

① 「拝戸古墳群」（『国鉄湖西線関係遺跡分布調査報告書』滋賀県教育委員会　昭和43年）

② 『増補　高島郡誌』（高島郡教育会　昭和47年）

③ 『鴨遺跡』（高島町教育委員会　滋賀県教育委員会　財団法人滋賀県文化財保護協会　昭和55年）

④ 『近江国高島郡水尾村の古墳』（京都帝国大学文学部考古学研究報告第八冊　大正12年）

⑤ 『高島町史』（高島町役場　昭和58年）

⑥ 関西学院大学考古学研究会　「高島郡高島町鴨稲荷山古墳現状実測調査報告」（『滋賀文化財だより』第22号　財団法人滋賀県文化財保護協会　昭和54年）

⑦ 『鴨稲荷山古墳周湟確認調査』（高島町教育委員会　昭和56年）

⑧ ⑤に同じ

⑨ 『音羽古墳群Ⅰ　～石穴支群調査概要報告～』（高島町教育委員会　昭和59年）

⑩ 高島町教育委員会の白井忠雄氏の御教示による。

⑪ ③に同じ

⑫ 『高島郡新旭町熊野本　熊野本遺跡分布調査報告書』（滋賀県教育委員会　昭和44年）

⑬ ⑤に同じ

⑭ 「王塚・田中古墳群」（『国道161号線・高島バイパス遺跡分布調査概要報告書』　滋賀県教育委員会　昭和46年）

⑮ もとは円墳であったが後世に前方部が付設された、とする説もある。

⑯ 「丸山古墳群」（『国鉄湖西線関係遺跡分布調査報告書』　滋賀県教育委員会　昭和43年）

⑰ 小野山節　「五世紀における古墳の規制」（『考古学研究』第16巻第3号　昭和45年）

調 査 報 告

中世の花崗岩石切場を訪ねて

―― 滋賀県蒲生郡日野町蔵王勝手谷踏査記 ――

兼　康　保　明

1．蔵王・かったい谷

中世石造美術を生産面から眺めた時、その素材である石材の採掘法や石切場について、これまでからあまりとりあげられることはなかった。その理由の一つには、中世の石切場が近世以降も操業を続けているため、古い採掘跡を残していないことにもよるのであろう。石材として中世石造美術を代表する花崗岩は、地名を冠した御影石の名が代名詞となるほど、神戸市内の産出地が全国的に有名である。しかし、中世に遡って、石切場の実態となると不明な点が多い。

「石造美術の宝庫」と例えられる近江は、花崗岩が全域にわたって産出し、各所に石切場があったようである。そのような中で、中世の石切場の問題を、石大工とその文化圏としてとらえようとしたのは、長年近江の石造美術を調査してこられた田岡香逸氏である。田岡氏は多年の調査成果から、近江の中に大和の技術をうけた石造美術の文化圏があることを抽出した。そして、その文化圏の中心を湖東の蒲生郡日野町蔵王に求め、良質の花崗岩を産出する石切場のあったことを問題提起された。①

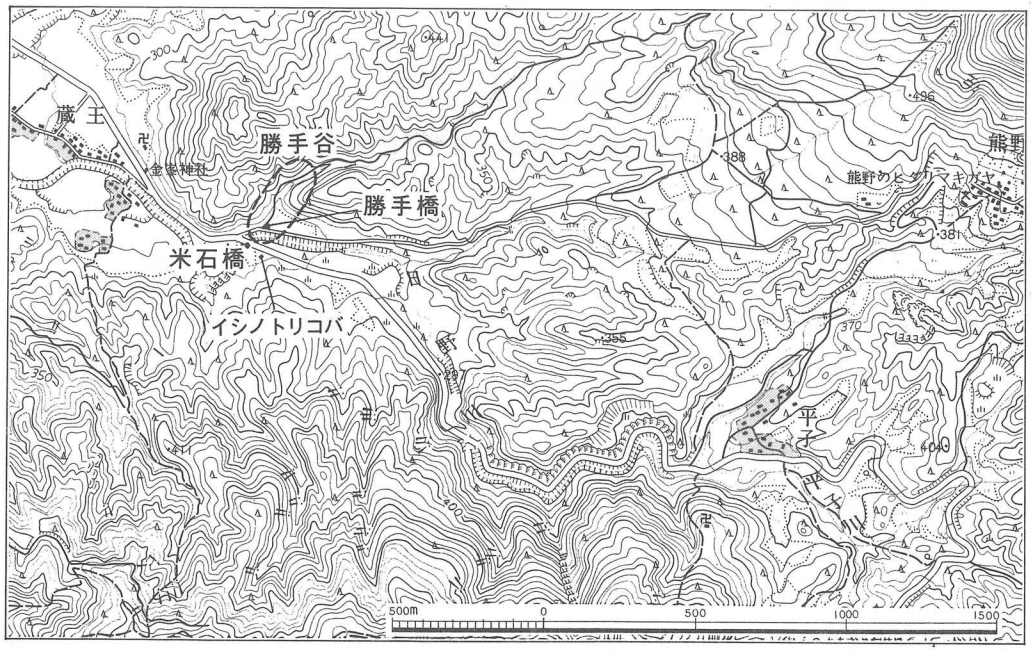
蔵王の石切場については、記録も伝承も残されていないが、田岡氏は同町鎌掛の瀬川喜久次翁の教示として、次のようにのべておられる。②

「……蔵王の奥にかったい谷と呼んでいるところがあり、狭い谷筋が石のかけらで埋まり、足の踏み入れ場もないほどであるのを見て不思議に思っていたが、先生の話を聞いて、はじめて古い石切場のあとであることが判ったといって喜んでくれた。わたしは早速一見したいと思い、令息の欣一氏に案内を頼んだところ、翁はこれを制止し、町内において他に石切場のあとらしいものがないことを、わたしが一番よく知っているし、到底、不自由な体の先生を近づけるようなところではないといわれたので、わたしは翁を信じ、このかったい谷が、中世の近江における石造美術の一大中心地であったことを認め、その製品の分布圏を蔵王の石造文化圏と名づけた。」

田岡氏によって蔵王のかったい谷が紹介されて以降、一部の研究者がこの谷に注目したのは、近世に採掘された様子がないことから、中世の石切場が比較的良好な状態で残されてはいないかという点にあった。ところが地理的に不便なことと、かったい谷の地名が残っていないことなどから、誰も瀬川喜久次翁の話にあるような谷を再発見することができなかった。

2．踏査前記

私は『近江の石造美術』3を読んでかったい谷の名を知って以来、中世の生産遺跡としてぜひその実状を確めたいものと思い、いろいろと手をつくしたがどうしてもその所在をつきとめることができなかった。かったい谷の石切場に興味を覚えたのは、硬質な花崗岩の中世の採掘技術を



第１図　勝手谷位置図（破線内は米石の露頭範囲）

調査したかったからである。

ところが昭和60年の晩秋に、石造美術の仲間である甲賀郡水口町の池本良一氏より、かったい谷の所在がわかったと電話があった。池本氏によれば、これまでかったい谷の場所が不明確であったが、瀬川欣一氏の努力でようやくわかったのだという。そして、瀬川氏の案内で、水口町立歴史民俗資料館の米田実氏と共に出かけたが、谷では蔵王の石造文化圏の石造美術にみられる硬質で粒の細かい花崗岩はみつけることができたものの、石の屑（砕石）や石切場の跡のようなものはまったく確認できなかったという。また、この谷が日野川上流に建設中の蔵王ダムの水没地域内に入っているので、工事によって景観が大きく変るまでに早く現地を踏査するよう勧めてくれた。それからしばらくたって、米田氏からも同じ内容の電話があり、谷の状況についてさらに詳細な説明をうけたが、やはり砕石や石切場の跡は発見できなかったという。二人の連絡をうけて、早速にでも蔵王へ行きたかったが、時期的に冬をむかえることから、春になって雪解けを待って現地へ行く予定をしていたが、公私多忙で３月になってもなかなか身動きがとれなかった。そして、ようやく念願の調査にとりかかれたのは、４月になってからのことであった。現地を踏査しては、瀬川欣一氏や米田実、池本良一氏らと意見を交換し、何回となく谷を訪れた。本踏査記は、そうした成果を私なりにまとめたものである。

３．かったい谷の状況

現　況　日野川上流の蔵王にある金峯神社より、その前を通る県道近江八幡土山線を約500*m*程東へ行くと、日野川に架る米石橋に至る。踏査時すでに、この付近より両岸の山腹は、蔵王ダムの工事によって各所が削られ山肌が露出していた。米石橋付近は、ダム工事より以前に日野川

や県道などの改修によって手が入っており、かなり旧状が変化した場所もあるようだ。そのような中にあって、土盛りされた県道で分断されているが、日野川左岸の川沿いに平担地があり、イシノトリコバ（石の取り小場）とよばれていることは注意すべきであろう。

さて道路は、米石橋より日野川に沿って平子に至る県道と、米石橋の西詰めより熊野に向う道とに分岐している。分岐点より熊野に向う道を約90m程行くと、日野川の支流勝手谷川に架る勝手谷橋に至る。この橋より、北東に深くのびる谷が勝手谷である。勝手谷は、かったい谷がなまって変化したか、かったい（ライ病患者の別名）の語を避けて美称化したものと思われるが、現在もかったい谷とよんでいる人もある。

勝手谷の地形をみると、谷は左岸の丘陵の斜面がせまり傾斜もきつい。そのためか谷へは、勝手谷橋の西側より傾斜の緩い右岸に沿って、ちょうど車１台が通れるほどの林道がついている。この林道のため、谷の地形はかなり改変されているようであった。林道から丘陵斜面の裾や、林道の路肩から谷底までの斜面に、崖崩れを防ぐため各所に石垣が築かれている。また、林道を作る際に、多少丘陵の斜面を削ったり、あるいは谷の一部を埋めたりもしているようである。そのようなことから、谷川をかなり綿密に踏査したものの、水流に洗われて表面が丸くなった花崗岩の岩盤が露頭している以外何も無く、「狭い谷筋が石のかけらで埋まり」といった状態ではなかった。

米石（こめいし） 蔵王の石造美術にみられる花崗岩は、細粒黒雲母花崗岩とよばれ、勝手谷川下流の谷筋に露頭が認められるが、日野の他所では産しないようである。細粒黒雲母花崗岩は、石の肌が細やかで硬質なため、石造美術としては風化しにくく長もちするだけでなく、石に独特の味が出ている。色調は、石の新しい割れ口で観察すると青味をおびているが、岩盤のところどころに鉄分が混っているため、赤く金気の浮き出したものもある。地元では、この細粒黒雲母花崗岩を米石とよんでいる。米石の名称は、細かい目の石が縮ったものではないだろうか。日野川に架る米石橋の名は、この石材にちなんだ名称であろう。

細粒黒雲母花崗岩は、日野川では米石橋付近からやや下流の右岸に限って認められるが、勝手谷に入ると両岸に露頭している。しかし、勝手谷の左岸は谷筋だけに限られ、千本野とよばれる左岸の丘陵では硬砂岩の岩盤がみられ、岩石の種類が異なっている。勝手谷の花崗岩の露頭も、勝手谷橋から約300m程上流までは認められるが、しだいに他の種類の岩石が混り、やがて頁岩の岩盤となる。

第１回目の踏査に入った時、勝手谷橋より10m程上流に、蔵王ダムの送水路工事がなされており、右岸の山腹から林道を断ち切って谷底以下まで掘下げられていた。その断面を観察すると、林道の高さから谷底までは花崗岩の岩盤であるが、林道より上の山の斜面には岩盤は露出していなかった。しかし、山土の中に、花崗岩をはじめ頁岩、ホルンフェルス、チャートなど大小各種の石塊や礫が認められる。この中には、ひと抱え以上もある細粒黒雲母花崗岩の玉石のあるのが注意をひいた。勝手谷橋と米石橋の間の右岸山腹でも、ダム工事のためブルドーザーが道を作っていたが、やはり赤土の中からいくつも花崗岩の大きな玉石が転り出ていた。日野川をはさんで対岸にある、イシノトリコバ背後の山腹も削られて山肌の赤土が露頭していたが、勝手谷の山腹

にあるような花崗岩の玉石は含まれていなかった。

勝手谷のダムの送水路より少し上流で、林道沿いの山腹の崩れから転落した花崗岩の玉石を観察すると、角がとれて丸味をおびた直方体といった感じの石塊が多い。また、石の表面 ── 皮肌はたいそうなめらかで、地質時代にかなりローリングをうけている。石塊が直方体に近いのは、岩盤の崩れ方からみて、石の節理によるものである。節理の状況にもよるが、こうした石の割れ方は、石造美術の原材として運び出すのには、比較的形が整えやすかったのではないだろうか。例えば、林道沿いに築かれた石垣は、谷から出る花崗岩を用いているが、石の節理を利用して整形が施され、四角く割った石の面を多用している。

砕　石　石材を加工する際に出る砕石の確認が、かったい谷踏査の重要な目的の一つであった。確かに先行して谷を訪れた池本氏や米田氏のいうように、谷川に砕石はみられなかった。しかし、よく観察するとまったく砕石がないわけではなく、林道と谷川の間にある小平担地の堆積土中から採集することができた。この堆積土中には、約10数㎝の厚さで砕石が層をなして混っていたが、その量はあまり多くなく、目立つ程のものではなかった。

平担地の堆積土の断面より採集した石片は、長さ15㎝程のものから5㎝程度のものまで大小あるが、比較的扁平で必ず一方に明瞭な剝離面を残していることから砕石（フレイク）と考えた。また、砕石の表面をよく観察すると、風化の著しい原石の皮肌が残っている。このことからみて、扁平な砕石は、玉石なり表面の風化した岩盤の崩れを打ち割った際の剝片である。石材の節理の性格から考えて、人為的とも自然破砕とも判別しがたいものであるが、近江八幡市沖島の西岸を埋める石切場跡の砕石に類似している。沖島の砕石は、江戸時代以降盛んに掘り出した石英斑岩で、舟積み前に丁場より切り出した石材を、石垣用に整形する際にできたものである。③ かったい谷においても、谷で石材をある程度整えて細工所へ送り出すのであれば、中世でも同様な砕石が出ると思われる。

ところがこの砕石には、二つの問題点がある。その一つは、砕石がはたして中世のものかどうかである。そのため堆積土中に遺物が含まれていないか探したが、遺物は何も発見できなかった。従って、土の堆積した時期や、砕石の年代を決めることは極めて難しい。

次に問題となるのは、林道工事との関係である。例えば砕石は、林道工事の際に築いた石垣のものではないかということである。石垣は谷の石を用いていることからみて、現地で整形されたであろうことは疑うまでもない。また、平担地のすぐ下流には、谷川から林道まで石垣で補強されている。このように考えると、平担地の堆積土にしても、林道建設時の埋め立ての可能性もある。砕石の年代を決められない現状においては、実状のみを報告するにとどめたい。

ただ、ここでとりあげた砕石は、谷の入り口や谷筋全体に認められるものではなく、また、瀬川翁のいうような多量とよべるものでもない。よく注意すれば発見できるといった程度のものである。

4．中世の花崗岩採石法

勝手谷林道により谷の景観が大きく変り、今また蔵王ダムの工事で地形が改変されてはいるが、

細粒黒雲母花崗岩の露頭範囲が、勝手谷＝かったい谷の限られた場所にしかないことからみて、この谷が中世蔵王の石造美術に用いられた花崗岩の石切場であった可能性は強い。また、かったい谷の入口に、谷の石材を示す米石（米石橋）の地名があり、さらにその周囲に採石の作業場を指すであろうイシノトリコバ（石の取り小場）の呼び名が残っていることは、多量の砕石こそ発見できなかったとはいえ、この谷を石切場と考えるうえで有力な傍証となろう。そうなれば、地形が改変される前の谷の旧状を語った瀬川喜久次翁の話は、今となれば貴重な証言となってしまった。

かったい谷の下流を石切場に比定した場合、注意すべき点は、谷の踏査でも瀬川翁の話の中にも、岩盤より石を切り出した跡がまったく認められなかったことである。もし、鎌倉時代から中世の全期間にわたって石材を切り出していたとするなら、かなり大きな採掘跡が残るか、各所に小規模な採石跡が残るはずで、谷の片側だけの林道工事で完全に埋没するとはとても考えられない。また、同じ花崗岩の石切場でも、石造美術の供給圏の重なる、日野町小野（この）の石子山や近江八幡市岩倉山などには、矢穴の跡の残った岩があるが、かったい谷や周囲の丘陵では発見されていない。石造美術からみると、蔵王の石材は中世を主に盛んに使用されていたが、小野や岩倉では近世になってからも石材が切り出されている。同じ日野町内の小野は、江戸時代の地誌『近江輿地志略』に「〔石子山〕古野村にあり、土民石を切取って業とす」とあり、江戸時代から明治時代にかけ、続けて採石がなされていた。近江八幡市の岩倉も、中世より良質の石材を出すことから、蔵王と同様に岩倉の石造文化圏を形成していた。近世に入ると、城郭構築に大きな役割をはたし、それ以降も採石が続けられている。近世まで石材が切り出されている小野や岩倉と、ほぼ中世のみで操業の終るかったい谷をくらべると、矢穴を用いる採石技術に時代差があったと推察すべきであろう。おそらく、中世の花崗岩の採掘法は、近世以降の花崗岩の石切場とは、かなり異なった方法がとられていたと考えざるをえない。

かったい谷での中世の採石法は、石の節理から方形に整えやすい性質を考慮しても、まだとても谷の下部に露頭する花崗岩の岩盤から、石材を切り出すには硬質すぎるように思える。近世になって、石切場として利用されずしだいに忘れ去られて行くのは、地理的な問題からくる運搬の不便さだけでなく、採石技術の難しさにも一因があるのではなかろうか。そこで考えられる方法が、山腹の土中に含まれる玉石や、岩盤の崩れた転石の使用である。土中より石塊を掘り出して石造美術に加工する例は近代にもあり、湖西の志賀郡志賀町近江舞子の石屋で次のような話を聞いた。

近江舞子の花崗岩は小松石とよばれ、石燈籠などの製作がなされている。そのうち地元にある巨大な石燈籠は、比良山麓の土中に埋っている花崗岩の石塊を掘り出して作ったというが、各部を同質の石で統一できず、部分的にやや異なった感じの石も混っている。土中より石塊を掘り出し石材とするのは、岩盤から切り出すより労力が少なくてすむという。一方、同じ湖西の他の石屋によると、比良の石は石切場から切り出した石にくらべ、土中から掘り出した石の方が風化に弱いともいう。

こうした例から考えても、石材は岩盤から切り出さなくとも十分に獲得できるわけで、中世の

かったい谷にあっては、比較的容易に採掘のできる山土中の玉石や転石を素材に求めたとみるのが妥当ではなかろうか。また、谷に砕石のあったことはうかがえても、石造美術の未製品がないことは、かったい谷はあくまで素材の採掘のみに限られた石切場であったからに他ならない。おそらくここでは、細工所へ運ぶ前の石材の粗割りがなされていたのであろう。谷の入口に近い日野川左岸にあるイシノトリコバの地名こそ、谷から石を出すためのそうした作業場跡をよく伝承している。そして採掘の範囲も、谷の奥にまでおよんだのではなく、谷の入口付近を中心になされていたのではないだろうか。

5．石造美術よりみた原石の復原

現在のかったい谷を踏査した観察と、瀬川翁の話を状況証拠として、中世の採石のありさまを推定してみた。今度は逆に、資料の豊富な完成された石造美術から、製品に残された加工痕より原石の旧状を復原してみよう。その場合、五輪塔や宝篋印塔など石塔類の場合は、底面など見えない部分も含めてほぼ全体に何らかの加工が施されるため、成形前の石材の表面をあまり良く残していないので、資料として適当ではない。ところが、石仏や石塔を陽刻した小形板碑は、背面を粗仕上げのまま放置しているので、成形前の石材の皮肌 ── 原石肌を観察するのに恰好である。

小形板碑の背面に、原石の風化した原石肌が残されていることに気付いたのは、彦根市妙楽寺遺跡より出土した、室町時代後期の小形板碑を実見してからである。④ この小形板碑が好資料であったのは、石材として遺構に転用されていたため、近世、近代と約400年程の間地下に埋没し、石の表面があまり風化していなかったことである。そのため、小形板碑の背面や側面などに残る原石肌より、ひと目見て湖東流紋岩の玉石（おそらく河原石と思われる）を素材にしていることが判る点である。この観察をもとに花崗岩製の小形板碑を比較検討してみると、同じ花崗岩でも石の肌が粗く、風化や凍てによって表面がボロボロになるようなものでは、原石肌の確認は難しい。しかし、米石のように石の肌が細かく硬質の石材では、風化などに妨げられることなく、成形前の石の面を識別することができる。

かったい谷に近い場所にある細粒黒雲母花崗岩製の小形板碑を例にとると、蔵王の金峯神社正面の脇に寄せ集められている、室町時代後期の小形板碑中に容易に見出せる。この小形板碑の背面には、必ずといってよいほど中央部に成形前の原石肌が残っている。原石肌は丸味をもち滑かで、露頭した岩盤の風化面ではなく、山土の中にあるローリングをうけた玉石のものである。小形板碑より古い小石仏についても、やはり背面に玉石の原石肌を残している。こうした観察からも、先にかったい谷踏査から導き出した中世の採石法を検証することは可能であろう。

6．小　　結

勝手谷を踏査した結果、県道、林道、日野川の改修などによって谷の旧状は大きく変ってはいるが、細粒黒雲母花崗岩が勝手谷川下流と米石橋付近の日野川右岸に限定されることから、この地が蔵王の石造文化圏で用いられた石材の産出地と考えて誤りあるまい。しかも、岩盤に採掘した跡を残していないことからみて、土中の玉石や転石を利用していたものと思われる。おそらく、

谷の入口付近でそうした石を採集し、米石橋付近のイシノトリコバで粗割りを行ったのであろう。イシノトリコバは、その名のとおり石材を加工する作業場であり、その作業は谷から出した自然石を運搬しやすい大きさに割るまでの工程であったのだろう。石材の大きさは、石造美術の部材の大きさから推定して、吊ったり背負ったりする程度の大きさではなかっただろうか。こうして、イシノトリコバで割られた石材は、蔵王にあったと推定される細工所に運ばれ、石大工の手によって石造美術に完成されたのであろう。

中世におけるかったい谷からの石材供給量が、いったいどの程度のものであったかは今後の課題である。しかし、石材の利用は、室町時代後期の小形板碑などの製作をピークに、急激に減少する。採集できる玉石や転石の量が減ってきたのか、それとも多量に生産される近世の墓石や建築材に不向きだったのか、あるいは中世から近世への社会的な変化によるものか、何らかの大きな変化があらわれたのであろう。それゆえ近世になって、石切場として利用されることもなく、しだいに忘れられていったと思われる。近在の造園業者に言わせると、石材は入手し難いが、硬質で石の肌が細かい米石で石燈籠を作ると良いものができると口をそろえて言う。この言葉こそ、量産向きではなく、工芸品に向いている石材の性格を、ズバリ言い当てている。米石こそ、鎌倉時代や南北朝時代に石大工が持てる技倆をぞんぶんにふるって製作した、宝塔や宝篋印塔など大形の石塔類にこそふさわしい素材だったのである。

（１９８６年6月吉日脱稿）

＜註＞

① 田岡香逸『近江の石造美術』3（民俗文化研究会　1976　大津）　P 142。

② 田岡香逸「近江蔵王の石造文化圏　付石大工平景吉の系譜とその作品」1～5（『民俗文化』195～199　滋賀民俗学会　1979～1980　大津）　P 1917。

③ 宮畑巳年生「石材業」（『びわ湖の専業漁撈』琵琶湖総合開発地域民俗文化財特別調査報告書Ⅱ　滋賀県教育委員会　1980　大津）　P 442～448。

④ 伊庭　功『宇曽川災害復旧助成事業に伴う妙楽寺遺跡』Ⅱ（滋賀県教育委員会・滋賀県文化財保護協会　1986　大津）

妙楽寺遺跡出土の小形板碑については、「小形板碑の製作工程」（仮題）として別に詳述する予定である。

（追記）

本稿提出後、蒲生郡蒲生町下麻生に所在する赤人寺石造七重塔（文保２年銘）の解体修理に立会った際、笠の底面に原石肌が残っている例のあることを知った。石材は、岩倉産の花崗斑岩であったが、素材および採石法については、本稿での仮説を裏付ける貴重な資料である。

兼康保明「赤人寺石造七重塔の新知見」（『滋賀考古学論叢』3　滋賀考古学論叢刊行会　1986　大津）

研究ノート

横穴式石室の平面企画についてⅡ

―― 畿内における主要横穴式石室の検討 ――

岡　野　慶　隆

1．はじめに

横穴式石室構築の際に平面企画が想定されることは、これまで多くの研究者により指摘されてきた。[①] 筆者も、兵庫県西宮・宝塚市の仁川流域の2基の横穴式石室や宝塚市長尾山丘陵の横穴式石室の平面形を検討したが、玄室幅を基準長とし、その倍数値を玄室長及び羨道長にあてる倍数型企画法ともいうべき企画法の存在を確認することができた。[②]

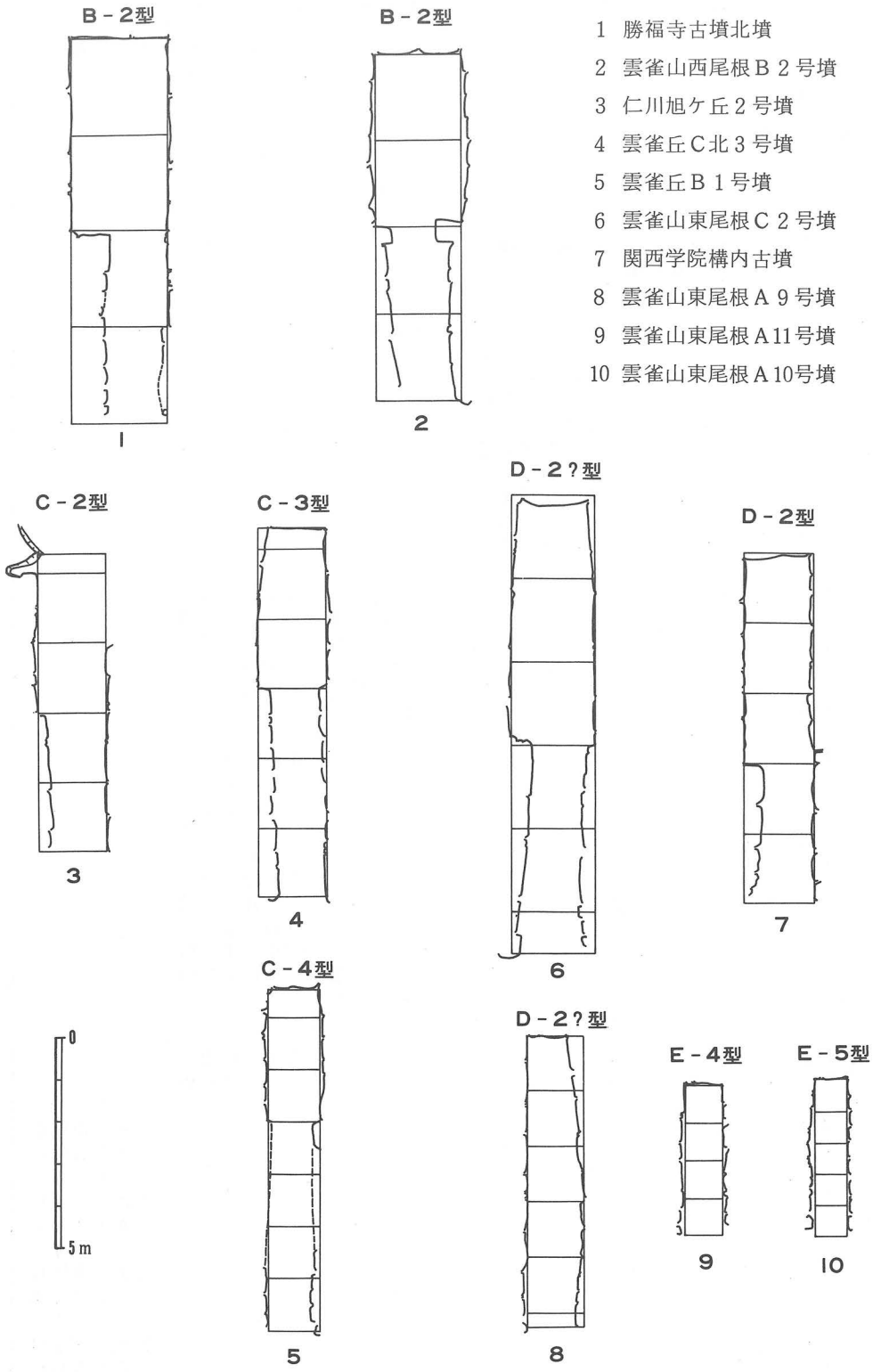
ところで、この企画法は、長尾山丘陵のほとんどの横穴式石室で採用されていることが明らかになったが、他地域についての検討は畿内での若干の類例をあげるにとどまり、今後の課題として残してきた。ここでは、この倍数型企画法が他地域でも存在するものなのか、当面畿内の主要横穴式石室を対象として検討を行ってみたい。また、この企画法が存在するならば、そのあり方や長尾山丘陵にみられる企画法との関連についても考えてみることにしたい。

2．長尾山丘陵における横穴式石室の平面企画

畿内の主要横穴式石室を検討するに先立ち、まず前回みた長尾山丘陵における平面企画についてふりかえってみたい。

前回まず注目したのは、玄室の平面形であるが、その形状は長さと幅の比で決定されるという考え方から、玄室長を幅で割った数値を求めた。この結果、その数値が2倍未満のものをA型（2基）、ほぼ2倍のものをB型（5基）、2倍から3倍までの間のものをC型（4基）、ほぼ3倍のものをD型（7基）、無袖式で全長が倍数値となるものをE型（4基）とした。このうち倍数値となるものは、B・D・E型であるが、有袖式のB・D型では羨道長についても玄室幅の倍数となるものが多く、B型では羨道長の明らかなものはすべて2倍（B－2型）、D型では2・3倍（D－2・3型）のものがそれぞれ存在する。また、玄室長が倍数値とならないC型でも、羨道長が3・4倍（C－3・4型）となるものが各1例存在し、これらも含めて玄室幅を基準長としてその倍数値を玄室長、羨道長にあてる倍数型企画法としてとらえた。[③]（第1図・第1表）

また、これらの企画法の時期についてみると、B型は6世紀前半、C・D型は6世紀後半に出現し、ともに6世紀末から7世紀初頭頃に終っており、7世紀前半には無袖式のE型のみとなる。この企画法の前後関係については、羨道長のとり方もあわせて考えると、最も古い勝福寺古墳北墳のB－2型を祖型として、玄室・羨道長の倍数値を増したC－3・4型、D－2・3型が出現したものと考えられる。さらに、各企画法の基準長についてみると、その長さはB－C・D－Eの順になっており、B型からC・D型への企画法の派生は石室の狭長化を求めた結果としてとらえることができた。[④]



1　勝福寺古墳北墳
2　雲雀山西尾根Ｂ２号墳
3　仁川旭ケ丘２号墳
4　雲雀丘Ｃ北３号墳
5　雲雀丘Ｂ１号墳
6　雲雀山東尾根Ｃ２号墳
7　関西学院構内古墳
8　雲雀山東尾根Ａ９号墳
9　雲雀山東尾根Ａ11号墳
10　雲雀山東尾根Ａ10号墳

第１図　長尾山丘陵周辺横穴式石室平面企画

第１表　長尾山丘陵における玄室企画法と基準長の関係

〔　　〕内は仁川流域の古墳

基準長(m) ＼ 企画法	A	B	C	D	E
2.50			中山寺白鳥塚		
2.32 ｜ 2.25	雲雀丘Ｃ北 ４号墳	勝福寺北墳 （Ｂ－２）			
2.15 ｜ 1.93		中筋山手 １号墳 中筋山手 ４号墳 雲雀山西尾根 Ｂ２号墳 （Ｂ－２） 雲雀丘Ｃ南 １号墳 （Ｂ－２）	雲雀山東尾根 Ｃ１号墳	雲雀山東尾根 Ｃ２号墳 （Ｄ－２？）	
1.70 ｜ 1.66	中筋山手東 ２号墳		雲雀丘Ｃ北 ３号墳 （Ｃ－３） 〔仁川旭ケ丘 ２号墳 (C－2)〕	雲雀丘Ｃ北 １号墳 （Ｄ′－２） 〔関西学院 構内古墳 (D－2)〕	
1.40 ｜ 1.25			雲雀丘Ｂ １号墳 （Ｃ－４）	中筋山手東 １号墳 中筋山手東 ３号墳 （Ｄ－３） 雲雀山東尾根 Ａ９号墳 （Ｄ－２？） 雲雀山東尾根 Ｃ３号墳	
1.10				雲雀丘Ｃ南 ２号墳	
0.98 ｜ 0.70					雲雀山東尾根 Ａ１０号墳 （Ｅ－５） 雲雀山東尾根 Ａ１１号墳 （Ｅ－４） 雲雀山東尾根 Ａ１４号墳 （Ｅ－５） 雲雀山東尾根 Ａ１５号墳 （Ｅ－４）

ところで、このような平面企画法の存在については、横穴式石室構築にあたった技術者の介在が考えられる。おそらくその技術者は、あらかじめ平面企画を用意しており、実際の石室構築にあたっては、基準長を決定することより玄室・羨道長を求めたのではなかろうか。このように、倍数型企画法は細かな数値を扱わずに石室を構築できる企画法で、実際には基準長にあたる物差状のものを使用することにより、容易に平面形を決定できたものと思われる。長尾山丘陵における多数の横穴式石室の構築は、この企画法をとおして行われたと考えてよく、その簡易な企画法の採用は、横穴式石室墳の築造増加にともなう石室構築技術者の需要の増大に関連するものと考えられる。

3．畿内における主要横穴式石室の検討

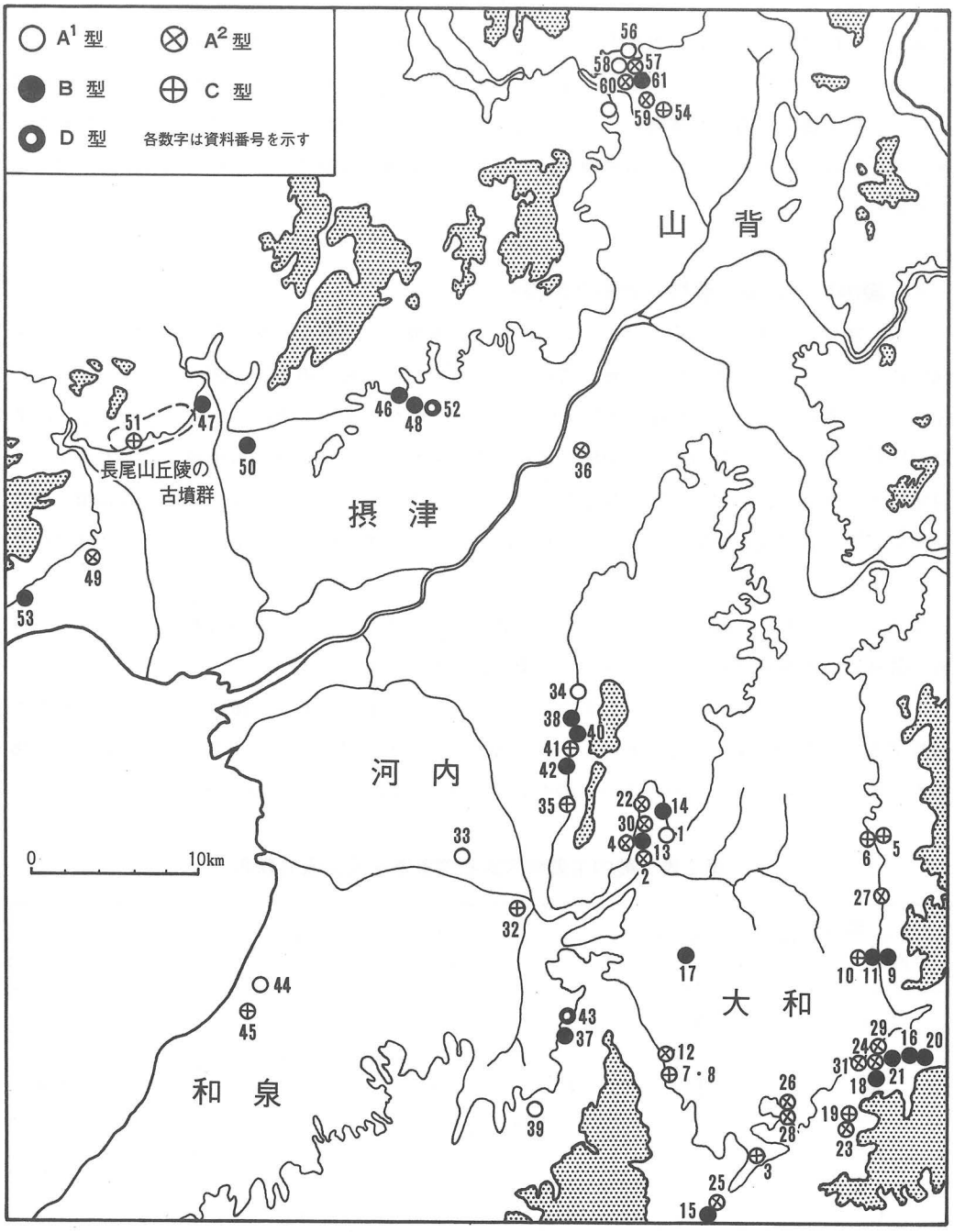
ここで扱う主要横穴式石室とは、大型の横穴式石室墳で、明確な基準はないが、いちおう石室規模については、玄室幅が2～3 m、墳丘については、前方後円墳か20～30 m以上の円。方墳をもつものを選んだ。また、存在状態については、独立墳か数基で古墳群を形成するもので、群集墳内でも規模の大きいものや初期の横穴式石室も含めた。本来ならば、群集墳の石室も含めて検討すべきであるが、かなり複雑になるものと思われるため、ここではまず各地域の首長墳と考えられる大型の横穴式石室墳を対象とし、畿内における首長層の横穴式石室受容状況より検討していくことにしたい。

このような基準で、畿内における主要横穴式石室のうち平面形の明らかなものを選ぶと、いちおう61基の石室をあげることができる。（第2図・第4表）

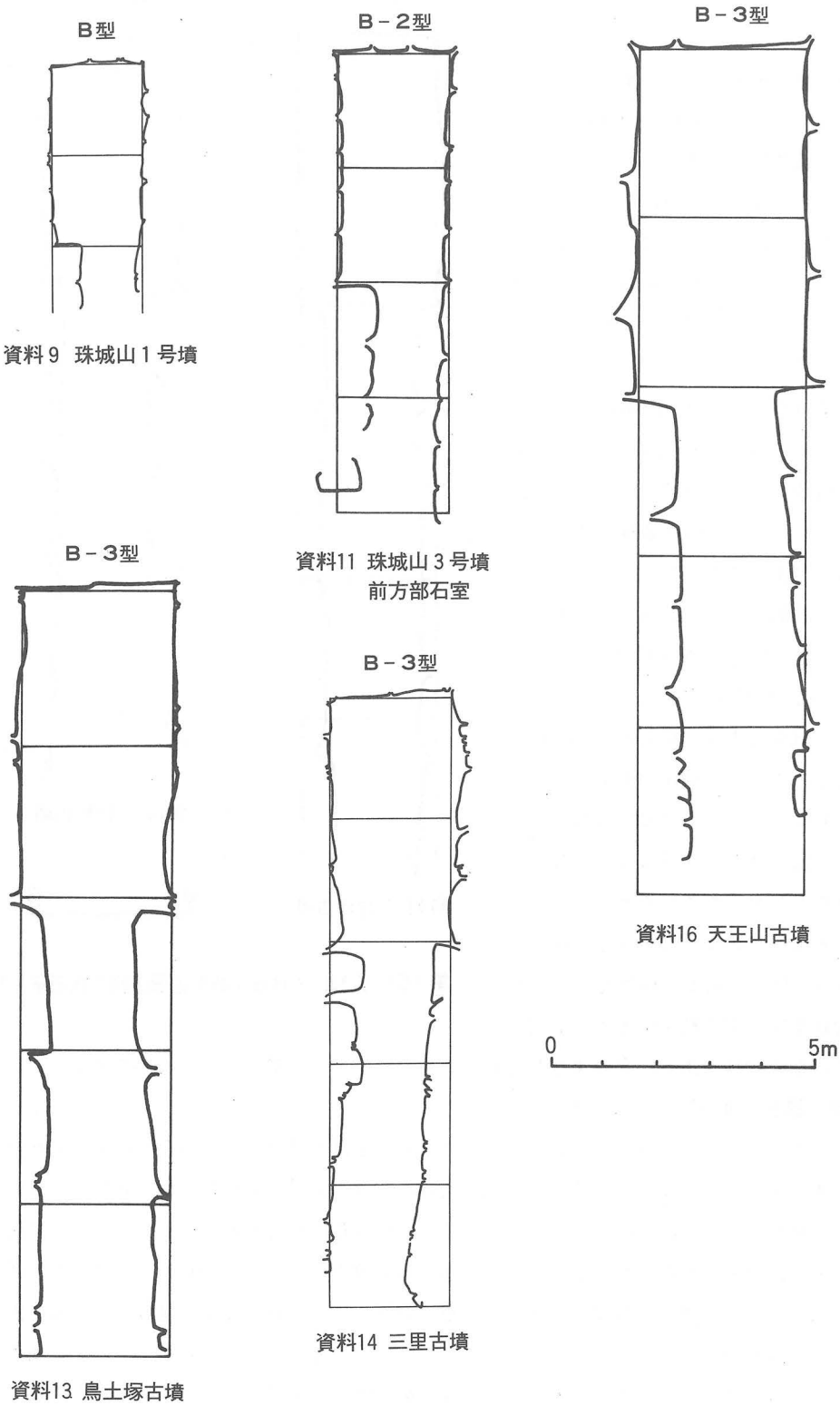
これらの横穴式石室について、まず前回と同じ方法で玄室平面形の分類を行うと、玄室長を玄室幅で割った数値が1.0～1.8のものをA型（26基）、1.9～2.1のものをB型（20基）、2.2～2.8のものをC型（13基）、2.9～3.1のものをD型（2基）に分けることができる。⑤

第2表　畿内主要横穴式石室玄室平面企画分類表

地域／企画法	摂津	和泉	山背	河内	大和	計
A^1	0	1	3	3	1	8
A^2	1	0	3	1	13	18
B	5	0	1	4	10	20
C	1	1	1	3	7	13
D	1	0	0	1	0	2
計	8	2	8	12	31	61



第2図　畿内主要横穴式石室分布図



資料9　珠城山1号墳

資料11　珠城山3号墳
前方部石室

資料16　天王山古墳

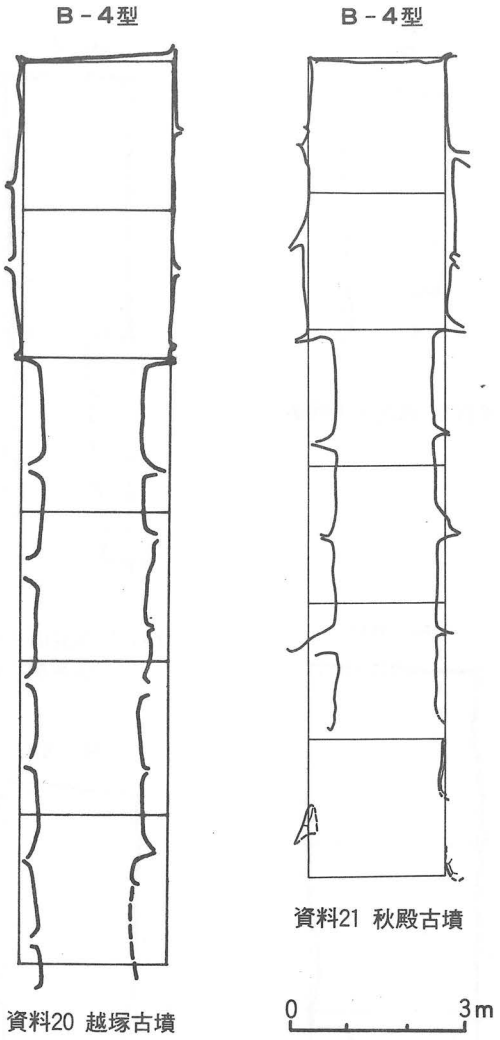
資料13　鳥土塚古墳

資料14　三里古墳

第3図　大和における倍数型企画法横穴式石室－1

のうち、明らかに倍数型企画法をとるものはB・D型であるが、D型は2基と少なくB型が圧倒的に多い。また、長尾山丘陵では羨道長が基準長の倍数値をとることから倍数型企画法に入れたC型については、羨道長が倍数値にならないものが多いため、倍数型企画法からは除外した。なお、C型では数値の幅を2.0～2.8と長くとったが、実際には2.2～2.5の間に集中している。また、明らかに倍数型企画法ではないA型は、25基と多いが、数値が1.0～1.5で方形に近いA^1型と数値が1.6～1.8のやや長いA^2型とに分けられる。

このように、畿内の主要横穴式石室では、倍数型企画法としてB・D型が存在し、その基数もB型が20基と最も多いが、倍数型企画法でないA^2・C型も決して少なくないことがわかる。また、地域的にみると、B型は大和で最も多いが、他の企画法との比率では摂津が最も多くなる。これに対して、和泉ではB型はなく、山背では1基だけ存在するなど、かなりの地域差をうかがうことができる。

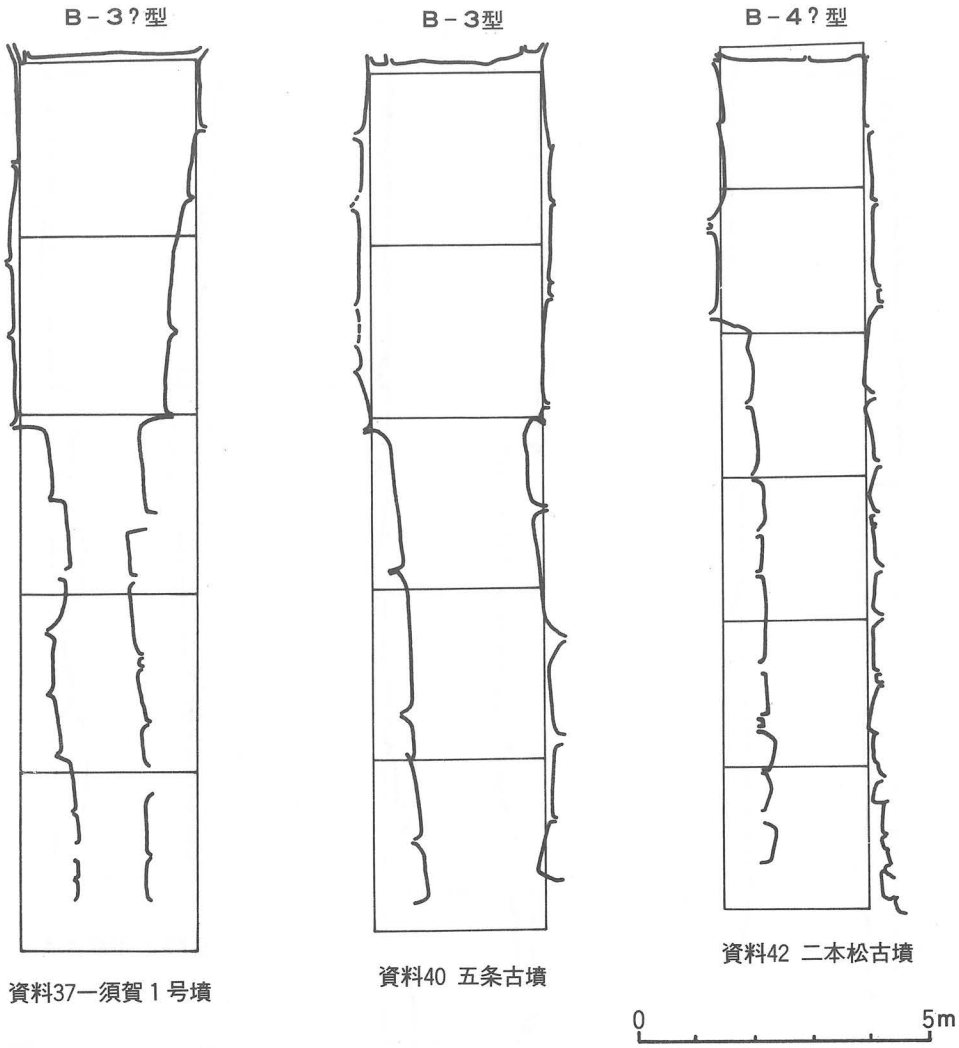


第4図　大和における倍数型企画法横穴式石室－2

ところで、このような平面企画法の分類比較は、横穴式石室の構築期間である150～200年間の累積結果によるもので、さらに時期的な検討より、次のような各地域ごとの特色ある変遷をみることができる。

大和（第3・4図）

まず、大和についてみると、倍数型企画法であるB型は6世紀中頃から7世紀前半にかけての時期に集中するとともに、この時期には他の企画法がほとんどみられない傾向がみとめられる。これらのB型企画法の石室は、大半は両袖式で、いわゆる巨石墳が多い。また、羨道長に注目すれば、長尾山丘陵でもみられたB－2型（珠城山3号墳前方部石室－資料11）以外にも、羨道長を長くとる鳥土塚古墳（資料13）、天王山古墳（資料16）等のB－3型や越塚古墳（資料20）、秋殿古墳（資料21）等のB－4型が存在し、なかでもB－3型の多さが目につく。この分類については、さらに時期的にみると、B－2型が6世紀中頃から後半にかけての頃で最も古く、次いでB－3型は6世紀後半から7世紀初頭、B－4型は7世紀前半となり、時期が下るとともに羨道



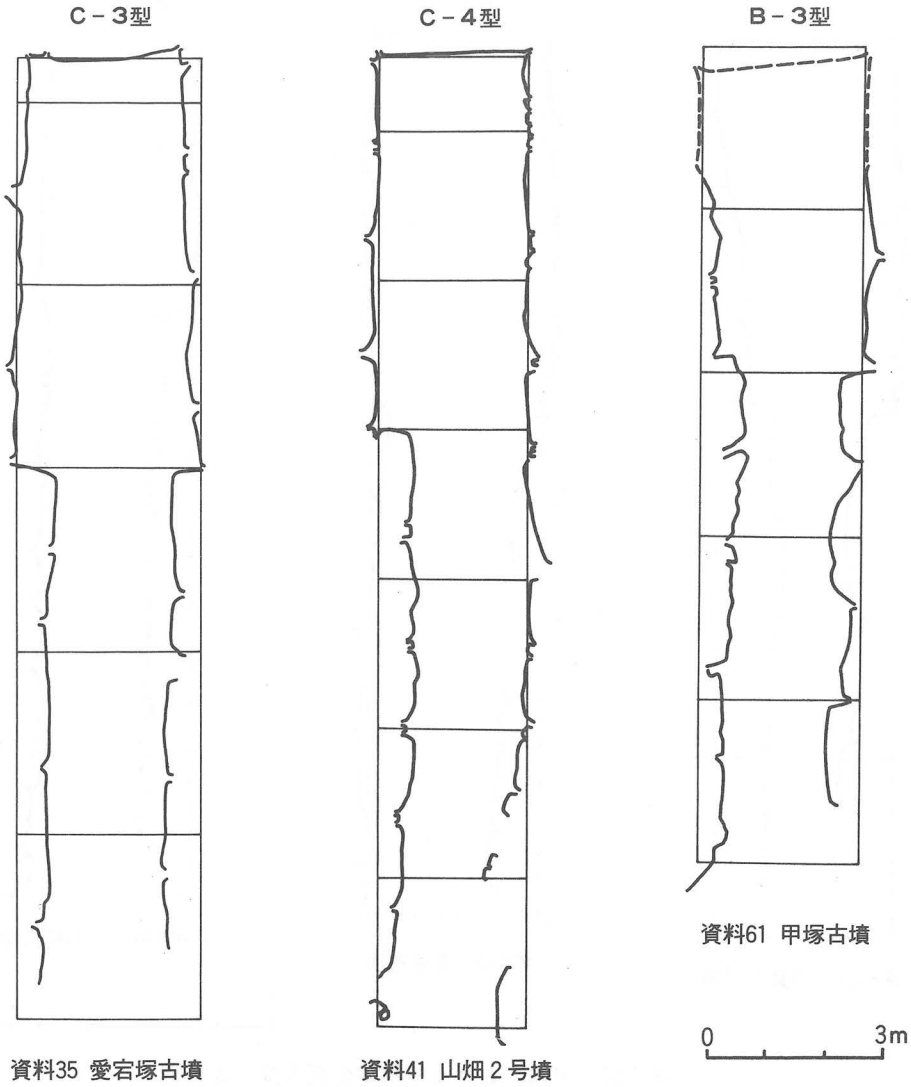
第５図　河内における倍数型企画法横穴式石室

長を長くとる傾向がみられる。

一方、これに対して６世紀初頭から前半にかけての頃の横穴式石室導入期のものでは、椿井宮山古墳（資料１）等方形に近い平面形をもつA^1・A^2型以外に、市尾墓山古墳（資料３）、石上大塚古墳（資料５）等のように玄室長の長いＣ型が多くみられる。このＣ型の石室は、玄室長・幅の比率が2.2～2.4にほぼ限られ、石室形態は片袖式がほとんどで、墳丘はすべて前方後円墳である。⑥

また、７世紀前半のある時期よりＢ型の石室は減少傾向になり、以後A^2型が主流を占める。それらの石室は、岩屋山古墳（資料28）等の切石積の石室を含むいわゆる終末期古墳で、玄室長・幅の比率はほぼ1.7、1.8に限られている。⑦

このように、大和では倍数型企画法であるＢ型企画法が、６世紀後半から７世紀前半にかけて

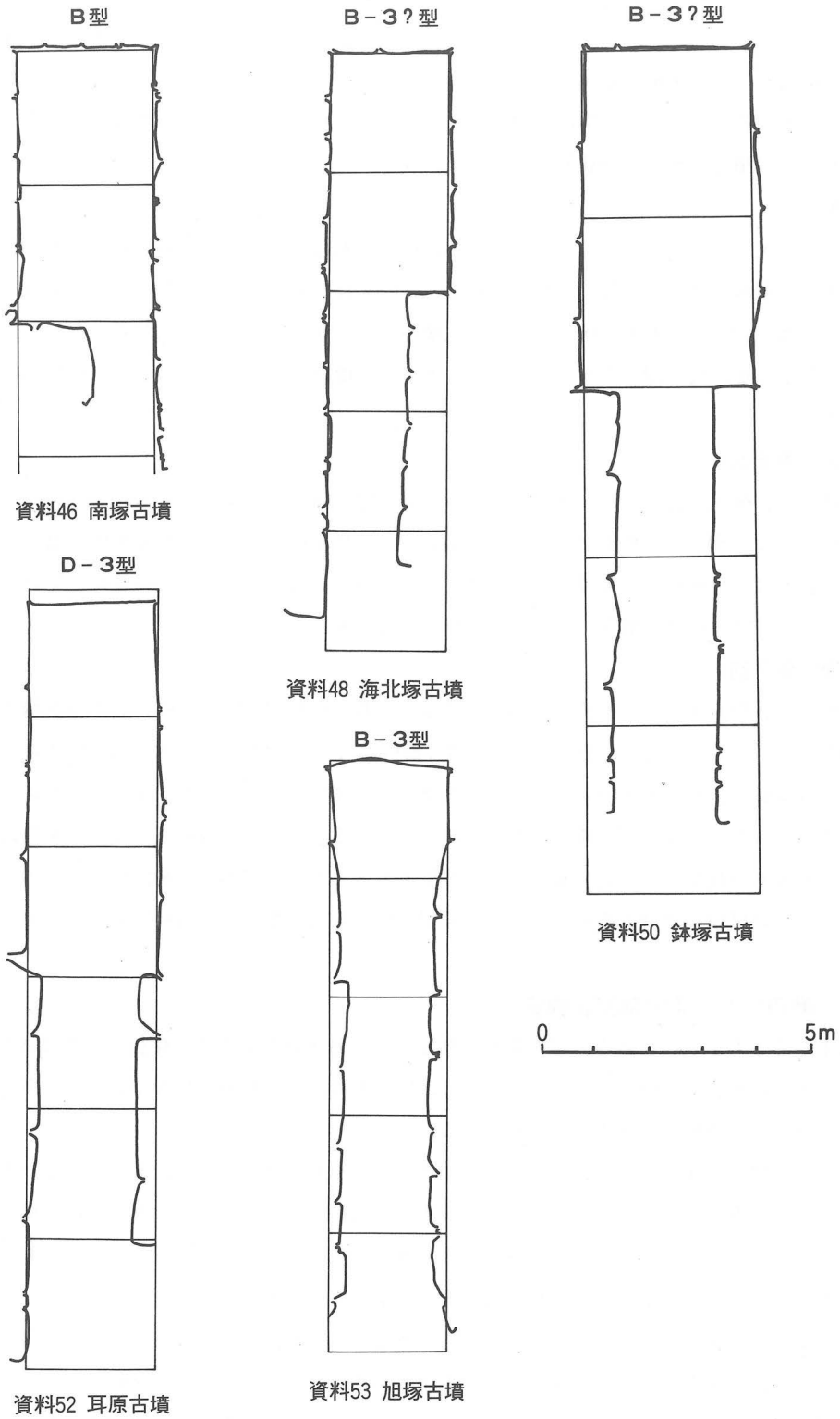


第6図　河内・山背における倍数型企画法横穴式石室

主要古墳の主流を占めていたことが明らかになったが、全体には玄室長の長いC型からB型、A^2型へと、時期とともに玄室長が短くなる傾向がみられる。

河内（第5・6図）

河内では、倍数型企画法のものはB型が4基、D型が1基存在するが、大和と同じく6世紀中頃から7世紀前半にかけての時期に集中する。このうちB型では、東大阪市五条古墳はB－3型（資料40）、同市二本松古墳（資料42）はB－4型の可能性が強く、時期は五条古墳が6世紀末頃、二本松古墳は7世紀初頭か前半頃と考えられる。またC型は、河内では最大級の横穴式石室となる八尾市愛宕塚古墳（資料35）と東大阪市山畑2号墳（資料41）があげられるが、羨道長のとり方からすれば、愛宕塚古墳はC－3型、山畑2号墳はC－4型となる。したがって両石室は、



第７図　摂津における倍数型企画法横穴式石室

C型でも倍数型企画法に関連するものとしてとらえられる。[8]

一方、倍数型企画法をとらないものとしては、5世紀中頃と考えられている藤井寺市藤の森古墳（資料32）[9]や6世紀初頭から前半にかけての頃の東大阪市芝山古墳（資料34）、大阪市長原七ノ坪古墳（資料33）などの初期の横穴式石室があげられるが、藤の森古墳はC型、芝山古墳、長原七ノ坪古墳は方形に近いA^1型である。

和泉

和泉には大型の横穴式石室はほとんどなく、首長墳的なものとしては堺市塔塚古墳（資料44）、高石市富木車塚古墳（資料45）があげられるが、いずれも倍数型企画法ではない。塔塚古墳は、藤井寺市藤の森古墳とともに横穴式石室では畿内最古の5世紀中頃の年代が考えられているものであるが、方形に近いA^1型である。また、富木車塚古墳は6世紀前半のもので、C型の狭長な石室である。

山背（第6図）

山背では、横穴式石室をもつ前方後円墳や大型円墳が嵯峨野に集中する傾向がみられる（資料54～61）。このうち、倍数型企画法をとるものは、7世紀前半と考えられる甲塚古墳（B－3型）だけで、他は6世紀前半の天塚古墳がC型であるほか、6世紀前半から後半にかけての丸山古墳、御堂ケ池1号墳、蛇塚古墳等のA^1・A^2型が目立っている。

摂津（第7図）

摂津は、B型企画法の占める割合が高い地域で、6世紀初頭から前半頃の茨木市南塚古墳（B型、資料46）、川西市勝福寺古墳北墳（B－2型、資料47）、6世紀中頃の茨木市海北塚古墳（B－3？型、資料48）、6世紀末頃の池田市鉢塚古墳（B－3？型、資料50）、7正紀前半の芦屋市旭塚古墳（B－3型、資料53）等各時期のものがみられる。また、6世紀末から7世紀初頭頃と考えられる茨木市耳原古墳（資料52）はD－3型である。なお、倍数型企画法でないものでは、A^2型の西宮市具足塚古墳（資料49）、C型の宝塚市中山寺白鳥塚古墳（資料51）等がある。

4．畿内における倍数型企画法

以上みてきたように、畿内では倍数型企画法としてB・D型企画法の存在が確認できた。なかでも、B型企画法はその主流を占め、分布は大和を中心に畿内各地に及んでおり、時期的には6世紀中頃より7世紀前半までの間に集中している。

しかし、畿内全体をみれば、B型企画法が大半を占めるわけではなく、他の企画法が多くとられているのも事実で、全体としてはかなり複雑な地域色がみとめられる。たとえば、従来より古式の横穴式石室とされる方形に近いA^1型は、大和、河内では6世紀初頭から前半にかけての頃にみられるが、山背でA^2型とともに6世紀後半でも盛んに構築されている。また、大和では玄室長の長いC型が6世紀前半に多く、玄室長の短いA^2型が7世紀代に集中している。

このように、畿内における横穴式石室の玄室平面形はかなりの地域差があり、かって白石太一郎氏が畿内の横穴式石室編年の基準としてあげられた「玄室幅指数」・「羨道幅指数」[10]のうち、「玄室幅指数」は畿内全体では適用できないといえよう。このことは、今回行った玄室平面形分

類作業も同様で、倍数型企画法以外の企画法が解明されたわけではなく、単に玄室長・幅の比率をもとに分類したにすぎない。⑪

では、このように他の企画法と混在するなかで、倍数型企画法はどのような位置を占めるのであろうか。以下、検討を行ってみたい。

まず、年代的にみると、倍数型企画法は6世紀初頭から7世紀前半にかけて採用されるが、B型がほとんどで、D型はその末期にわずかにみられるだけである。B型の初源は、まず摂津において、6世紀初頭から前半頃南塚古墳、勝福寺古墳北墳が出現する。これらはいずれも右片袖式で、勝福寺古墳北墳の場合はB－2型企画法をとっている。この時期、畿内の他地域ではA[1]・C型が構築されているが、摂津に現れたB型企画法の石室も初期横穴式石室の一タイプとしてとらえることができる。

B型企画法が他の企画法に対して圧倒的に多くなるのは、畿内において古墳築造量が増加する6世紀中頃以降で、分布の中心は大和となる。大和では、6世紀中頃から7世紀初頭頃にかけて勝福寺古墳北墳と同じB－2型のほかB－3型が構築されるが、後出と考えられるB－3型は特に多く、それらは両袖式の巨石墳として定型化する傾向がうかがわれる。また、7世紀前半頃には、羨道長を長くとる傾向がみられ、B－3型の発展型としてB－4型が出現している。⑫

一方、他地域でも6世紀中頃から7世紀前半にかけてB型企画法をとるものがみられる。それは、河内の一須賀1号墳（B－3？型）、五条古墳（B－3型）、二本松古墳（B－4型）、摂津の海北塚古墳（B－3？型）、鉢塚古墳（B－3？型）、旭塚古墳（B－3型）、山背の甲塚古墳（B－3型）等であるが、大半が両袖式であることやB－3型をとるものが多いことにより、大和の影響下に出現したと考えてよいであろう。

ところで、6世紀末から7世紀前半頃には河内の葉室石塚古墳、摂津の耳原古墳等のD型企画法が現れる。これらは、大和にはみられないことや、少数であることより、B型企画法の発展型として摂津、河内で独自に出現した可能性が考えられる。一方、C型企画法でも羨道長が基準長の倍数となるものは3例あるが、6世紀末から7世紀初頭頃の河内山畑2号墳については、長尾山丘陵のものと同じく、その地域でB型企画法より派生した可能性が強い。⑬

以上のように、B型企画法は6世紀中頃から7世紀前半頃には大和が中心となり、河内、摂津、山背では大和の影響下に採用されたと考えることができる。ところで、その中心となる大和のB型企画法の出現については、摂津の影響によるものか、独自に出現したものかは必ずしも明確ではない。しかし、かりに摂津のものと関連性はあるにしても、6世紀中頃以降のB型企画法の増加は大和が中心であり、摂津においても6世紀中頃以降のB型企画法の採用は、大和の影響下に行われたとみるべきであろう。

では、前回検討を行った長尾山丘陵の横穴式石室の場合はどうであろうか。その点については、前述したように、6世紀前半に出現した勝福寺古墳北墳のB－2型が祖型となり、以後B型が継承されるとともにB型より派生したC・D・E型が現れると解釈した。しかし、ここでみてきたように、勝福寺古墳北墳は畿内の倍数型企画法の石室でも南塚古墳とともに最古のものになることや、6世紀中頃以降のB型企画法の中心が大和になること、長尾山丘陵内でも勝福寺古墳北墳

第3表　畿内主要横穴式石室編年表

年代＼地域	摂津	和泉	山背	河内	大和
450 500		塔塚 (A¹) ↓ ?		藤の森 (C) ↓ ?	
550	南塚 (B) 勝福寺北墳 (B−2)	富木車塚(C)	天塚 (C) 丸山 (A¹)	長原七ノ坪 (A¹) 芝山 (A¹) 愛宕塚 (C−3) 白雉塚 (A²)	椿井宮山 (A¹) 市尾墓山 (C) 石上大塚 (C) ウワナリ塚 (C) 大和二塚 (C−3)
600	海北塚 (B−3?) 具足塚 (A²) 鉢塚 (B−3?) 中山寺白鳥塚 (C)		御堂ケ池1号墳 (A¹) 入道塚 (A²) 衣笠山1号墳 (A¹) 蛇塚 (A²) 狐塚 (A²)	一須賀1号墳 (B−3?) 松本塚 (B) 金山 (A¹) 五条 (B−3)	珠城山1号墳 (B) 珠城山3号墳前方部 (B−2) 鳥土塚 (B−3) 三里 (B−3) 天王山 (B−3) 牧野 (B−3)
650	耳原 (D−3) 旭塚 (B−3)		甲塚 (B−3)	山畑2号墳 (C−4) 二本松 (B−4?) 葉室石塚 (D−3?)	谷首 (B−3) 越塚 (B−4) 秋殿 (B−4) 石舞台 (C) 都塚 (A²) 文殊院東 (A²) 小谷 (A²) 峯塚 (A²) 岩屋山 (A²) 文殊院西 (A²)

は他の群集墳とは離れて東端部に位置すること等からすれば、長尾山丘陵における6世紀中頃以降のB型企画法は大和の影響により採用された可能性が強いのではなかろうか。また、C・D・E型については、B型からの派生とは考えられるものの、大和の主要古墳にはほとんどみられないことからすれば、当地域内か摂津、河内を含む範囲内で独自に生み出された企画法としてとらえられるのではなかろうか。

なお、今回の検討では主要古墳のみ対象とし、群集墳は扱わなかったが、長尾山丘陵のように倍数型企画法を多く採用した群集墳例としては、天理市石上・豊田古墳群⑭、桜井市外鎌山北麓古墳群⑮、太子・河南町一須賀古墳群⑯、東大阪市山畑古墳群⑰、高槻市塚脇古墳群⑱、京都市御堂ケ池古墳群⑲等をあげることができる。これらの群集墳は、倍数型企画法が大半を占めるものや、A^1・A^2型と混在するもの等さまざまで、今後検討すべき問題点が多く残されている。

5．まとめ

以上のように、畿内における主要横穴式石室の平面企画では、倍数型企画法のなかでもB型企画法の占める位置は大きいものである。このB型企画法は、摂津において出現し、その後大和を中心に採用されるようになるが、大和では6世紀中頃から7世紀前半の主要古墳の大半がこの企画法を採用するとともに、他地域にも影響を与えるなど、一つの時期を画するべき企画法であった。

すでに述べたように、横穴式石室構築にあたっては専門技術者の存在が想定されるが、ここでみたような倍数型企画法やその他の企画法については、被葬者そのものよりもまずそれにあたった技術者と対応させて考えるべきであろう。このような視点からすれば、6世紀初頭から前半頃の初期横穴式石室がA・B・C型企画法の混在であったのに対して、6世紀中頃以降大和を中心に数多くの石室でB型企画法が採用されることは、平面企画法を同じくする大きな技術者の集団が生まれたと考えてよいのではなかろうか。また、その集団の出現については、大和政権による編成が直接の要因になったものと思われ、その背景としては大和政権と大和内部や他地域の首長長層との造墓行為を伴う密接な関係が考えられるのではなかろうか。

このように同一企画法で構築された石室に関しては、すでに白石太一郎氏により、大和の7世紀前半代にみられる岩屋山式横穴式石室の公葬的性格が指摘されている。[20] ここでみられた大和を中心としたB型企画法は、壁面構築では岩屋山式石室ほどの厳密性はないにしても、すでにこの頃より大和政権による大和及び畿内の首長層支配機構の整備が進行しつつあったことを示すものではなかろうか。

ただし、大和では圧倒的多数を占めたB型企画法も、地域によってはほとんどみられなかったり、他の企画法と混在する等、他系統の技術者集団の存在も想定される。また、B型企画法でも多種の壁面構築法がみられることから、技術者集団が何系統かに分かれる可能性もある等問題も多く、今後群集墳の横穴式石室も含めて検討していきたいと考えている。

＜註＞

① 尾崎喜左雄『横穴式古墳の研究』（吉川弘文館　1966年）

岡本一士「古墳構築規矩論－その1　横穴式石室」（『元興寺仏教民俗資料研究所年報』第8冊　1974）

柳沢一男「北部九州における初期横穴式石室の展開－平面図形と尺度について－」（『九州考古学の諸問題』福岡考古学研究会編　1975）

宮川徙「前方後円墳築造企画の「基準尺度」について」（『橿原考古学研究所論集』第4　1979）

富田好久「畿内における横穴式古墳の企画性」（『舟ケ崎正孝先生退官記念畿内地域史論集　1981）

② 岡野慶隆「横穴式石室の平面形について」（『関西学院考古』第4号　1978）

岡野慶隆「横穴式石室の平面企画について－長尾山丘陵の横穴式石室を中心として－」（『関西学院考古』第6号　1980）

③ B・C・D型企画法のうち、羨道長が玄室幅の倍数となるものについては、今回新たにその倍数値をとって「B－2、C－2～4、D－2・3」等の分類を行った。また、無袖式のE型でもその倍数値より「E－4・5」の分類も可能であるが、石室規模が小さなものが多いことより、偶然に倍数となる危険性も考えられる。

④ 尺度については、もし使用されていたならば、まず基準長を何尺分かにあてたと考えられる。この点について第1表をみると、1.25～1.40m、1.66～1.70m、1.93～2.15、2.25～2.32mの4グループに分けることができ、これが4～7尺にあたるとすると、1尺32～35cmの尺度を考えることができる。

⑤ 計測値及び図面については、各報告書及び文献によった。ただし、明らかに誤りと思われるものは、図上スケールにより補正した。また、倍数値については、玄室では＋－0.1、羨道では明確でないものが多いことより＋－0.2の範囲内のものもそれぞれ含めた。なお、玄室幅は前・後幅の最大値をとった。

前回の長尾山丘陵での検討では、大半は原図によったが、今回は各報告書の図と記載の数値によったため、資料の不正確さ及び不統一性はまぬがれなく、尺度の使用等の厳密な検討は困難である。

⑥ これらのC型企画法の石室については、羨道長が短いことや、時期的にみて、長尾山丘陵のC型とは別のものと考えたい。ただし、大和二塚古墳後円部・前方部の石室だけは羨道長が長くC－3型となり、その位置付けは問題である。

⑦ この時期のA^2型は、岩屋山古墳などの切石積石室だけでなく、ツボリ山古墳、都塚古墳、文殊院東古墳、水泥塚穴古墳など自然石積の石室も含まれる。

⑧ ただし、愛宕塚古墳については時期的に古く、大和二塚古墳の2石室とともに位置付けは問題である。

⑨ 藤井寺市藤の森古墳は、後にあげる堺市塔塚古墳とともに畿内最古の横穴式石室で、5世紀

中頃のものとされているが、時期的にみてこれらに次ぐ石室と隔っている点は再検討の余地があるものと思われる。

⑩　白石太一郎「畿内の後期大型群集墳に関する一試考－河内高安千塚及び平尾山千塚を中心として－」（『古代学研究』第42・43合併号　1966）

⑪　この点からすれば、倍数型企画法以外のものでは、同一企画法としたなかでも別系統の企画法が混在する可能性が考えられる。たとえば、大和の７世紀代のA^2型はそれ以前のA^2型とまったく異なった企画法であった可能性が強い。

⑫　限定された小地域を対象としていないため明確ではないが、長尾山丘陵でみられたように基準長が年代とともに短くなる傾向はみられず、最大規模のものは基準長３m前後を保っているようである。

⑬　ただし、大和二塚古墳の２石室や河内の愛宕塚古墳の場合は、いずれもＣ－３型となるが、時期的にＢ型企画法の普及開始時かそれ以前にあたることより、単にＢ型企画法の発展型とすることはできない。

⑭　堀田啓一・泉森皎・河上邦彦『天理市石上・豊田古墳群Ⅰ－天理市石上・豊田古墳群発掘調査報告－』（奈良県文化財調査報告書第20集　1975）

　同『天理市石上・豊田古墳群Ⅱ－天理市石上・豊田古墳群発掘調査報告－』（奈良県文化財調査報告書第27集　1976）

⑮　前園実知雄・関川尚功ほか『桜井市外鎌山北麓古墳群』（奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第34冊　1978）

⑯　藤沢一夫・堀江門也ほか『河南町東山所在遺跡発掘調査概報』（大阪府教育委員会　1969）

　同『河南町東山弥生集落発掘調査概報』（大阪府教育委員会　1970）

⑰　藤井正直・都出比呂志『枚岡市史』第３巻史料編１　1966）

　水野正好ほか『山畑古墳群Ⅰ』（東大阪市文化財調査報告書第１冊　1973）

⑱　西谷正『塚脇古墳群』（高槻市文化財調査報告書第１冊　1965）

⑲　京都大学考古学研究会『嵯峨野の古墳時代－御堂ケ池群集墳発掘調査報告－』（1971）

　六勝寺研究会『御堂ケ池群集墳第20号墳発掘調査報告』（1973）

⑳　白石太一郎「岩屋山式の横穴式石室について」（『論集終末期古墳』　1973）

畿内主要横穴式石室文献一覧

（番号は資料番号を示す）

①　伊達宗泰・岡幸二郎・菅谷文則『鳥土塚古墳』（奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第27冊　1972）

②　①と同じ。

③　河上邦彦『市尾墓山古墳』（高取町教育委員会・奈良県立橿原考古学研究所　1984）

④　①と同じ。

⑤・⑥　堀田啓一・泉森皎・河上邦彦『天理市石上・豊田古墳群Ⅱ－天理市石上・豊田古墳群発

掘調査報告－』（奈良県文化財調査報告書第27集　1976）

⑦・⑧　上田宏範・北野耕平ほか『大和二塚古墳』（奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第２冊　1962）

⑨　小島俊次・伊達宗泰『珠城山古墳』（奈良県教育委員会　1956）

⑩・⑪　伊達宗泰「大三輪町穴師珠城山２号・３号墳」（『奈良県文化財調査報告（埋蔵文化財編）』第３集　1960）

⑫　北野耕平・小島俊次「北葛城郡当麻村平林古墳」（『奈良県文化財調査報告（埋蔵文化財編）』第３集　1960）

⑬　①と同じ。

⑭　河上邦彦『平群・三里古墳』（奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第33冊　1977）

⑮　網干善教「御所市古瀬「水泥蓮華文石棺」及び「水泥塚穴古墳」の調査」（『奈良県史跡名勝天然記念物調査抄報』第14輯　1961）

⑯　梅原末治「大和赤坂天王山古墳」（『日本古文化研究所報告』９　1938）

⑰　白石太一郎・前園実知雄『馬見丘陵における古墳の調査』（奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第29冊　1974）

広陵町教育委員会『史跡牧野古墳現地説明会要旨　1984）

⑱　河上邦彦「桜井市谷首古墳」（奈良県教育委員会『奈良県の主要古墳』Ⅰ　1971）

⑲　濱田耕作『大和島庄石舞台の巨石古墳』（京都帝国大学文学部考古学研究報告第14冊　1937）

⑳　伊達宗泰「桜井市粟原越塚古墳」（『奈良県文化財調査報告（埋蔵文化財編）』第３集　1960）

㉑　泉森皎「秋殿古墳」（『飛鳥・磐余地域の後、終末期古墳と寺院跡』奈良県文化財調査報告書第39集　1982）

㉒　①と同じ。

㉓　網干善教・河上邦彦・奥田豊「都塚古墳発掘調査報告」（『関西大学文学部考古学年報』２　1967）

㉔　岡崎晋明「文殊院東古墳」（『飛鳥・磐余地域の後、終末期古墳と寺院跡』奈良県文化財調査報告書第39集　1982）

㉕　河上邦彦「御所市水泥塚穴古墳」（『奈良県古墳発掘調査集報Ⅱ』奈良県文化財調査報告書第30集　1978）

㉖・㉗　白石太一郎「岩屋山式の横穴式石室について」（『論集終末期古墳』1973）

㉘　梅原末治「大和越岩屋山古墳」（『日本古文化研究所報告』１　1935）

㉙　泉森皎「艸墓古墳」（『飛鳥・磐余地域の後、終末期古墳と寺院跡』奈良県文化財調査報告書第39集　1982）

㉚　梅原末治「大和平群村西宮古墳」（『日本古文化研究所報告』１　1935）

㉛　岡崎晋明「文殊院西古墳」（『飛鳥・磐余地域の後、終末期古墳と寺院跡』奈良県文化財調査報告書第39集　1982）

㉜　西谷正『藤の森・蕃上山二古墳の調査』（大阪府水道部　1965）
㉝　高井健司「長原七ノ坪古墳とその馬具」（『葦火』創刊号　1986）
㉞　森浩一「古墳文化と古代国家の誕生」（『大阪府史』第一巻　1978）
㉟　藤沢一夫・谷本武『八尾市高安群集墳の調査（第２次）－昭和42年度服部川その他地区調査概要－』（大阪府教育委員会　1968）
㊱　片山長三「枚方の遺跡と遺物」（『枚方市史』第１巻　1967）
㊲　藤沢一夫・堀江門也ほか『河南町東山弥生集落発掘調査概要』（大阪府教育委員会　1970）
㊳　藤井直正・都出比呂志『枚岡市史』第３巻史料編１　1966）
㊴　小林行雄・楢崎彰一『金山古墳および大薮古墳の調査』（大阪府文化財調査報告書第２輯　1953）
㊵　梅原末治「河内五条の方形墳」（『日本古文化研究所報告』１　1935）
㊶・㊷　㊳と同じ。
㊸　森浩一「大阪府葉室古墳群の大方墳」（『古代学研究』58　1970）
㊹　白石太一郎「日本における横穴式石室の系譜－横穴式石室受容に関する一考察－」（『先史学研究』５　1965）
㊺　上田舒ほか『富木車塚古墳』（大阪市立美術館学報２　1960）
㊻　川端真治・金関恕「摂津豊川村南塚古墳調査概報」（『史林』38－５　1955）
㊼　亥野彊『川西市史』第４巻　考古資料　1977）
㊽　梅原末治「摂津福井の海北塚古墳」（『日本古文化研究所報告』４　1937）
㊾　勇正広・藤岡弘ほか『具足塚発掘調査報告』（西宮市教育委員会　1976）
㊿　梅原末治「摂津鉢塚古墳の石室」（『日本古文化研究所報告』１　1935）
(51)　武藤誠・橋本久『宝塚市史』第４巻　考古編　1977）
(52)　梅原末治「摂津耳原古墳」（『日本古文化研究所報告』１　1935）
(53)　武庫川女子大学考古学研究会『旭塚古墳－表六甲城山群集墳中の一巨石墳の測量調査とその考証』（1984）
(54)～(61)　京都大学考古学研究会『嵯峨野の古墳時代－御堂ケ池群集墳発掘調査報告－』（1971）

第4表　畿内主要横穴式石室一覧表

（（　　）内は玄室幅で割った数値で、倍数値及びそれに近似する数値を太字とした。）

1．大和

資料番号	古墳名	玄室 (m) 幅	玄室 (m) 長	羨道 (m) 幅	羨道 (m) 長	企画法	形態	墳丘
1	椿井宮山	3.0	4.1 (1.4)	1.0	0.5 (0.2)	A^1	右片袖	円墳 径20m
2	勢野 茶臼山	2.7	4.6 (1.7)	1.3	5.4 (**2.0**)	A^2	右片袖	前方後円墳 全長40m
3	市尾墓山	2.6	5.87 (2.3)	1.82	3.58 (1.4)	C	右片袖	前方後円墳 全長60m
4	柿　家	3.2	5.35 (1.7)	1.3	3.7 (1.2)	A^2	左片袖	円墳 径12m
5	石上大塚	2.8	6.3 (2.3)	2.8		C	左片袖	前方後円墳 全長107m
6	ウワナリ塚	2.9	6.85 (2.4)	2.0		C	両袖	前方後円墳 全長110m
7	大和二塚 後円部	2.98	6.73 (2.3)	1.73	9.68 (**3.2**)	**C－3**	両袖	前方後円墳 全長60m
8	〃 前方部	1.7	3.9 (2.3)	1.4	5.1 (**3.0**)	**C－3**	右片袖	〃
9	珠城山 1号墳	1.65	3.4 (**2.1**)	1.0		**B**	右片袖	前方後円墳 全長50m
10	〃 3号墳 後円部	2.14	4.66 (2.2)	1.1	5.1 (2.4)	C	両袖	前方後円墳 全長47.5m
11	〃 前方部	2.1	4.42 (**2.1**)	1.2	4.3 (**2.0**)	**B－2**	右片袖	〃
12	平　林	3.0	5.5 (1.8)	2.0	6.5 (**2.2**)	A^2	両袖	前方後円墳 全長55m
13	鳥土塚	2.8	6.0 (**2.1**)	1.9	8.2 (**2.9**)	**B－3**	両袖	前方後円墳 全長60.5m
14	三　里	2.44	4.92 (**2.0**)	1.45	7.06 (**2.9**)	**B－3**	両袖	前方後円墳 全長35m?
15	水泥南	2.25	4.55 (**2.0**)	1.6	6.22 (**2.8**)	**B－3**	両袖	円墳 径14m
16	天王山	3.0	6.36 (**2.1**)	1.8	8.5 (**2.8**)	**B－3**	両袖	方墳 一辺40m
17	牧　野	3.3	7.0 (**2.1**)	1.8	10.15 (**3.1**)	**B－3**	両袖	円墳 55×48m

資料番号	古墳名	玄室 (m) 幅	玄室 (m) 長	羨道 (m) 幅	羨道 (m) 長	企画法	形態	墳丘
18	谷首	2.8	6.0 (**2.1**)	1.7	7.8 (**2.8**)	**B－3**	両袖	方墳 35×38m
19	石舞台	3.45	7.7 (2.2)	2.4	11.5 (3.3)	C	両袖	方墳 一辺53m
20	越塚	2.75	5.3 (**1.9**)	1.8	10.7 (**3.9**)	**B－4**	両袖	円墳 径40m
21	秋殿	2.26	4.48 (**2.0**)	1.6	9.2 (**4.1**)	**B－4**	両袖	方墳 26×27m
22	ツボリ山	2.55	4.25 (1.7)	2.0	4.65 (**1.8**)	A^2	両袖	円墳 径20m
23	都塚	2.95	5.3 (1.8)	2.0	6.9 (2.3)	A^2	両袖	方墳？ 26～28m
24	文殊院東	2.67	4.69 (1.8)	2.04	8.31 (**3.1**)	A^2	両袖	円墳 径15m
25	水泥塚穴	3.1	5.6 (1.8)	2.0	7.6 (2.5)	A^2	両袖	円墳
26	小谷	2.8	5.05 (1.8)	1.9	6.45 (2.3)	A^2	両袖	
27	峯塚	2.65	4.6 (1.7)	1.9	6.5 (2.5)	A^2	両袖	円墳 径35m
28	岩屋山	2.7	4.72 (1.7)	1.93	12.08 (4.5)	A^2	両袖	方墳 一辺40m
29	艸墓	2.71	4.44 (1.6)	1.9	8.72 (**3.2**)	A^2	両袖	方墳 22×28m
30	西宮	2.1	3.6 (1.7)	1.5	9.1 (4.3)	A^2	両袖	方墳 一辺20m
31	文殊院西	2.9	5.12 (1.8)	2.3	7.38 (2.5)	A^2	両袖	円墳？ 径30m

2．河内

資料番号	古墳名	玄室 (m) 幅	玄室 (m) 長	羨道 (m) 幅	羨道 (m) 長	企画法	形態	墳丘
32	藤の森	1.5	3.5 (2.3)	0.9	1.0 (0.7)	C	右片袖	円墳 22m
33	長原 七ノ坪	2.5	3.8 (1.5)	1.1		A^1	右片袖	前方後円墳 全長22m

資料番号	古墳名	玄室 (m)		羨道 (m)		企画法	形態	墳丘
		幅	長	幅	長			
34	芝山	3.0	3.8 (1.3)	1.0	1.8 (0.6)	A1	両袖	前方後円墳 全長26m
35	愛宕塚	3.08	7.16 (2.3)	2.1	9.6 (**3.1**)	C－3	両袖	円墳 径25m
36	白雉塚	2.4	3.8 (1.6)	1.2	4.7 (**2.0**)	A2	左片袖	円墳 径30m
37	一須賀 1号墳	3.1	6.5 (**2.1**)	1.2	8.5 (2.7)	B－3 ?	両袖	円墳 径30m
38	松本塚	2.6	5.2 (**2.0**)	1.7		B	両袖	円墳 径20m
39	金山	2.48	3.8 (1.5)	1.72	6.26 (2.5)	A1	両袖	双円墳 全長78m
40	五条	2.5	5.0 (**2.0**)		7.0 (**2.8**)	B－3	両袖	方墳 一辺30m
41	山畑 2号墳	2.6	6.44 (2.5)	1.9	10.24 (**3.9**)	C－4	右片袖	上円下方墳 一辺28m
42	二本松	2.3	4.5 (**2.0**)	1.9	8.2 (3.6)	B－4 ?	両袖	円墳 径15m
43	葉室石塚	2.1	6.1 (**2.9**)	1.7	5.6 (2.7)	D－3 ?	両袖	方墳 一辺26m

3．和泉

資料番号	古墳名	玄室 (m)		羨道 (m)		企画法	形態	墳丘
		幅	長	幅	長			
44	塔塚	2.2	2.4 (1.1)	0.9	0.5 (0.2)	A1	両袖	方墳 一辺30m
45	富木車塚	1.3	3.7 (2.8)	0.9	3.2 (2.5)	C	右片袖	前方後円墳 全長45m

4．摂津

資料番号	古墳名	玄室 (m)		羨道 (m)		企画法	形態	墳丘
		幅	長	幅	長			
46	南塚	2.5	5.0 (**2.0**)	1.2		B	右片袖	前方後円墳 全長50m
47	勝福寺 北墳	2.32	4.7 (**2.0**)	1.36	4.3 (**1.9**)	B－2	右片袖	円墳 径10m

資料番号	古墳名	玄室 (m)		羨道 (m)		企画法	形態	墳丘
		幅	長	幅	長			
48	海北塚	2.2	4.2 (**1.9**)		5.7 (2.6)	**B－3** ?	左片袖	円墳
49	具足塚	2.07	3.49 (1.7)	1.18	5.26 (2.5)	A^2	右片袖	円墳 径17m
50	鉢塚	3.3	6.4 (**1.9**)	1.5	7.5 (2.3)	**B－3** ?	両袖	上円下方墳 一辺40m
51	中山寺 白鳥塚	2.5	6.0 (2.4)	2.0	9.2 (3.7)	C	両袖	
52	耳原	2.4	6.9 (**2.9**)	1.68	6.9 (**2.9**)	**D－3**	両袖	円墳 径20m
53	旭塚	2.17	4.03 (**1.9**)	2.17	6.32 (**2.9**)	**B－3**	両袖	方墳 25×28m

5．山背

資料番号	古墳名	玄室 (m)		羨道 (m)		企画法	形態	墳丘
		幅	長	幅	長			
54	天塚 後円部	1.8	4.7 (2.6)	1.25	3.0 (1.7)	C	左片袖	前方後円墳 全長73m
55	丸山	3.2	4.9 (1.5)	1.9	9.6 (**3.0**)	A^1	両袖	円墳 径50m
56	御堂ケ池 1号墳	2.5	3.7 (1.5)	1.4		A^1	両袖	円墳 径30m
57	入道塚	2.5	4.0 (1.6)	1.6	7.2 (**2.9**)	A^2	両袖	円墳　?
58	衣笠山 1号墳	2.2	3.2 (1.5)	1.4		A^1	両袖	円墳 径26m
59	蛇塚	3.8	6.7 (1.8)	2.6	11.1 (**2.9**)	A^2	両袖	前方後円墳 全長75m
60	狐塚	2.3	3.8 (1.7)	1.4		A^2	両袖	円墳
61	甲塚	2.8	5.2 (**1.9**)	1.6	9.0 (**3.2**)	**B－3**	両袖	円墳 径38m

研究ノート

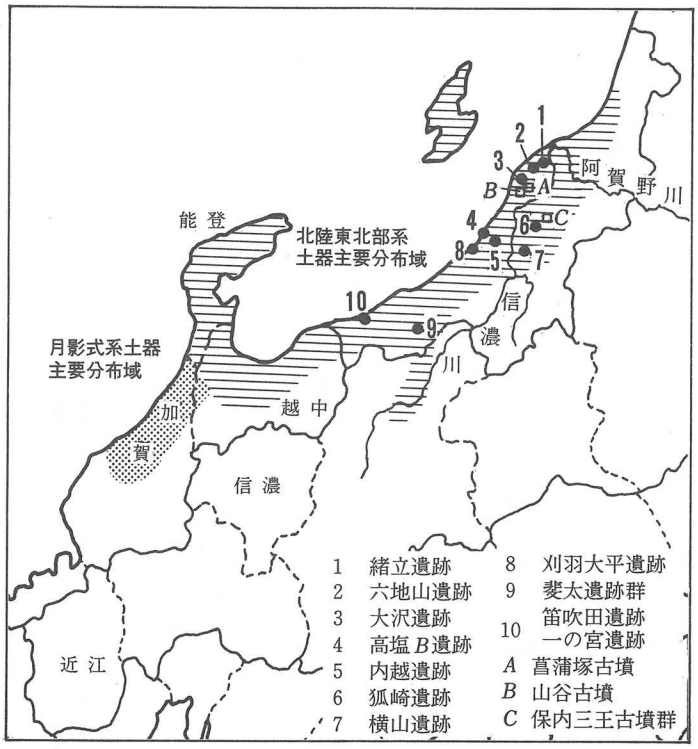
古墳出現期越後における外来系土器

坂　井　秀　弥

1．はじめに

古墳出現期に全国的規模で土器が動くことはよく知られている。西日本における庄内式甕や東日本におけるＳ字状口縁甕の広汎な分布は、その代表例ともいえる。こうした土器には他地域から直接搬入された土器と、他地域の土器をモデルに在地で製作された土器があるが、両者を含めて「外来系土器①」と言うことができる。

北陸地方の東北端に位置する越後においても、古墳出現期の外来系土器はいくつか知られるようになった（第１図）。「北陸」と「東北」の地域的な狭間にあって、とかく「辺境」のイメージが強い越後ではあるが、最近、巻町山谷古墳②（前方後方墳）や三条市保内三王山古墳群③（前方後円墳１基、前方後方墳１基、その他15基）など、前期古墳の発見が相次ぎ、従来の認識・評価が大きくあらためられつつある④。越後は日本海沿岸地域における前期古墳の分布域の北限であり、その成立の背景には当然、他地域とのさまざまな交流があったものと思われる。

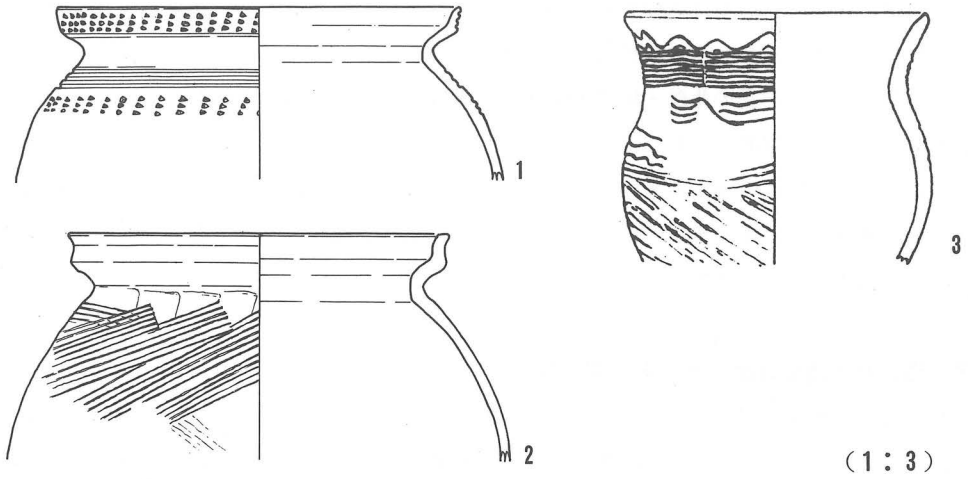


第１図　外来系土器出土遺跡関係図

そこで、小稿では越後の外来系土器のいくつかを紹介し、古墳出現期における他地域との関係の一端をさぐることにしたい。なお、「古墳出現期」とはただ単に弥生後期から古墳前期をさすものであって、それ以上の意味はない。

2．外来系土器

A、巻町大沢遺跡出土土器（第２図）



第２図　大沢遺跡出土土器

大沢遺跡は新潟平野西側に連らなる弥彦・角田山塊北端の尾根上、標高約36ｍに立地する。平野部との比高は約30ｍで、広大な新潟平野を望むことができる、いわゆる高地性集落である。昭和54年から57年にかけて新潟大学考古学研究室を主体とする調査が数次にわたって実施され、竪穴住居跡４基、方形周溝墓１基が検出された⑤。弥生後期後半から月影Ⅰ式期（谷内尾編年⑥）にかけての時期を中心とする。

近江系（１・２）　１は方形周溝墓周辺から出土した受口状口縁の甕である。口縁部から体部上半部にかけこの約⅛を残すもので、口径は16㎝である。口縁部は短く外傾しながら直線的にたちあがり、端部は丸くおさまる。口縁帯外面に比較的粗い櫛状工具により、左下りの斜行刺突列点をめぐらし、頸部下位に平行直線文、その下に口縁帯と同じ刺突列点文めぐらす。平行直線文と刺突列点文の原体は同一である。口縁部内外面はヨコナデ、体部外面は条線が明瞭ではないハケ目（「板ナデ⑦」）で、体部内面は器面が剥離し、調整不明である。外面にススが付着する淡明褐色を呈し、胎土に小砂粒を含む。焼成はやや軟質である。

２は遺跡の北側から出土した受口状口縁の甕である。口縁部から体部上半部にかけての約⅕を残すもので、口径15㎝である。口縁は短く直立気味にたちあがり、端部は水平な面をもち、わずかに外反する。口縁部は内外面ともヨコナデで、施文はみられない。体部外面はハケ目、内面はわずかなくぼみがあるが、ナデ調整がなされているものと思われる。頸部にはハケ目の前に縦位の板ナデをおこなう。体部外面のハケ目は斜方向で、明瞭に残る。外面にススが付着する。淡褐色を呈し、胎土に小砂粒を含む。焼成は堅緻である。

受口状の口縁形態をもつ甕はこのほかにも、新潟市六地山遺跡⑧（弥生後期前半～中葉）、糸魚川市笛吹田遺跡⑨（法仏Ⅱ式期）など、いくつかの例がある。これらをすべて近江系とするにはやや問題があろうが、長岡市横山遺跡⑩（月影Ⅰ式期）に、つくりからみて近江系といえるものが存在する。なお、近江系土器には地域によって施文や器形・手法などにかなりバラエティーがあるという⑪が、北陸的な様相が顕著な「北近江系⑫」もこれに含めておく。

中部高地系（３）方形周溝墓周辺から出土した甕で、体部下位が欠失する。頸部から口縁部は

ゆるく弧状に外反し、端部は外傾する面をもつ。体部は肩の張りがない。頸部外面に櫛描の波状状文、その後に簾状文を加え、体部外面も同様の施文ののち、下半部をヘラ削りする。内面はヘラ磨きがなされる。信濃の北部・中部・東部に分布する箱清水式⑬系と考えられる。

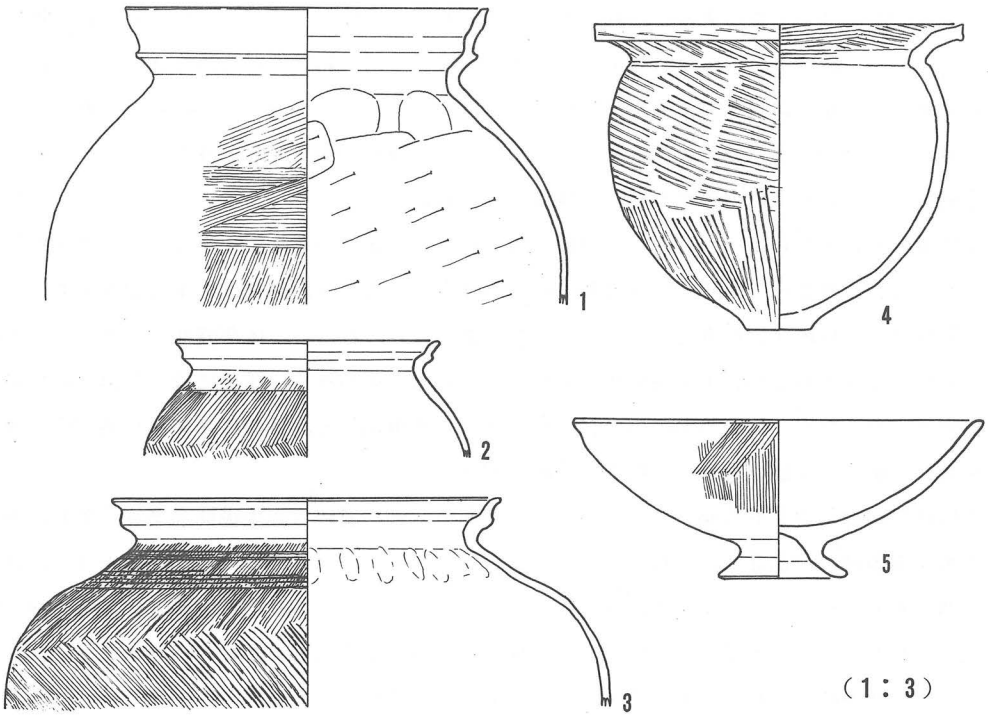
越後のなかでも、信濃川を介して北信濃との交流が活発と推察される越後南東部の魚沼地方においては、弥生中期に中部高地系の土器が主流をなすとみられ⑭、越後のなかでは特異な様相を呈している。後期については資料がほとんどないため、不明ではあるが、中期と同じく中部高地形の土器が卓越するものと予想される。

B、西山町高塩B遺跡出土土器（第3図）

高塩B遺跡は越後中部西側の日本海に面した海岸砂丘上に立地し、背後に低い丘陵をひかえている。現汀線までは約100mの至近距離である。昭和48年に西山町教育委員会が調査した。遺構は検出されなかったが、多量の土器が出土した⑮。時期は古府クルビ式を中心に、その前後を含むものと思われる。

山陰系（1・5）　1は二重口縁の甕の口縁部から体部上半部で、口径は13.8cmである。口縁帯の下端は明瞭な突出部があり、その内面はくぼんで、上下に稜線をもつ。口縁帯は外反し、端部上方はわずかに面をもつ。口縁部内外面はヨコナデ、体部外面は細かくて端正なハケ目、内面上端は指頭圧痕、ほかは入念なヘラ削りである。体部の器壁はヘラ削りにより、かなり薄く、全体のつくりはシャープである。明褐色を呈し、胎土は精良である。外面にススが付着する。

5は山陰地方に特徴的ないわゆる低脚杯で、報告書では杯の可能性を考慮しながらも、蓋とし



第3図　高塩B遺跡出土土器

て掲載したものである。全体の約⅛を残す。杯部は浅く、体部から口縁部はゆるく内湾し、口縁部は丸くおさまる。杯部外面はハケ目、外面下半から脚部はヨコナデで、脚部下端はヘラ磨き、杯部内面は粗いヘラ磨きかと思われる。1・5ともに出雲地方の編年[16]Ⅳ期・Ⅴ期に比定されよう。

加賀を中心とした北陸地方西部においては、弥生後期に土器様相が全般的に山陰と濃密な関連をもつようになり[17]、北陸地方東北部もその影響を受けるものと推察される。越後においても後期後半の法仏Ⅱ式期の西山町内越遺跡[18]などで、二重口縁に擬凹線を施した甕（第4図1）や器台が出土している。また山陰からもたらされ、北陸地方に広く分布するS字や鋸歯文のスタンプ施文[19]も、前記の大沢遺跡、三条市狐崎遺跡[20]、糸魚川市一の宮遺跡[21]で出土している。この時期以降のものになると、高塩B遺跡出土例以外では、横山遺跡にこれと類似した甕がみられる[22]程度である。なお、高塩B遺跡で注口と脚台をもった土器が出土しており、山陰の注口土器との関連も考えられるが、器形は山陰地方に類例をみないようである。

東海西部系（2・3）　2・3ともにS字状口縁の甕である。2は口径10㎝の小形甕で、口縁部から体部上半の約½を残す。口縁部内外面はヨコナデ、体部外面はハケ目、内面はナデである。淡黄褐色を呈し、胎土は精良である。

3は口径14.8㎝の大形甕である。口縁部は短く外反し、端部は丸くおさまる。頸部から口縁帯下辺にかけては器壁が厚くなる。体部上半はやや肩が張る形態をとる。口縁部内外面はヨコナデ、体部外面はハケ目ののちに、体部上端に上下2段の横方向の条線を加える。体部内面上端は指頭圧痕、ほかはていねいなナデである。体部の器壁はうすい。淡褐色を呈し、胎土は精良である。2・3ともに外面にススが付着する。いずれも体部下半部を欠失するが、有台と考えられる。3は安達・木下分類[23]の「ⅢA類」にあたると考えられる。(補註1)

東海西部に出自をもっとされるいわゆるS字状口縁甕は現在のところ、上記2点のほかに新井市斐太遺跡群[24]（法仏Ⅱ式～月影Ⅱ式古段階）に有台の完形品1点がある。この甕の口縁帯下辺には斜行列点文がめぐっている。甕以甕では、欠山式・元屋敷式系統の高杯が、大沢遺跡、柏崎市刈羽大平遺跡[25]、黒埼町緒立遺跡[26]で出土している。パレススタイル壷の典型例は狐崎遺跡にあり、その影響が感じられるものが緒立遺跡にある。

畿内系（4）　一見タタキ目に似たハケ目調整（「擬タタキ」[27]）の甕で、畿内系というには不適当かもしれないが、それを模していると考えられる。口径14㎝、器高11.7㎝、全体の約½を残す。口縁部はくの字状に大きく外反し、端部は面をもつ。体部高に対して胴径が大きな形態で、球形にちかい。底部は小さな平底である。口縁部内面は横方向のハケ目、外面は口縁部、体部ともハケ目、体部内面はナデである。体部外面のハケ目は上半部と下半部でことなっており、他のハケ目調整の甕と明瞭なちがいをもつ。上半部のハケ目は粗くて太い条線の原体で、水平よりやや斜め方向に、上下に連続させて、縦割りに施し、下半部のハケ目はそののちに上から下に縦方向に施すものである。器形も球体にちかい体部、大きくくの字状に外反する口縁部など、他の甕との相違点が指摘される。このようなことから、この甕は畿内のタタキ調整の甕を模して製作されたと考えられる。褐色を呈し、2～3㎜大の砂粒を多く含む。外面にススが付着する。

越後では現在のところ、タタキ調整の甕は確認されておらず(補註2)、北陸地方においては、越中小杉

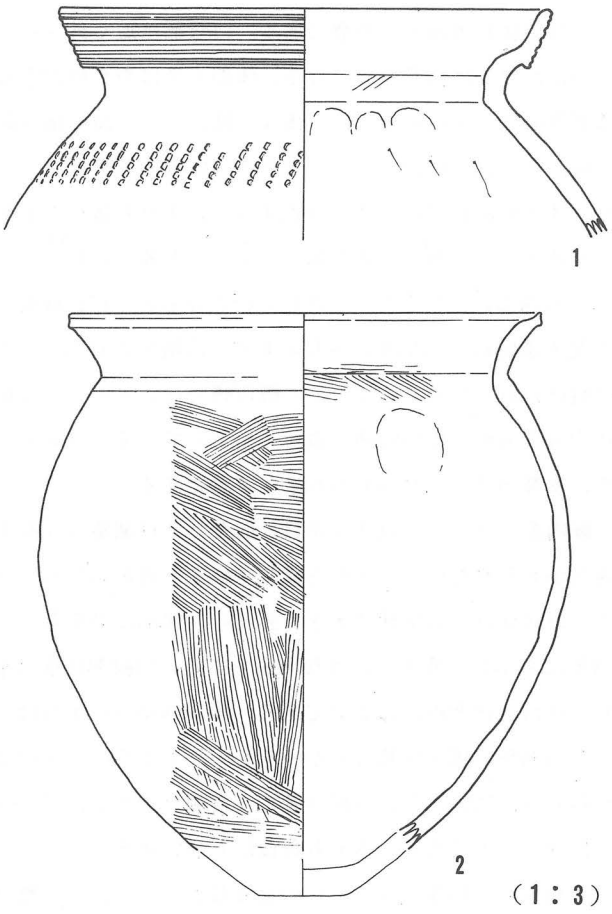
流通業務団地内No.21[28]遺跡が東限となっている。加賀ではかなりの出土例が知られており[29]、越中以東のあり方とことなっているようである。

3．在地の土器をめぐって

以上、近年の報告例のなかから、大沢遺跡と高塩B遺跡の近江系、中部高地系、山陰系、東海西部系、畿内系の土器を紹介し、あわせて越後の外来系土器についてごく簡略に概観した。これらのうち、どれだけ搬入品かどうかは決定しがたい面もあるが、在地で製作されたと考えられるのは、タタキ調整ではない畿内系の高塩B遺跡例、大沢遺跡の近江系土器（1）である。これ以外のものについては、胎土・製作技法などは彼地のものとあまり差がないのではないかと思われ、搬入された可能性も考慮される。

外来系土器の時期については、在地の詳細な土器編年を含めて、いまは論ずる用意はないが、大沢遺跡出土土器は谷内庄編年月影Ⅰ式期、高塩B遺跡出土土器は月影Ⅱ式新段階から古府クルビ式期に、それぞれおおよそ比定されよう。

ところで、越後の在地の土器であるが、基本的に能登・越中・佐渡を含めた北陸東北部の土器と共通している[30]。当期の北陸地方の土器としては、二重口縁に擬凹線を施した「月影式甕」系統の土器がよく知られている。このタイプの土器は弥生後期の法仏Ⅰ式期には、成立しており、その背景には山陰の影響を受けていることは明らかであるが、このタイプが主体をなすのは、加賀を中心とする地域であり[補註3]、能登・越中以東には少ない。越後では内越遺跡に法仏Ⅱ式期の例（第4図1）があるが、量的にはごく少ない。これに対して、北陸東北部の甕はくの字状に外反した単純な口縁で、端部がヨコナデによって面をもつものである（第4図2）。調整技法上では、体部内面のヘラ削りが顕著ではなく、月影式系統の甕と対照的である。布留式の段階になると、加賀以西では在地系の月影式甕にかわって、畿内系の布留

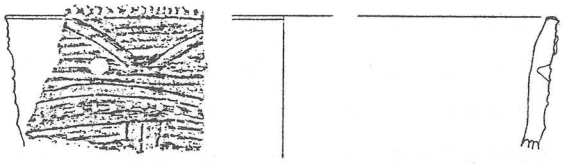


第4図　内越遺跡出土土器(1)と高塩B遺跡出土土器(2)

式甕が成立するが、北陸東北部では布留式甕はほとんど入ってはいない。

このように能登・越中・越後・佐渡を含む北陸東北部は、かなり広範囲にわたって同一の土器文化圏をもつとともに、加賀以西の地域と明確に一線を画していたことが知られる。北陸東北部地域における中枢は、古墳のあり方からみて能登と考えられ[31]、この地域内の交流は日本海を媒介とした海上ルートによるものと想定される。ひるがえって言えば、海上ルートを媒介としたがゆえに、東西に広い地域圏が成立したといえよう。したがって、ここでとりあげた山陰系土器など、かなり遠い地域の土器が存在することも、同じ日本海沿岸地域にあるからこそであろう。

内越遺跡で出土した続縄文土器[32]（第５図）は、現在のところ分布の南限資料であるが、これも海上ルートでもたらされたとみてよいであろう。



第５図　内越遺跡出土土器　（1：3）

４．おわりに

まだまだ古墳出現期の調査例は、他地域ほど多くはない状況であるが、いくつかの地域の外来系土器が出土していることが確認された。これら外来系土器をめぐる多くの問題については全く言及できなかったが、越後においても多くの地域とさまざまなかたちでの交流があったことだけはうかがうことができる。言うまでもないことではあるが、越後もけっして閉鎖的な地域でなく、新しい社会的・政治的な流れのなかにあったのである。今後も新しい発見が続くであろうし、調査例も増加すると思われる。具体的な古墳出現期越後の様相については将来にゆだねたい。

〔１９８６・６・３０〕

＜註＞

① 岩崎卓也「古墳出現期の一考察」（『中部高地の考古学Ⅲ』　長野県考古学会　1984）

② 甘粕健・小野昭ほか『山谷古墳』（巻町教育委員会　1984）

③ 甘粕健・小野昭ほか『保内三王山古墳群測量調査報告書』（三条市教育委員会　1985）

④ 甘粕健「前方後円墳の分布と越後における古墳発生に関する予察」（『越佐の歴史と文化』宮栄二先生古希記念刊行会　1985）

坂井秀弥「古墳出現期の新潟県」（『第５回三県シンポジウム　古墳出現期の地域性』　千曲川水系古代文化研究所ほか　1984）

⑤ 甘粕健ほか『大沢遺跡』（巻町・潟東村教育委員会　1981）

小野昭ほか『大沢遺跡Ⅱ』（新潟大学考古学研究室　1982）

⑥ 谷内尾晋司「北加賀における古墳出現期の土器について」（『北陸の考古学』　石川考古学研究会　1983）

以下、小稿における「法仏Ⅰ式」・「法仏Ⅱ式」・「月影Ⅰ式」・「月影Ⅱ式」・「古府クルビ式」はこれによる。越後における弥生後期から古墳前期の土器編年の概略は、坂井秀弥ほ

か「内越遺跡出土土器の越後における編年的位置」（『国道116号線埋蔵文化財発掘調査報告書　内越遺跡』　新潟県教育委員会　1983）、坂井秀弥「越後の弥生後期についての覚書」（『新潟県史研究』17　新潟県　1985）に示したが、なお多くの検討課題があり、今後に期したい。

⑦　石野博信・関川尚功『纒向』（奈良県立橿原考古学研究所　1976）

⑧　寺村光晴「越後六地山遺跡」（『上代文化』30　国学院大学考古学会　1956）
坂井註⑥文献

⑨　寺村光晴・千家和比古ほか『笛吹田遺跡』（糸魚川市教育委員会　1978）

⑩　中村孝三郎『先史時代と長岡の遺跡』（長岡市立博物館　1966）
坂井註⑥文献

⑪　中西常雄「近江における甕形土器の動向」（『考古学研究』125　考古学研究会　1985）
用田政晴「近江における弥生時代後期後葉の土器群」（『県営かんがい排水事業関連遺跡発掘調査報告書Ⅱ－３』　滋賀県教育委員会・滋賀県文化財保護協会　1985）

⑫　用田⑪文献

⑬　笹沢浩「中部高地」（『弥生土器Ⅱ』　ニュー・サイエンス社　1985）

⑭　戸根与八郎ほか『関越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書　長表遺跡』（新潟県教育委員会　1986）

⑮　金子拓男・坂井秀弥『新潟県刈羽郡西山町高塩Ｂ遺跡発掘調査報告書』（西山町教育委員会　1983）

⑯　赤沢秀則「出雲地方古墳出現前後の土器編年試案」（『松江考古』６　松江考古学談話会　1985）

⑰　谷内尾註⑥文献

⑱　坂井ほか註⑥文献

⑲　谷内尾晋司「内浦町の集落遺跡と古墳」（『内浦町史』　1981）

⑳　金子拓男「狐崎遺跡」（『三条市史』資料編第１巻　1981）

㉑　土田孝雄『糸魚川市史』資料集Ⅰ考古編（1986）

㉒　田中靖「東山丘陵西麓採集の弥生時代及び古墳時代の遺物」（『三条考古学研究会機関誌』３　三条考古学研究会　1985）

㉓　安達厚三・木下正史「飛鳥地域出土の古式土師器」（『考古学雑誌』50－２　日本考古学会　1974）

㉔　駒井和愛・吉田章一郎『斐太』（慶友社　1962）
坂井註⑥文献

㉕　品田高志ほか『刈羽大平・小丸山』（柏崎市教育委員会　1985）

㉖　磯崎正彦編『緒立遺跡第２次』（黒埼町教育委員会　1979）

㉗　谷内尾註⑥文献

㉘　上野章ほか『小杉流通業務団地内遺跡群第７次緊急発掘調査概要』（富山県教育委員会

1985）

㉙　宮本哲郎「弥生時代から古墳時代にかけての土器移動」（『金沢市南新保三枚田遺跡』　金沢市・金沢市教育委員会　1984）

㉚　坂井ほか・坂井註⑥文献

越後のなかでも、信濃川の河口付近より北側のいをゆる阿賀北地域は、弥生中期から後期前葉〜中葉に、南東北系土器が多く分布しており、越後中・南西部とはことなったあり方をみせる。これ以降の状況は資料も少なく不分明であるが、古府クルビ期に比定される豊浦町曽根遺跡（家田順一郎ほか『曽根遺跡Ⅰ』・『同Ⅱ』　豊浦町教育委員会　1981・1982）では南東北系の土器はみられない。

現在のところ、この地域には前期古墳の存在は知られておらず、大局的にみて、この付近が日本海沿岸地域における東と西の接点とすることはできよう。

㉛　坂井註⑥文献

甘粕氏は「能登の政治勢力を始祖に擬する同族的な結合が設定された」とする（註④文献）。

㉜　坂井ほか註⑥文献

補註１　加納俊介氏の御教示によれば、３の甕は赤塚分類（赤塚次郎「Ｓ字甕覚書85」『愛知県埋蔵文化財センター年報　昭和60年度』　1986）Ｂ類であり、搬入品の可能性が高いという。

補註２　長岡市横山遺跡の昭和60年・61年の調査でタタキ調整の甕が検出された（駒形敏朗ほか「横山遺跡試掘調査概報」『長岡市立科学博物館研究報告』21　1986）。

補註３　月影式甕は越前においても主要なタイプであるという（田嶋明人「古墳出現期の土器群と月影式土器」『シンポジウム月影式土器について』報告編　石川考古学研究会　1986）。

〔1987.1.20〕

（追記）

小稿の土器実測図のうち、大沢遺跡出土の近江系土器（第２図１・２）は新潟大学考古学研究室の甘粕健氏の御快諾を得て、筆者が実測したもので、ほかは各報告の原図によった。ただし、高塩Ｂ遺跡出土土器については実測図をもとに再トレースした。

ここでとりあげた土器については、金子拓男・兼康保明・用田政晴・田嶋明人・北野博司・平野芳英の諸氏から、貴重な御教示をえた。記して謝したい。

ダイアリー
考古研歳時記

活動のあゆみ

1984年度

5月26日
五ケ山古墳見学会

5月31日
勉強会「弥生時代前期」

6月7日
勉強会「弥生時代中期」

6月14日
勉強会「弥生時代後期」

6月27日
新歓コンパ

7月3～20日
滋賀県延勝寺湖底遺跡発掘調査

7月25～28日
滋賀県尾上遺跡発掘調査

9月3日
宝塚市仁川高台遺跡試掘調査

9月13～16日
川西市「祖先の足跡展」手伝い

10月4日
勉強会「古墳へのアプローチ」

10月13日
雲雀山西尾根古墳群B支群実測調査（なお本調査の経過は本文に詳しいので以下省略する。）

10月13日
勉強会「古墳時代前期」

10月18日
勉強会「古墳時代中期」

10月23日
勉強会「古墳時代後期」

10月27日
飛鳥見学会

11月2日
正倉院展見学

11月8日
勉強会「長尾山の古墳群梗概」

11月15日
勉強会「土師器」

11月22日
勉強会「須恵器」

11月29日
勉強会「埴輪」

12月6日
勉強会「古墳時代の生活」

12月13日
勉強会「古代朝鮮の歴史的推移と墳墓の変遷ーあらまし」

12月22日
忘年会

1月7日
中筋山手古墳群見学

1月19日
勉強会「日本古墳文化論」

3月4日

追い出しコンパ

1985年度

4月21日

播磨大中遺跡と石の宝殿見学会

5月15日

勉強会「日本古墳文化論」

6月4日

勉強会「農耕文化の形成」

6月7日

新歓コンパ

6月9日

河内飛鳥見学会

6月12日

勉強会「考古学へのアプローチ」

6月18日

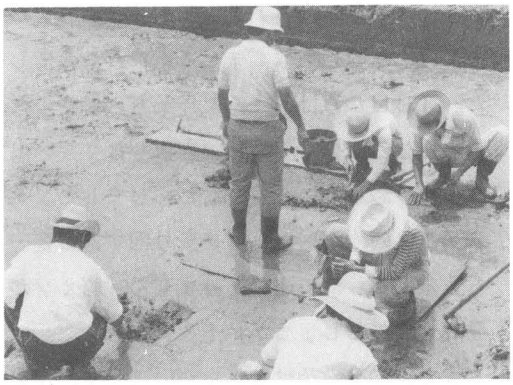
勉強会「長尾山の古墳群」

6月25日

勉強会「弥生土器その他」

7月8～8月9日

滋賀県草津市烏丸崎遺跡発掘調査



9月8日

岩橋千塚見学会

10月9日

勉強会「食生活の変遷」

10月15日

勉強会「石塔について」

10月22日

勉強会「古鏡」

10月27日

桜井・三輪見学会

10月29日

勉強会「古代の山城」

10月28～12月27日

川西市栄根遺跡発掘調査

11月12日

勉強会「雲雀山東尾根B支群に関する2・3の見解」

11月19日

勉強会「畿内における古墳の終末」（25・29日の3日間に分けて行う。）

12月6日

勉強会「十干と十二支のはなし」

12月13日

勉強会「八十塚古墳群について」

12月20日

勉強会「石造塔について（2）」

12月22日

高句麗文化展と忘年会

1月14日

勉強会「木造塔について」

1月24日

勉強会「中世の城郭」

1月28・29日

川西市山下地区文化財分布調査

3月3～7日

宝塚市遺物整理

ああ、尾上物語

佐々木　尚子

延勝寺での調査を終えて、一行は7月23日から7月28日まで尾上温泉にある尾上荘の跡地に現場を移したのでした。尾上においては、すでに明らかにされていた各々の恐るべき姿が全開したといえるのではないでしょうか。延勝寺の2週目のメンバーであった1・2回生に4回生の赤山さんが加わって、計6人で尾上の生活がくりひろげられたのです。初日の1回生の変貌ぶりに、赤山さんはとまどいつつも、しかしすぐに異常な雰囲気にとけこまれたのでした。

尾上では嶋田屋さんという民宿にお世話になりました。

初日は荷物を置いてすぐに現場に向かうと、あのなつかしい兼康さんたちがいらっしゃったのです。兼康さんは「いいもん見したろか」と言われ、私たちはすぐにその話にのりました。「まっすぐ行ったらあるから」の言葉をたよりに道をすすむと、まっすぐの道はなかったのです。とりあえず道を歩いていくと、目的地にたどりついたのでした。しかしあの道は、方向がさっぱりの私一人だったらきっと帰らぬ人となったでしょう。あの道は右に曲がってたのでは…？（いえ、私は方向音痴です。ハイ）

尾上温泉という地名からして、私はきっとお風呂は温泉だっ！とルンルンしていました。作業のあとの温泉!!ウーンすごいと思っていたところ、お風呂は我が家愛用のバスクリンでした。チャンチャン。

翌日24日は作業に入れず、兼康さんおすすめの渡岸寺の十一面観音を見学に行きました。一同「すばらしい」のひとこと、この時こそ未来の仏教考古学者が生まれた瞬間だったのであります。

3日目から、あの矢板の中の蒸し風呂地獄の中での作業がはじまりました。次から次へとわき出す水は、ポンプも必死に働いていました。私たちは各々道具を手に、腰痛と肩こりとたたかい、暑さのためボーっとなった頭で、しかし、何か出ないかとガリガリ一生懸命にやってたのです。（しかし、目ざす人形代や馬形代は、私達がおひまを頂き、各々が家ですごしているころに出てきたのでありました。）作業のあいまに兼康さんのスコップの使い方講座がひらかれました。6人の中で白江さんが優秀で、「形のまま飛ぶ」のでした。ちなみに私はバラバラにちらばってました。Sさんはスコップを使用してエッサホッサしていると、奈良さんに「Sさーん、白江君にかけちゃだめだよ」と言われたものでした。Sさんは体が小さく、スコップに振り回されている様でした。ところで、私の神様とも言えるユンボ高橋さんは、風邪ぎみで元気がなかったのです。しかし、高橋さんの作業のあいまのあの、「アチュー」「なんですかぁ」は、私の心をなごませてくれたものでした。3日目からはじまった作業も、暑さのためみんなの脳をくるわせ、意味もなく笑い出すという恐ろしい現象をもたらしました。ケラケラ笑いつつスコップを振り回すあの姿…もう末期だったに違いありません。脳ミソが発酵したのでしょうか？！

さて、作業の話はこれくらいにして、作業のあとの恐ろしい話をしてみたいと思います。とにかく泥沼でした。部屋ではごろっと寝っころがって夜中までワニのおもちゃをピーピーならし、話しこんだり、酒盛、肝だめし、花火などをくりひろげたのです。毎夜ハードなスケジュールでした。おじさん夜あそびご

めんなさい。

こんな事をくり広げつつ夜は深まり、朝は、嶋田屋さんのあのおじさんの「おきよー」の叫び声でさわやかに目ざめたのであります。おじさんの叫び声に対し、「へーィ」と元気よく答えた方が約1名いらっしゃいました。大変不健全な夜を過しつつも、昼は元気に作業する健全な大学生に変身していたのであります。よく病気ひとつせずに帰ってきたなぁ。やっぱりパワーのもとは何たってマスちゃんのおかげだったのではないでしょうか。延勝寺にひきつづき、マスの大変おいしいこの地方ですから、毎夜欠かすことがありません。決してマスがきらいなわけではありません。ただあまりに慣れ親しみすぎたのかもしれません。夕方になると、「さあ、今日は煮てるか焼いたのかそれとも…」と調理法の当てっこなんかもしたりしていました。ああ、山田さん、どうしてあの時いらっしゃらなかったのかと…。そうです、「私、お魚大好きです」と言いつつマスをたいらげる姿を見せてほしかった。しばらくマスを食べる気にならなかったのは私だけでしょうか。

尾上での異常な世界のみを書かせていただきました。すべてを書き表わすことは不可能でしたが、あのころの様子が少しでも思いうかべられたらと思います。

様々とお世話になりました兼康さん、奈良さん、高橋さん、山崎さん、その他の方々、嶋田屋の方々、本当にありがとうございました。また、この「ああ、尾上物語」に登場していただいた方々に失礼をおわびします。

後日談として、尾上の人形代、馬形代などに関しては、新聞やテレビで報道されました。私はテレビを見のがして、あの坂本龍一に似た奈良さんがテレビに出ているところが見たかった!!今度どなたかテレビに出られる際には、ぜひ知らせていただきたく思います。私は見ます!!

雲雀山西尾根古墳群B支群調査

── 実測調査にいたる過程および現在における展望 ──

白江　人智

「関学考古8号」を出すべく、調査は84年10月13日のB支群下見から始まった。そして我々は「関学考古6号」に報告された以外の古墳のうち、3・4・5・13・14・15各墳の墳丘測量および3・4号墳の石室実測に着手したのであった。中心になるべき一・二回生は（私も含めて）、これまで古墳の測量などしたことがなく、調査は難行を極めた。いや、これを書いている現在においてもそうなのである。それはまさに試行錯誤の連続であった。まず平板測量の基本から身につけねばならなかった。それをマスターした上で、四回生の方々を煩わしながら3号墳の石室実測と墳丘測量にとりかかったのであった。かくて我々は赤山氏の下宿をアジトにして、土・日はひたすら雲雀へとかようことになったのである。当初、年内に一応の報告ができるとは言わないまでも測量ぐらい終わらせることができるであろうという甘い予測があったのであるが、どっこい測量は現在も続けられているというのが現状なのである。

しかし、ここへきて一応のメドがたつようになった。測量の方はほぼ終わりに近く、最後に残った難関である4号墳の石室実測もこの小冊子が刊行されるころにはほぼ終了を見ているであろうからである。

以上のようなわけで、「関学考古8号」発行の夢も85年度中には実現できそうであり、

それは今回の調査にあたり、多くの方々に御指導をいただき、現在も御指導をいただいていることをここに記して謝したいと思います。

なお、詳しい調査経過および反省点は調査の終了をもって何らかの形でご報告したいと思います。

――「どっこい」以来10カ月 原稿・写真・整図もあと一歩!!

松林　宏典

1984年度中はあれ程集中的に行なわれていた調査も芳しき「赤山邸」という一大拠点を失ってのち、加茂収蔵庫へ移ってからは1と月に多くて3日、少ない日は1日とやや怠慢ぎみであり乍らも12月26日の11号墳墳丘実測図をもって終わり、写真撮影もあと遠景と若干の補足をのこすのみである。なにしろ今年は、いわば「たま」にしか調査をしなかったため、1回毎の集中度が高くまじめテキパキで事件らしい事件もなかったように思う。若し、仮にあったとしてもそれは作業の密度の濃さの中で溶けてしまっているだろう。

5月に新入生が入ってきてイキナリ測量に行き、一年生達があまりにのみこみが早いので私達古顔はややおそれおののいたのであった。やはり早くから技術を身につけておくのはよいと思う。筆者自身も一年の時は現場にでてからかなりかかって修得したように記憶している。

さて、報告書の原稿もあら方できあがり、いよいよ実務的作業に入るわけだが、同時に次のフィールドへもそろそろ足ががりをつけておいた方がよさそうである。岡野氏とも少し話したのであるが、渡部氏のプッシュもあって、中山寺周辺の兼康氏の云う石棺仏も含めて、白鳥塚などの測量調査をしてみてはと思う。No.8整理がてら、少しづつその辺の資料収集もはじめてはいかがだろうか。

1年前にくらべ、要領を得たのか、測量作業も円滑かつスピーディにできるようになった。今後も、発掘を目標とせず、保存を目標とする現状測量調査を基盤とした活動をつづけていきたい。

一年をふりかえって

奥谷　聖子

この一年間は、考古学研究会としての行事にほとんど参加していなかったので特に印象的なことはありませんでした。けれども私は時間割の都合で研究室内の出来事はわりと把握している気でいます。

春の勧誘作戦（といってもポスターをかいただけですが）によって一回生の人たちが入ってくれたために四回生の抜けた寂しい会にも活気がついてきました。活気がついたついでに、いすはこわれる、かびははえる、ねずみはがさごそいう、私のかばんは水たまりにはまる、というような、その前の年には考えもつかなかったようなことが研究室内で次々と起りました。どれも楽しい思い出ですと言いたいところですが、上にあげたようなことは今年も起りうることが十分に考えられます。みなさん、研究室内での行動は、くれぐれも慎重に、そして研究室内の細かい観察を励行していきましょう！いすがこわれれば新しい物を自費で買うもしくはどこからか拝借してくる、かびが生えればカビキラーで退治する、ねずみが出れば素手ででもつかまえて甲山にでも持っていく、かばんを水にはめれば中芝で全部ひろげてかわかすもしくは新しいものを買う、このような努力をしてほしいものです。私はみなさんがやってくれることを期待しているのです。私はしません。

編集後記

☆　7号刊行以来6年ぶりの発刊です。全くの見様見まねでようやく完成しました。この間多くの方々に御指導頂きました。誌上より失礼ではございますが厚くお礼申し上げます。

☆　巻頭論文には我が研究会の顧問をしていただいている福島先生より御寄稿していただきました。文献史学にも、考古学にも片寄らないで歴史を解明しようとされる御姿勢がうかがわれます。尚、題字も先生に書いていただきました。

☆　'76年以来調査を続けております長尾山の古墳群の報告も4回目になりました。今後は中山寺周辺の調査を行うとともに、総合的な研究にもとりくんでいくつもりです。

☆　拝戸古墳群第3支群第10号墳の測量調査は、一昨年御卒業された渡部俊哉・赤山佳宏・山田勝彦三先輩によって行われたものです。発表の遅れたことをお詫び致します。

☆　兼康氏（滋賀県教育委員会）による中世石切場の踏査記は、この分野での研究はあまり見られず将来重要な資料となることでしょう。かって鬼の異名をとったOBの坂井氏(新潟県教育委員会）は、近年議論のかまびすしい古墳出現期の土器について、北陸地方の視点から紹介しておられます。

☆　岡野氏（川西市教育委員会）の横穴式石室の平面企画論も一層みがきがかかり、今回は更に畿内にまで検討範囲を広げ問題を深化させておられます。

☆　考古研歳時記は、私達の活動の様子が少しでも伝わればと思い企画しました。今後もよりユニークな誌面づくりをして行きたいと考えています。

☆　最後に、いつまでも考古学が自由に研究できる世の中であることを祈って……

顧　問：福島　好和（文学部・教授）

白江　人智（文・4）　奥谷　聖子（文・3）　佐々木尚子（文・3）
松林　宏典（文・3）　森澤　　史（文・3）　田川　純弘（文・2）
長尾　家典（文・2）　溝田カンナ（文・2）　吉田　健一（文・2）
赤松　恒治（法・1）　渡邊　大門（文・1）

関西学院考古　第8号

発　行　日　　1987年3月1日
編集・発行　　関西学院大学考古学研究会
西宮市上ケ原1番町1－155　関西学院大学
文学部内　　振替　神戸 1－43151
印　　刷　　冨士出版印刷株式会社

埋蔵文化財センター

62. 3. 20